

2023 年度
早稲田大学学生生活・学修行動調査報告書

2024 年 3 月

早稲田大学 大学総合研究センター

研究倫理番号 2020-169

目次

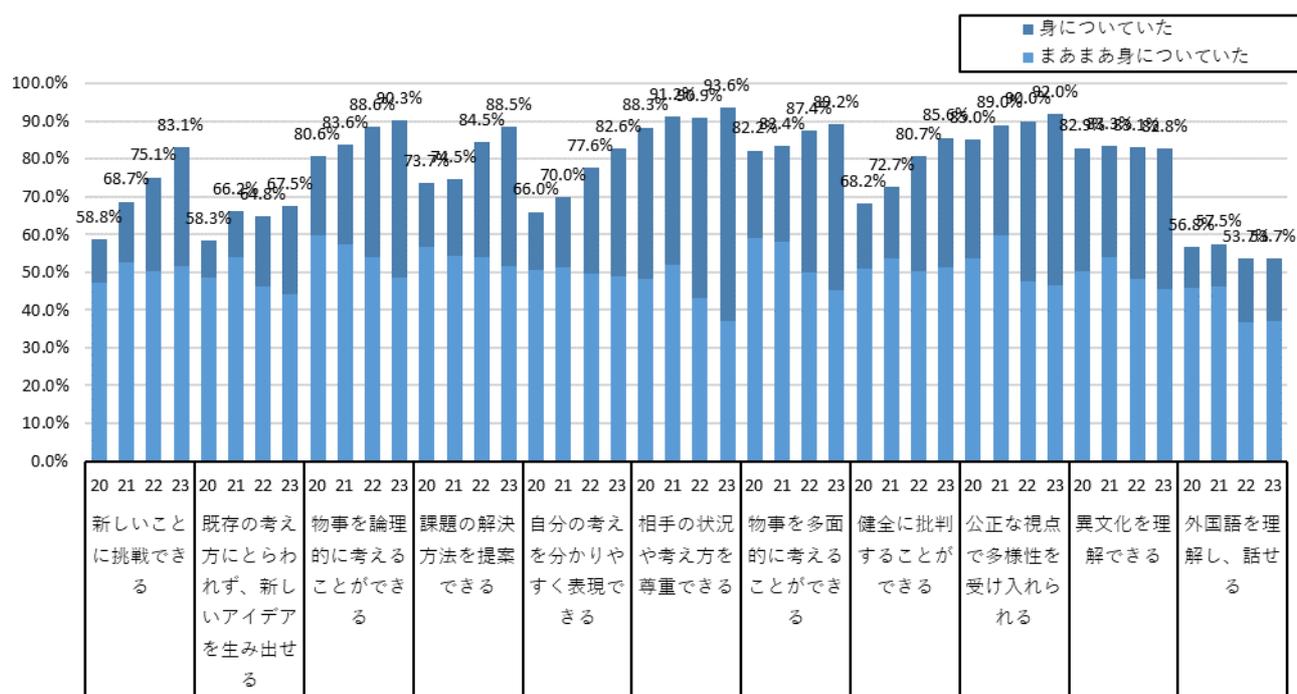
報告書概要.....	p. 2
第1章 調査概要と対象について.....	p. 3
1-1. 調査概要.....	p. 3
1-2. 調査対象時期と第4回目調査.....	p. 3
第2章 パネルデータの構築と分析に向けて—回答者の傾向.....	p. 6
2-1. はじめに.....	p. 6
2-2. 4年間の回答傾向.....	p. 7
2-3. 2020年度調査における回答者の分析.....	p. 8
2-4. 小括.....	p. 13
2-5. 4回継続回答者の共通項目の分析.....	p. 14
第3章 将来の見通しと在学時の教育経験の関係—4年間パネル調査から.....	p. 18
3-1. 将来の見通し別：在学時の教育経験の推移.....	p. 20
3-2. まとめ.....	p. 26
第4章 大学入学年次にコロナ禍の影響を受けた学生の4年間の分析.....	p. 28
4-1. 2020年度におけるコロナ禍での経済的あるいは学習環境の回答.....	p. 29
4-2. 2020年度コロナ禍における回答別：大学生活に関する項目の推移.....	p. 30
4-3. まとめ.....	p. 40
第5章 学習観・マインドセット4類型の傾向.....	p. 42
5-1. 学習観・マインドセットの調査項目と4類型.....	p. 42
5-2. 学習観・マインドセット4類型の特徴：入学後の経験や学習行動.....	p. 45
5-3. 学習観・マインドセット4類型の特徴：今現在の自分や 入学後に身についたこと.....	p. 53
5-4. まとめ.....	p. 59
5-5. 章末資料.....	p. 60
集計表.....	p. 67

報告書概要

学生生活・学修行動調査は、2019年度まで38回にわたって行われてきた学生生活調査を継承し、2020年度から新たに企画、実施されたものである。第4回目となる本調査は2023年6月23日から7月21日まで、オンライン調査ツール（クアルトリクス）を用いて日英両言語で作成し、実施された。対象は、早稲田大学の全学生（46,112名）で、回答総数は13,175名（回収率：28.6%）となった。

本報告書では、これまでの4回の調査に継続して回答している学生を中心にパネルデータの構築を行い、その特徴や各質問項目の推移や関係を分析している。第2章ではパネルデータの構築と分析に向けて、調査回答者の傾向を整理した。第3章ではパネルデータを用いて将来の見通しと在学時の教育経験の関係を、第4章ではコロナ禍の影響を受けた学生の特徴を記述している。また、第5章では2023年度調査のみを用いて学習観・マインドセットの質問項目を用いて類型化し、各々の特徴を整理した。

2020年度に入学し、学生生活・学修行動調査に4年間継続して回答した学生をパネルデータとして分析すると、早稲田大学が定めるディプロマ・ポリシーの修得度は多くの項目で学年があがるにつれて高まっていることが明らかになった（図概要）。



図一概要 学修成果の回答結果（肯定的回答のみ）の推移

入学当初からコロナ禍による様々な規制や全面的なオンライン授業の実施など未曾有の課題に直面していたものの、4年間を通じて着実に成長していく学生像が浮かび上がる一方で、「既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる」（構想・構築力）や「外国語を理解し、話せる」（国際性）については他の項目ほど高い上昇は見られなかった、あるいはほとんど変化しなかった。今後は、この結果が学年による経験の積み上げの結果なのか、あるいは社会的な出来事（コロナ禍の規制やオンライン授業等）の影響なのか、データを蓄積することを通じて明らかにする必要がある。

第1章 調査概要と対象について

1-1. 調査概要

学生生活・学修行動調査は、2019年度まで38回にわたって行われてきた学生生活調査を継承し、2020年度から新たに企画、実施されたものである。第4回目となる本調査は2023年6月23日から7月21日まで、オンライン調査ツール（クアルトリクス）を用いて日英両言語で作成し、実施された。対象は、早稲田大学の全学生（46,112名）で、回答総数は13,175名（回収率：28.6%）となった。

調査にあたっては、以下に示すように、全学の幅広い大学政策に資するような調査分析を行い、教育の一層の充実を通して、学生の成長に繋げ、それらを早稲田大学のステークホルダーである社会に対して示すことを目的とする。

- ・ **計画策定・政策形成への活用**：奨学金や学費などの大学政策検討時の基礎資料など
- ・ **社会的評価への活用**：在学時の満足度との相関分析など ※将来的に、卒業生調査より得られるデータと連結した分析も検討する
- ・ **評価活動への活用**：教学マネジメント検証、内部質保証検証など ※学修時間・学修行動の把握、公表および分析結果の授業等教育活動の見直しにも活用する
- ・ **学生の実態把握への活用**：入試形態別の学修成果等パフォーマンス分析や附属校・系属校出身学生のGPA以外での評価など ※学修成果の把握を通して、授業等教育活動の見直しに活用するのみならず、全体の集計結果を公表し、学生に周知することで学生本人の学修等の動機付けにも繋げる
- ・ **各種広報への活用**：入試説明会などの広報、および卒業生（校友）への広報など

なお、学生生活・学修行動調査は、学内の研究倫理を遵守の上実施し（研究倫理番号：2020-169、研究責任者：吉田文、実施代表者：遠藤健）、本報告書の全体の編集と執筆（第1章、第2章）を遠藤健（大学総合研究センター）、執筆（第5章）を山田寛邦（大学総合研究センター）、執筆（第3章、第4章）、編集補助・集計表の作成を丸川拓己（同学生スタッフ）が担当した。

学生生活・学修行動調査の結果は、個人が特定できないよう秘匿化した上で暗号化して管理している。その上で、ある回答者が各年度の調査に回答している場合には、それぞれの回答結果を回答者ごとに紐づけることが可能なパネルデータとして扱うことができるため、第2章～第4章では、パネルデータの構築や分析を中心に整理、記述した。また第5章では、2023年度調査のみを用いた学習観・マインドセットに着目した分析結果を示した。

1-2. 調査対象時期と第4回目調査

ここでは、パネルデータの分析対象者も含めた調査対象者となる学生の学修・生活環境の基本情報について整理する。2020年度初めに新型コロナウイルス感染症が国内に拡大し、早稲田大学では、4月の緊急事態宣言を受けキャンパスが立入禁止となり全面的なオンライン授業が実施され、拡大が収まると

徐々に対面授業へ戻す方針が示されるなど、新型コロナウイルス感染症拡大以降は、教育や課外活動へ影響があった。2023年4月には新型コロナウイルス感染症の扱いが、新型インフルエンザ等感染症から5類感染症へ移行されることで社会的な規制が大幅に緩和され、大学においても基本的な感染予防対策に留意しつつも、コロナ禍以前の学生生活が送れるようになった。

なお、早稲田大学では Waseda Vision 150 の核心戦略2「グローバルリーダー育成のための教育体系の再構築」の方針のもと、学生の学外の体験的・実践的活動に参加しやすい環境の整備を目的として、2023年度よりこれまでの90分授業から100分授業に移行することとなり、授業時間、回数に変更があった¹。

本調査では、新型コロナウイルス感染症の拡大が始まった2020年度当初からすると、教育や学生生活はコロナ禍以前の状況に戻りつつあったため、新型コロナウイルス感染症の影響を直接尋ねる質問項目は特に設けていない。しかしながら、第1回目の2020年度調査からその後の調査にも継続して回答している場合には、その後、新型コロナウイルス感染症及びそれによる様々な規制等がいかに教育・学生生活に影響を及ぼしたのか関係を見ることができると、第4章ではその点を検証している。

¹ 早稲田大学大学総合研究センター、2022、「100分授業のガイドライン」https://www.waseda.jp/inst/ches/assets/uploads/2022/10/waseda100guide_web_221007.pdf (2024年3月31日閲覧)。

第2章 パネルデータの構築と分析に向けて—回答者の傾向

2-1. はじめに

本章は、これまでの4回の学生生活・学修行動調査を用いて、パネルデータの分析の意義や課題を明らかにすることを目的とする。大学総合研究センターでは、2020年度から学生生活・学修行動調査を実施してきた。調査対象は早稲田大学の全学生（大学院含む）であり、2023年度で4回目の調査となった。4回の調査概要は表2-1の通りである。2020年度は11月～12月に実施したが、2回目以降は6～7月に調査を実施してきた。回答数は各回1万件を上回り、回答率は20～30%台となった。

表2-1 学生生活・学修行動調査の調査概要

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
調査時期	2020年11月16日～12月7日	2021年6月25日～7月16日	2022年6月24日～7月22日	2023年6月23日～7月21日
対象者数	46,309	45,884	45,587	46,112
回答数	10,665	10,835	14,535	13,175
回答率	23.0%	23.6%	31.9%	28.6%

調査結果は、集計・分析の上、学内の教学関連会議に報告するとともに、BIツールを活用し大学総合研究センターのWebサイトで公開し、かつ観点別の分析を各年度の報告書で学内外に発信してきた。分析の観点は、各年度の横断的なデータセットを用いて設定してきた。たとえば、早稲田大学が定めるディプロマ・ポリシーの達成度とその要因分析、学習成果と積極的な学修行動との関連分析、入学以前の意識や経験が入学以降の学習成果や学修行動に及ぼす影響などである。

以上の分析結果は、反復的な横断データの分析として、一定の知見を得ることが出来ているものの、学生の回答や得点の経年的な変化や推移、また各学年での特徴を捉えることは難しかった。そこでこれまでの調査データの一部を、縦断的なデータセット（パネルデータ）として構築し分析することで、同じ回答者のデータを線で結ぶことができ、回答者に生じた変化の有無、変化の軌跡、また各学年での特徴を捉えることができる。もっとも、パネルデータにすることで、データの欠損（回答者の離脱）が生じるなど欠点もあるため、横断的な分析と併用することが望ましい。

学生生活・学修行動調査の結果は、個人が特定できないよう秘匿化した上で暗号化して管理している。その上で、ある回答者が各年度の調査に回答している場合には、それぞれの回答結果を回答者ごとに紐づけることが可能なパネルデータとして扱うことができるため、第2章～第4章では、パネルデータの構築や分析を中心に整理、記述した。また第5章では、2023年度調査のみを用いた学習観・マインドセットに着目した分析結果を示した。本章では、4年間の調査にどのような学生が回答していたのか、その特徴を検討し（2-2～2-4）、4年間継続して回答した学生の共通項目の推移を記述する

(2-5)。このような検討は、学生調査そのものの意義や限界を把握し、調査結果を有効に活用するために必要な知見となるだろう。

2-2. 4年間の回答傾向

ここでは、2020年度入学者（4月・9月入学）に限定して、当時の1年生が4年間、学生生活・学修行動調査に回答していたのか、そのパターンを記述する。

表2-2は、2020年度入学者の4年間の回答パターンである。各年度に調査に回答する・しないの場合分けし16パターンを抽出した。

表2-2 4年間の回答パターン

No.	2020年	2021年	2022年	2023年	件数	%	通算GPAの平均	
1	—	—	—	—	4,305	48.2%	48.2%	2.322
2	—	—	—	回答	480	5.4%	24.6%	2.569
3	—	—	回答	—	469	5.2%		2.538
4	—	回答	—	—	429	4.8%		2.477
5	回答	—	—	—	817	9.1%		2.524
6	—	—	回答	回答	204	2.3%		2.578
7	—	回答	—	回答	104	1.2%		2.599
8	回答	—	—	回答	182	2.0%	13.9%	2.629
9	回答	回答	—	—	389	4.4%		2.642
10	回答	—	回答	—	214	2.4%		2.661
11	—	回答	回答	—	153	1.7%		2.670
12	回答	回答	回答	—	268	3.0%		2.776
13	回答	回答	—	回答	188	2.1%	8.1%	2.706
14	回答	—	回答	回答	136	1.5%		2.774
15	—	回答	回答	回答	133	1.5%		2.770
16	回答	回答	回答	回答	463	5.2%	5.2%	2.875
					8,934	100.0%	100.0%	

この16パターンで最も多かったのは、学生生活・学修行動調査に1回も回答していない学生群で48.2%であった（表2-2中のNo.1）。逆に、51.8%はいずれかの調査には回答していた（No.2~16）。次に、割合が多かったのは、2020年度（1年次）に回答したが、その後は回答しなかったケース（No.5）で、9.1%であった。3番目に多かったのは、2023年度（4年相当）のみ回答したケース（No.2）で5.4%であった。4番目に多かったのは、2022年度（3年相当）のみ回答したケース（No.3）と、2020年度から2023年度まで全て回答したケース（No.16）で5.2%であった。これらの回答パターンを整理すると、1年次の回答は多く見込まれるが、2年~4年相当で継続して回答してくれる学生は同入学年生のなかでは5.2%と決して多くはない。

また、これらの通算GPAの平均を算出すると、調査に回答し、回答数が多いほど通算GPAは高くなる傾向にある。次節では、これらの回答パターンからタイプを作成し、2020年度のデータを用いて、それぞれの特徴を分析する。

2-3. 2020年度調査における回答者の分析

ここでは、2020年度調査をもとに、上述した4回の調査回答の結果から作成したパターンの学生群の特徴を記述する。この年度の調査を分析対象としたのは、2020年度入学者が最も回答している調査であり、タイプ間の比較により継続して回答する学生の特徴を把握しやすいためである。しかし、ここで記述するのは、あくまで1年次にどのような学生であったのか、であるという点に留意しなければならない。

分析にあたっては、まず16のパターンから4つのタイプを抽出した。分析に使用する質問項目に回答しているサンプルに限定すると、タイプの1つ目は、1年次のみ回答したタイプ ($n=809$)、2つ目は1～2年次（相当：以下省略）に回答したタイプ ($n=388$)、3つ目は1～3年次に回答したタイプ ($n=259$)、4つ目は1～4年次に回答したタイプ ($n=458$) である。以下では、タイプ間で差がより大きかった質問項目を取り上げる。

まず、進学理由について差が見られた。具体的には、低学年次にのみ回答する学生は進学理由として「部・サークル活動」の充実をより重視しており、高学年時まで継続回答する群は、入試区分では推薦等の一般入試以外での入学者が相対的に多いと考えられる。

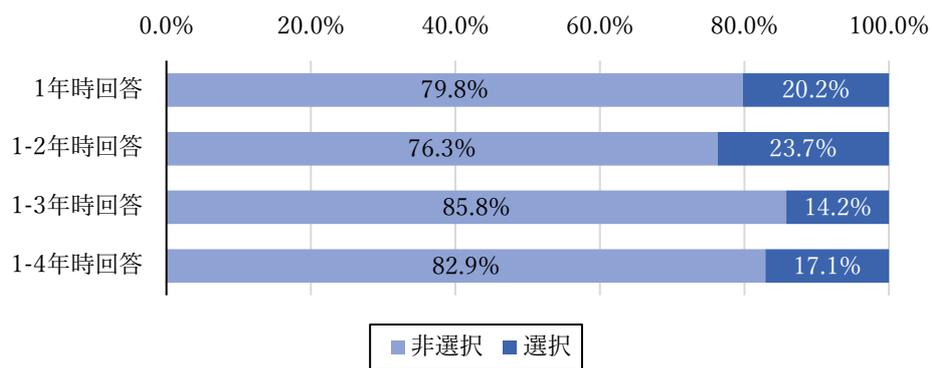


図2-1 進学理由_部・サークル活動が充実している

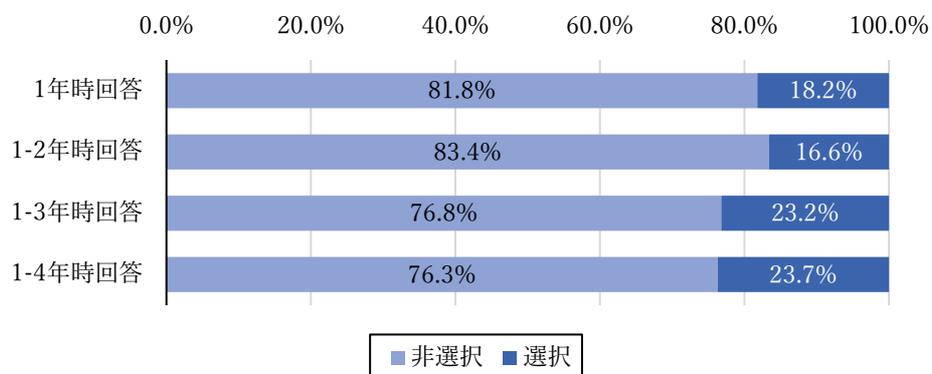


図2-2 利用可能な推薦・特別入試があった

一方、1～4年次全てに回答していた群は、進学理由として、希望した大学に入れなかったと回答した割合が8%程度多い(22.6%)。

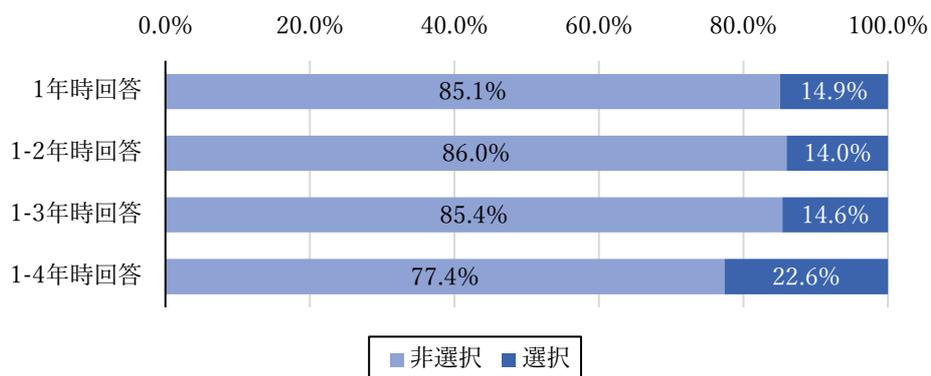


図2-3 希望した大学に入れなかった

次に、科目登録にあたって参考にする情報として、「MyWasedaのお知らせ」や「大学や学部事務所からのメール」、「大学や学部のHP」、「学部やセンターが発行している冊子(学部要項や手引きなど)」を選択する割合は、継続して回答している学生ほど高い。だからこそ、学生生活・学修行動調査の回答もする傾向にあるのかもしれない。

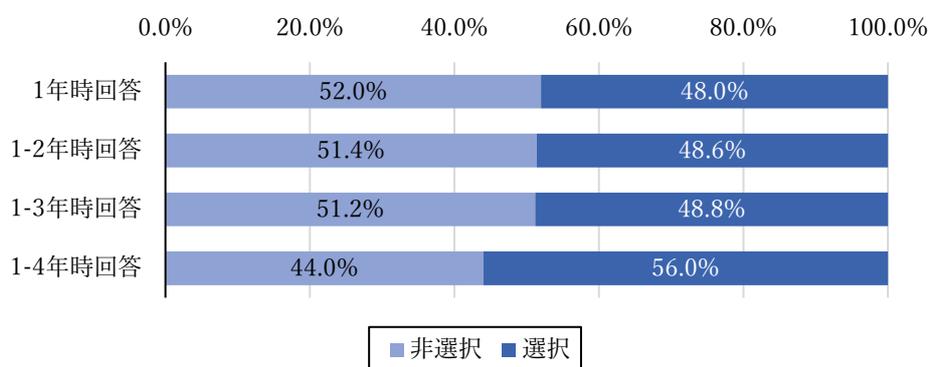


図2-4 科目登録にあたって参考にする情報_MyWasedaのお知らせ

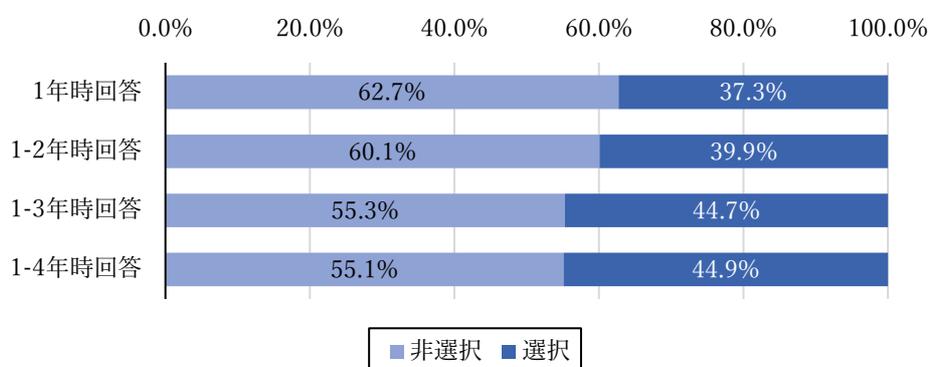


図2-5 科目登録にあたって参考にする情報_大学や学部事務所からのメール

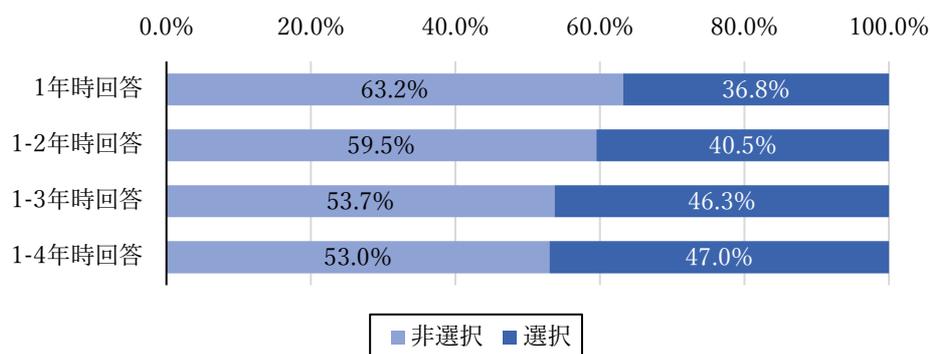


図 2-6 科目登録にあたって参考にする情報_大学や学部の HP

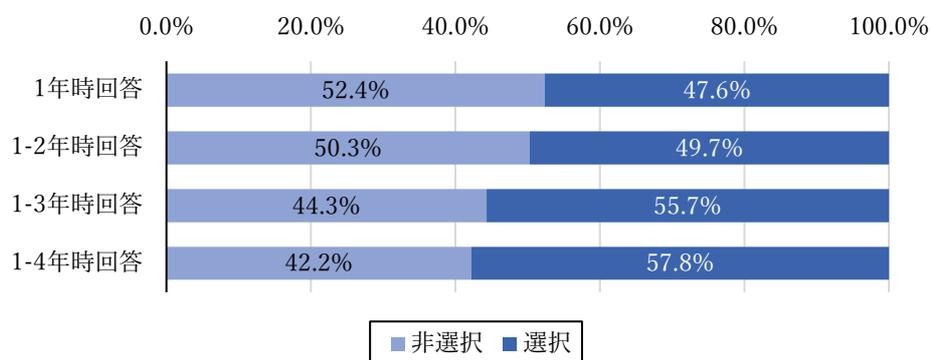


図 2-7 科目登録にあたって参考にする情報_学部やセンターが発行している冊子（学部要項や手引きなど）

次に、授業については4年継続して回答している学生群はコマ数がより多く、平均出席率も高くなる傾向にある。授業態度についてもより真面目な学生像が浮かび上がる。

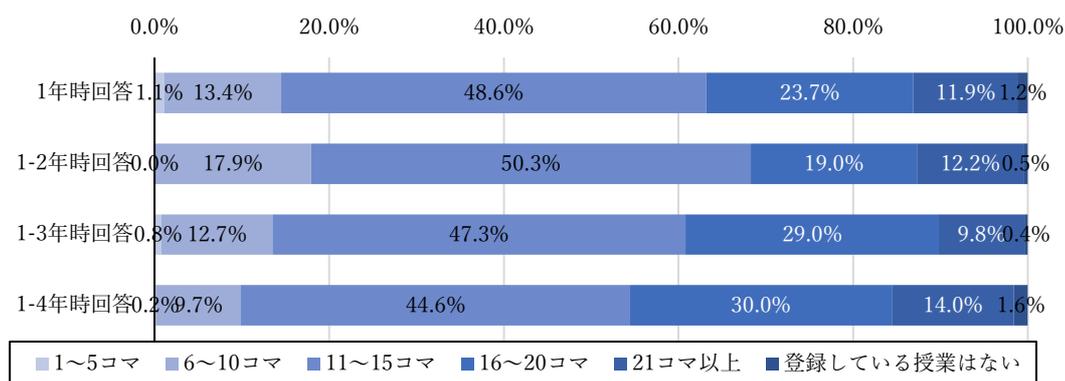


図 2-8 履修コマ数

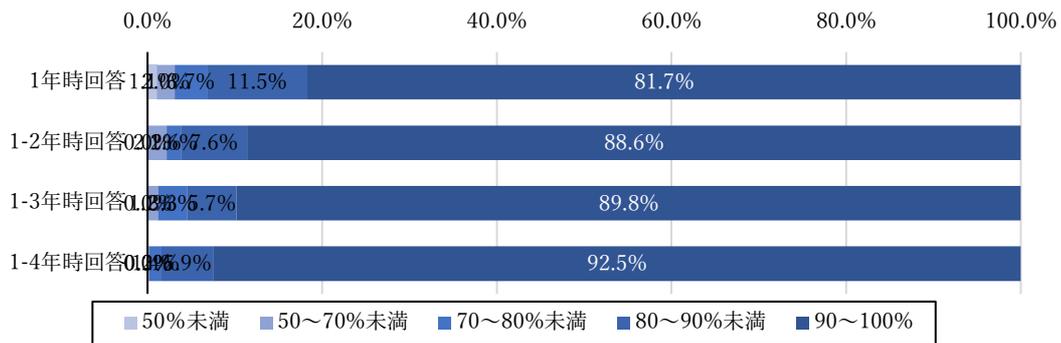


図 2-9 授業平均出席率

また、課外活動参加の状況を見ると、継続して回答している割合は、コロナ禍の2020年秋頃において、学生スタッフ、スチューデント・ジョブに参加している割合がやや高い。また1～3年次、1～4年次回答者は、2020年秋の段階でサークル活動にはあまり参加していない傾向にある。

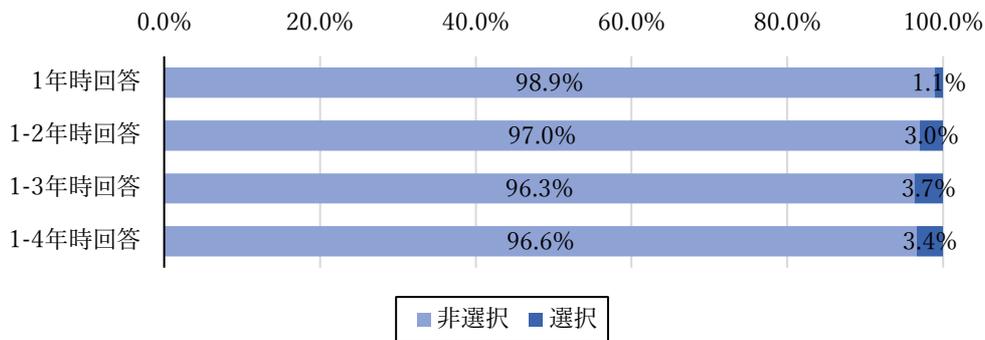


図 2-10 課外活動_学生スタッフ・スチューデント・ジョブ

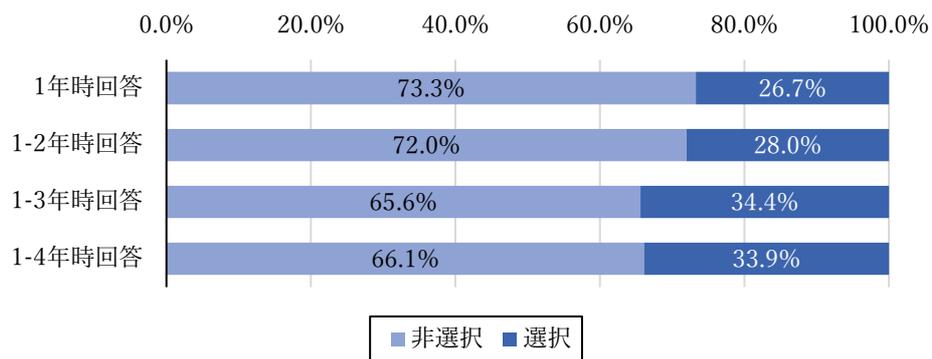


図 2-11 課外活動_所属・参加していない

さらに、修学上の不安として、心身的な健康状態をあげる割合がやや高く、精神面での健康に対する不安については1～3年次、1～4年次回答群では3割を超えていた。

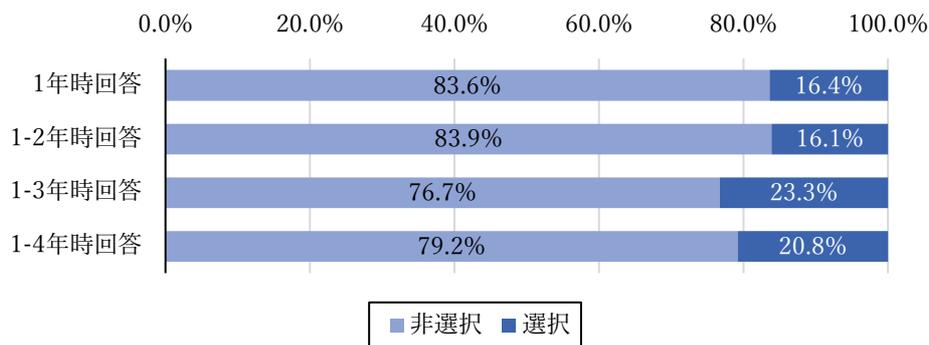


図 2-12 修学上の不安_身体面での健康

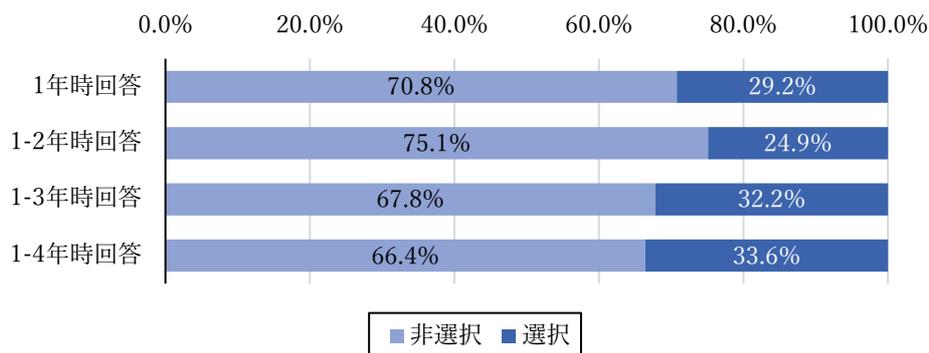


図 2-13 修学上の不安_精神面での健康

次に、その悩みを相談する相手として複数回答の結果を分析すると、「友人」と回答する割合は継続して回答するほど低くなる傾向にある。

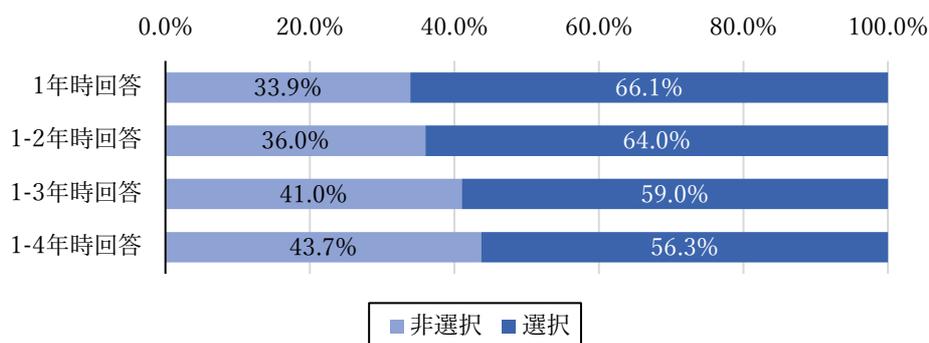


図 2-14 不安や悩みをあなたは誰に相談しますか_友人

最後に、2020年度調査（1年次）における進路の想定に関する質問でタイプ間の差がみられる。進路として、「早稲田大学の大学院」あるいは「早稲田大学以外の大学院」を選択する割合が、1～3年次、1～4年次の継続回答者が多い。1年次から大学院進学を念頭にしている学生がより継続して調査に回答していた。

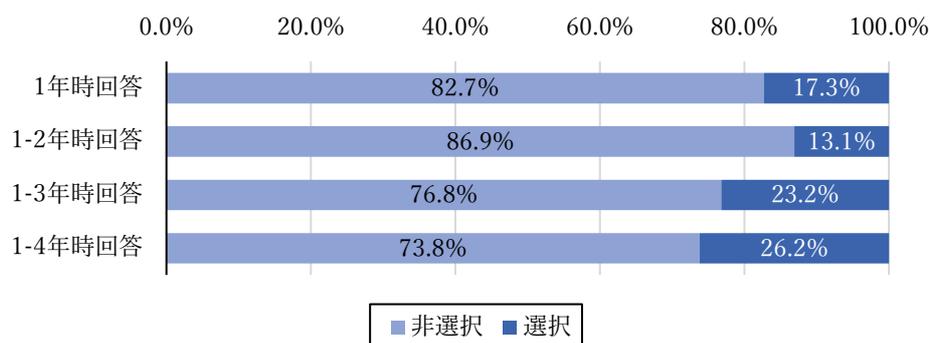


図 2-15 卒業後の進路__早稲田大学の大学院

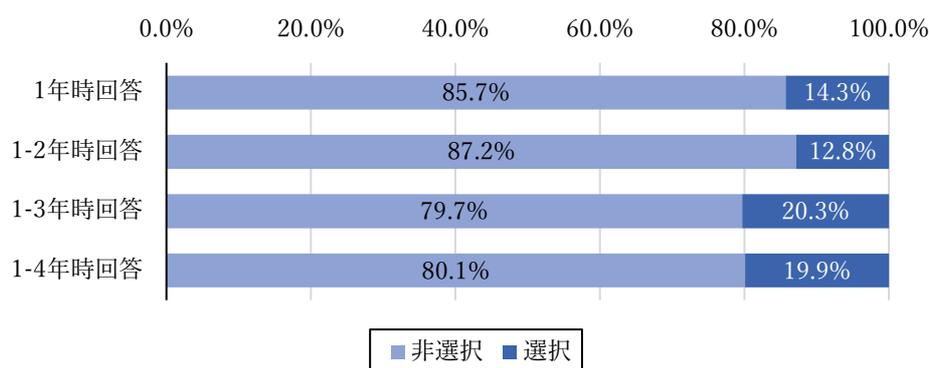


図 2-16 卒業後の進路__早稲田大学以外の大学院

2-4. 小括

これまでの4回の学生生活・学修行動調査を用いて、パネルデータとなる回答者の特徴を記述してきた。2020年度入学者（4月・9月入学）に限定して、当時の1年生が4年間、学生生活・学修行動調査に回答していたのか、そのパターンを記述すると、学生生活・学修行動調査に1度も回答していない学生は48.2%であり、51.8%はいずれかの調査には回答していた。また、2020年度から2023年度まで全て回答したケースは5.2%であった。回答パターンを整理すると、1年次の回答は多く見込まれるが、2年～4年相当で継続して回答する学生は同入学年生のなかでは5.2%と決して多くはない。また、通算 GPA の平均を算出すると、調査に回答し、回答数が多いほど通算 GPA は高くなる傾向にある。

継続回答している群の特徴を2020年度の調査から分析すると、①部・サークル活動の充実を期待して早稲田大学に入学している割合は相対的に低く、②科目登録にあたっては、大学からのオフィシャルな情報をより参考にしていた。また、③履修コマ数や授業出席率については相対的に多く（高く）、④課外活動に所属・参加していない割合が高い。また、⑤心身の健康状態は相対的に必ずしも良いとは言えず、⑥悩みを話す対象として「友人」を選択する割合は相対的に低い。最後に⑦進路としては、1年次から早稲田大学を含む大学院を希望している割合が高い。

これらの傾向から学生生活・学修行動調査に継続して回答する学生は、相対的に真面目で、科目登録にあたっては、大学のオフィシャルな情報を参考にしている。一方で、1年次の課外活動の所属・参加

は相対的に低く、健康状態は必ずしも万全ではなく、やや内向的な性格も想起させるものであった。また、顕著に大学院進学を進路としていたことについては、今後その背景を探りたい。

2-5. 4回継続回答者の共通項目の分析

本節では、2020年度入学者で4年間継続して回答した調査結果に基づいて4年間共通して尋ねていた項目の各時点の変化を記述する。データの件数は461である。

まず授業の平均出席率（図2-17）は、学年を経るに従って減少する傾向にある。1年生から3年生にかけて「90～100%」の割合が毎年10%程度減少している。

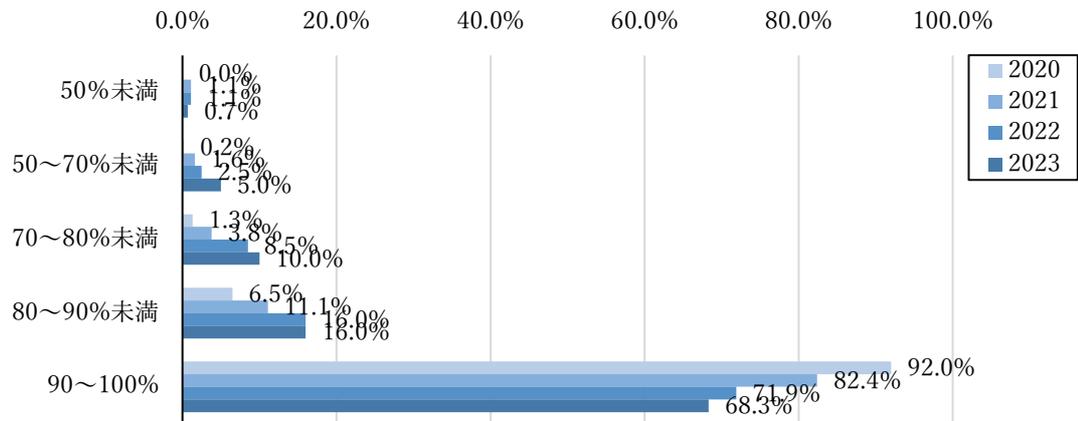


図2-17 授業の平均出席率の推移

次に教育経験（図2-18）では、いずれの項目も学年を経るに従って経験が増加している。特に「社会や現実との関わりを意識しながら学ぶ」については21年次（21.0%）から22年次（67.3%）の上昇割合が高く、コロナ禍の規制が緩和されたことも大きいと考えられる。

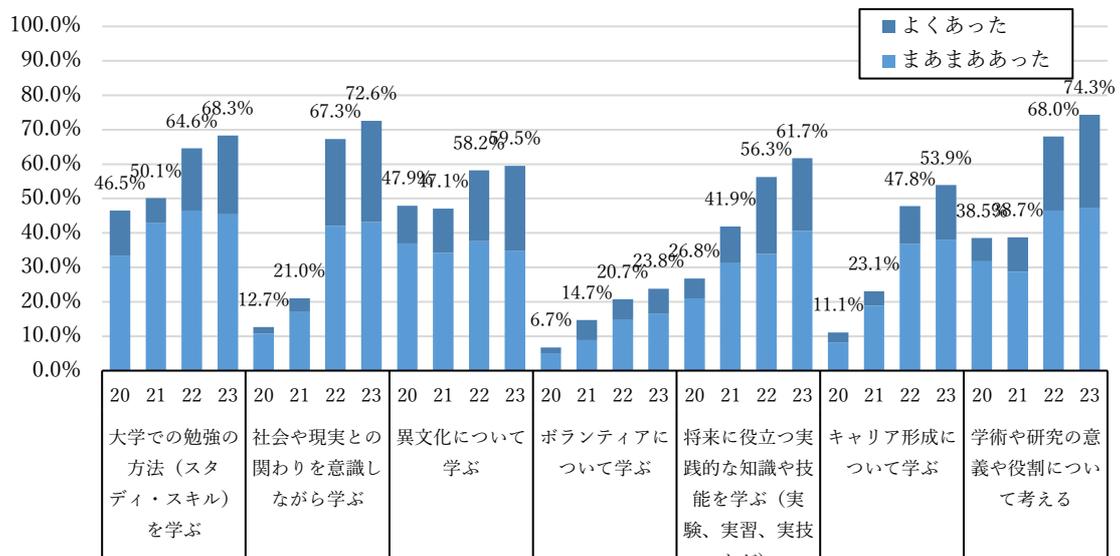


図2-18 教育経験の推移

また、3年次に「大学での勉強の方法（スタディ・スキル）を学ぶ」や「学術や研究の意義を考える」の項目も上昇しており、ゼミや卒業論文準備が開始されたことが影響している可能性もある。

学修行動（図2-19）については、肯定的な回答が増加した項目として、「グループワークなどで授業に積極的に参加する」や「分からない点は友達に質問した」、「資料を作成し、発表した」、「手帳やカレンダー等に課題提出期限をメモした」、「積極的な休養をとる時間を意識的につくった」があげられる。特にオンライン授業が中心であった20-21年においてもグループワークへの積極的な参加や資料を作成し、発表した経験については、約半分の割合が経験しており、かつ対面が再開されていった22-23年においてさらに高くなっていった。

また、「課題は締切までに提出した」や「理解できない点については、資料や動画を見返した」は4年間高い割合で推移し続けていた一方で、「分からない点は教員に質問した」については40～50%間を推移し変化はなかった。

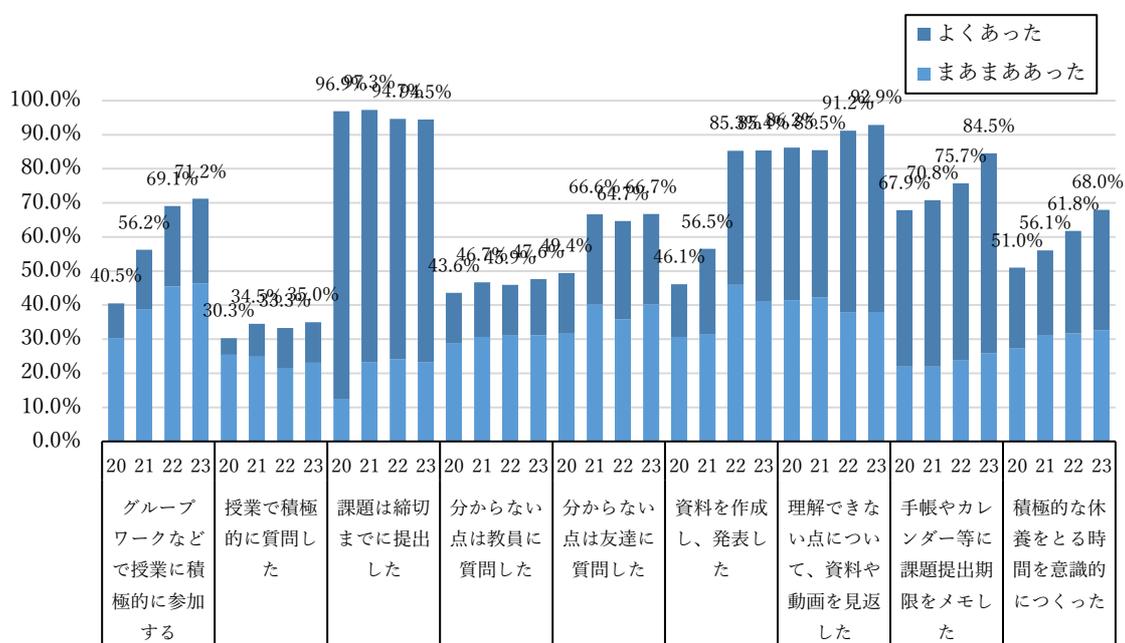


図2-19 学修行動の推移

身体・精神面での健康状態（図2-20）については、20-22年度まではそれほど変化はないが、23年次において精神面で健康であるとする回答の割合が若干高くなっている。身体・精神面の比較では、精神面で勉学に支障を来す割合が高く、月に1回以上支障がある割合は20-22年までは3割以上であった。

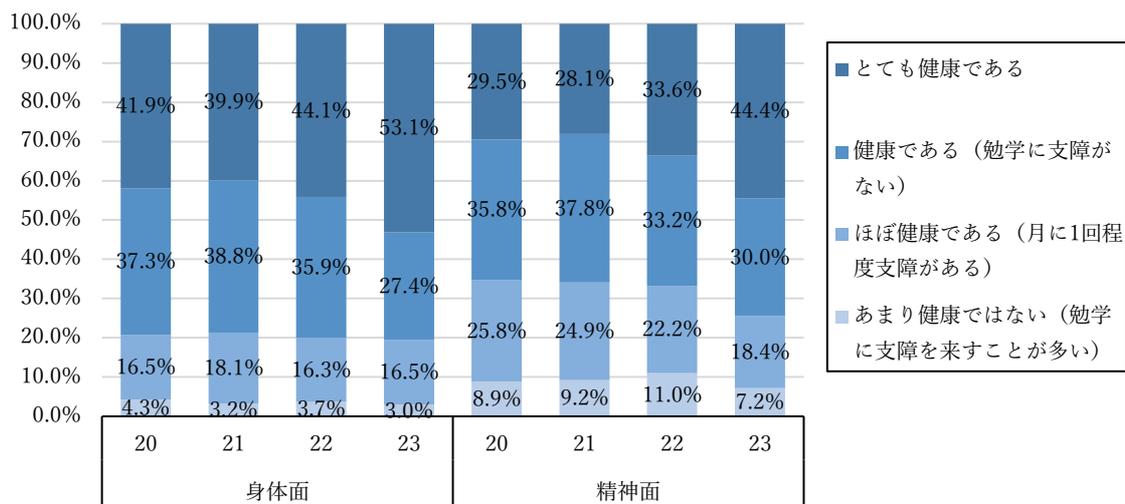


図 2-20 身体・精神面の健康状態

休学や退学等 (図 2-21) については、休学したいに「よくある」「まあまあある」と回答していた割合は 22 年次が最も高かった。退学については「よくある」「まあまあある」の割合が低く、それほど変化もない。「他の大学に入り直したい」については 20 年次に「よくある」「まあまあある」の割合が 15%程度であったが、年度を経るに従って減少している。分析対象が早稲田大学に在学する 4 年間回答者であるので、入学時点の意識が学年を経るに従って希薄化 (あるいは変化) していったと考えられる。転部・転科についても同様の傾向が見られる。

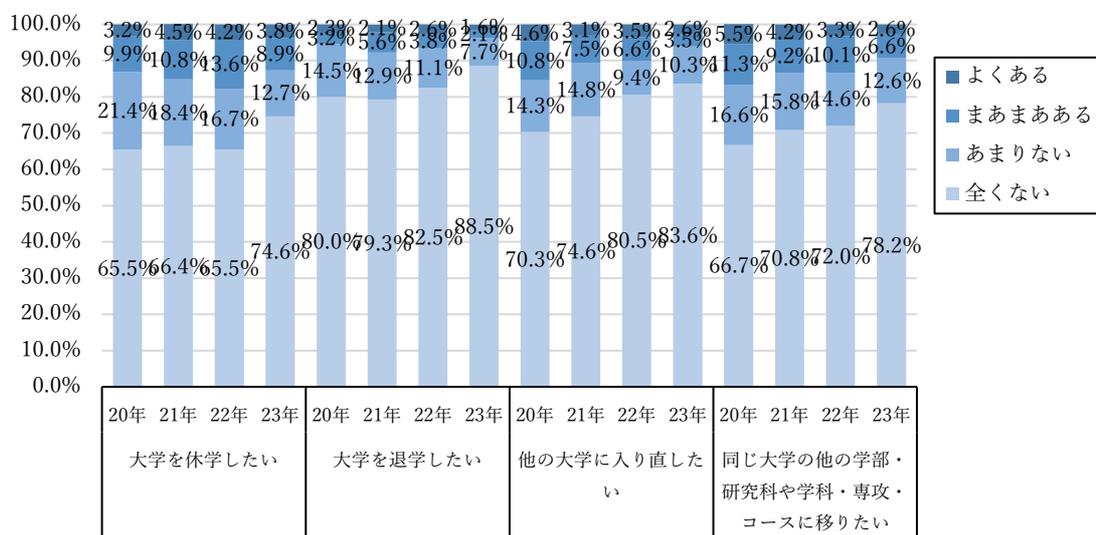


図 2-21 休学・退学等の推移

最後に、早稲田大学のディプロマ・ポリシーに基づいた学修成果の推移 (図 2-22) について肯定的な回答の割合を示している (図 2-22)。多くの学修成果が学年を経るに従って肯定的な回答の割合が増加している。特に、「新しいことに挑戦できる」(ディプロマ・ポリシーの構想・構築力に該当) については 20 年次 (58.8%) から 4 年次 (83.1%) への上昇幅が 24.3%と最も大きかった。「自分の考えを

「分かりやすく表現できる」(コミュニケーション力)についても20年次(66.0%)から4年次(82.6%)への上昇幅が16.6%と比較的高かった。他の上昇項目は20年次にすでに肯定的な回答の割合が高い。

一方で、「既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる」(構想・構築力)や「外国語を理解し、話せる」(国際性)については他の項目ほど高い上昇は見られなかった、あるいはほとんど変化しなかった。

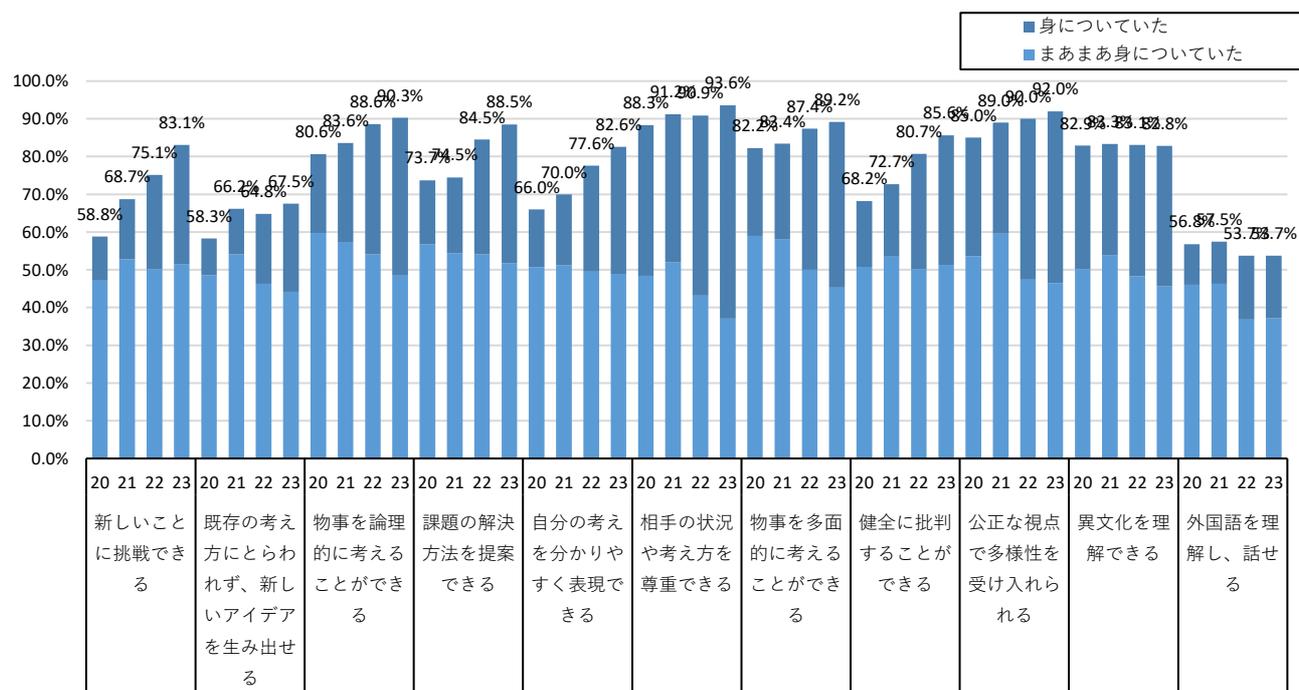


図2-22 学修成果の推移

以上、2020年度入学者に限定し、4回の調査の集計結果の推移を示してきた。教育経験や学修行動、学修成果の推移を見ると、入学当初からコロナ禍による様々な規制や全面的なオンライン授業の実施など未曾有の課題に直面していたものの、4年間を通じて着実に教育経験を重ね、成長していく学生像が浮かび上がる。今後は、各年度の推移が学年による経験の積み上げの結果なのか、あるいは社会的な出来事(コロナ禍の規制やオンライン授業)の影響なのか、データを蓄積することを通じて明らかにする必要があるだろう。

第3章 将来の見通しと在学時の教育経験の関係—4年間パネル調査から—

本章では、第2章でも扱った4年間のパネルデータ ($n = 461$) を活用し、4年生時点における「将来の見通し」と、4年間の在学時の教育経験の関係について示していく。

在学生の将来の見通しに関する状況について、2023年度調査では、主に二つの質問項目を設定した。一つ目は「自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたいという考え）を持っていますか」という質問であり、「見通しを持っている」「見通しを持っていない」の二通りの選択肢を提示した。続いて、「見通しを持っている」と回答している人のみを対象に、二つ目の質問として「あなたは、自分の将来についての見通し（将来このような生活・状態でありたいという考え）を持っていますか。また、持っている場合は、その見通しに関するいまの状況についてもお答えください」という質問を行った。これに対する回答は、「見通しに関して何をすべきかわかっているし、実行もできている」「見通しに関して何をすべきかわかっているが、実行はできていない」「何をすべきかはまだわからない」という三通りの選択肢を提示した。この質問項目は溝上編（2001）などで示されてきた「二つのライフ」としての日常生活と人生に関するキャリアを問う質問項目となっている²。本項目は、この二つの質問によって、学生が大学における学修や学生生活を通して、自らの将来の人生と現在における実行にどのような結びつきを感じているかを問うことを目的としていた。

本章では、大学生生活の4年目におけるこの二つの質問への回答ごとに、在学時の教育経験がどのように異なるかを確認する。それを通して、将来についての見通しや、その現在における実行に資するような在学時の教育経験にはどのようなものがあるのかを明らかにすることを目的とする。

前提として、この二つの回答に対する2023年度調査（回答者4年次時点）での回答の傾向を確認しておく、以下のような結果となった。まず、4年間継続回答者の「自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたいという考え）を持っていますか」という質問に対しては、およそ8割弱（76.4%）の学生が「見通しを持っている」と回答し、「見通しを持っていない」と回答した群は2割ほど（23.6%）という結果になった（図3—1）。次に、「持っている」と回答した群のみを対象とした「見通しに関するいまの状況についてもお答えください」という質問に対しては、「見通しあり+実行あり」群が半数近く（47.3%）を占め、「見通しあり+実行なし」群が3割程度（31.6%）、「何をすべきかはまだわからない」群は最も低く2割程度（21.1%）という結果となった。これらの結果から、4年間継続回答者は、比較的多くの割合で将来への見通しを持っている一方で、その見通しに向けた現在の状況という面からみると、やや散らばりも見られるといった状況であることがわかる。

² 溝上慎一（編）、2001、『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版。

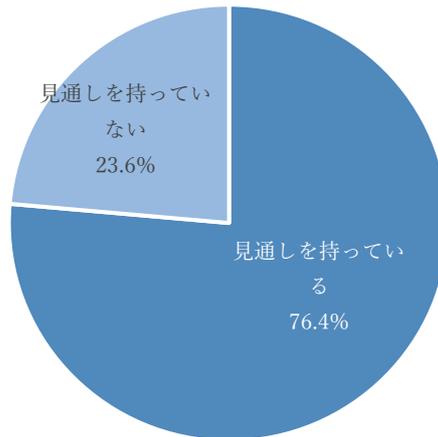


図3—1 将来への見通しの有無

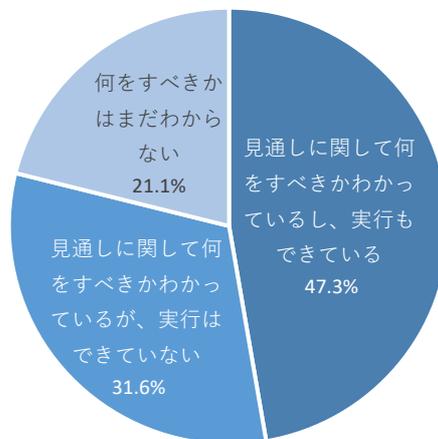


図3—2 将来への見通しに向けた現在の状況

上記の結果をふまえ、①4年間回答者において、見通しを持っている群と持っていない群で在学中の教育経験に差はみられるのか、②4年間回答者で「見通しあり」と回答した群のうち、現在の状況に関する回答群ごとに在学中の教育経験に差はみられるのか、という二つの観点から分析を行っていく。次節では、2020年度調査からの4年間の「在学時の教育経験」の推移に着目し、「将来の見通し」に関する回答群ごとに、その推移の差を確認していく。

なお、分析にあたっては第2章と同じパネルデータを用い分析を行い、2023年度調査時点で4年生の回答者のみを対象としている。毎年度4度の調査に回答している学生であるため、母集団と比べるとやや肯定的な回答が多いことも予想される点には留意する必要がある。また、2020年度・2021年度調査では「将来の見通し」に関する質問を設定していないため、4年次時点（2023年度調査）での回答ごとに分析を進めていく。このため、1年次時点からすでに将来の見通しがある学生と4年次になって将来の見通しを得た学生といった違いをここでは考慮に入れることはできない。よって、本章は特定の教育経験と将来の見通しに関する回答の因果関係を把握することが目的ではなく、4年間の推移を確認することを通して、どの時点で、どの教育経験が将来の見通しや現在における実行に関連があるかどうかをまず明らかにすることを目指す。

3-1. 将来の見通し別：在学時の教育経験の推移

本節では、在学時の教育経験に着目して分析を行った各グラフの結果を検討していく。図の線グラフでは、それぞれの教育経験において4件法の回答のうち「まあまああった」と「よくあった」の割合を調査年度別に示している。相当する学年があがるにつれ、線グラフが右肩上がりになると、該当する教育経験をより経験した割合が高まったことになる。以下、4年間回答者が回答した「将来の見通しの有無」(n = 436) 及び「(将来の見通しごとの) 現在の状況」(n = 332) ごとに群を分け、それぞれの4年間の教育経験の推移を確認していく。なお、これらは、2023年度調査に基づく分類である。

まず、「大学での勉強の方法(スタディ・スキル)を学ぶ」については、「将来の見通しあり」群の方が入学時点ではやや高い傾向にあるが、4年次にはその差はほとんどなくなった(図3-3)。また、図3-4の「現在の状況」ごとに見ると、1年次にはやや差が見られるものの、その後は差が徐々に縮まっていく形で推移していた。

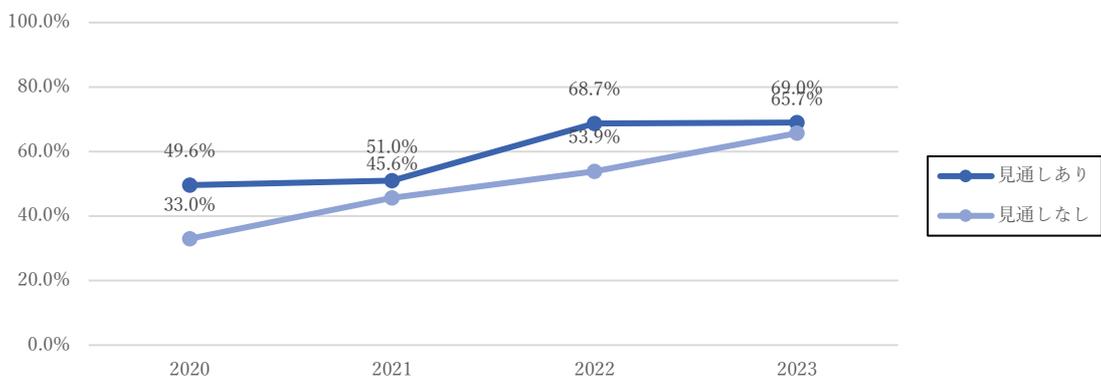


図3-3 「将来の見通し」別—大学での勉強の方法(スタディ・スキル)を学ぶ

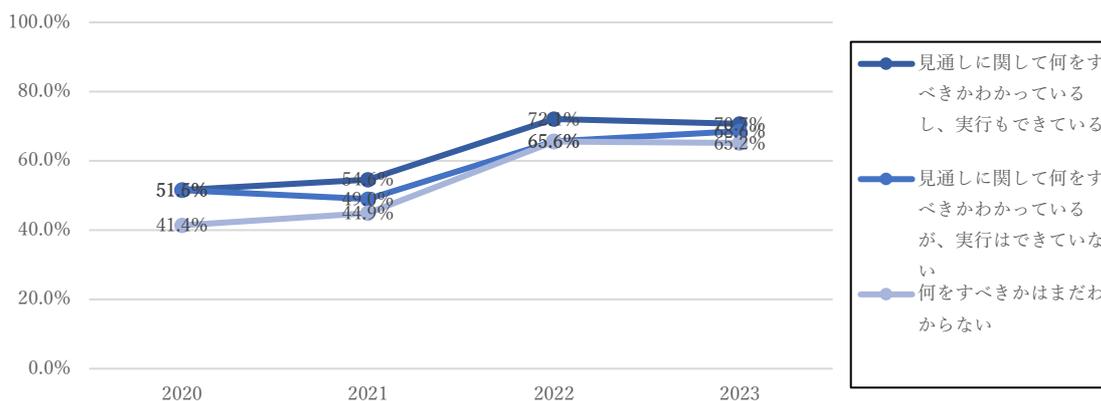


図3-4 「現在の状況」別—大学での勉強の方法(スタディ・スキル)を学ぶ

次に「社会や現実との関わりを意識しながら学ぶ」については、1年次から3年次までさほど差はなく推移していたが、4年次になると「将来の見通しあり」群の方が肯定的な回答の割合が14%高くなるという結果となった。一方で、「現在の状況」別にみると、「見通しあり」+「実行あり」群と「何をす

べきかわからない」群のあいだに1年次から12.7%の差があり、4年間の推移の中でこの差はやや縮まるものの完全には収束していなかった。「見通しあり+実行なし」群については、3年次に「何をすべきかわからない」群よりやや相対的に低くなったが、他の学年ではおよそ他の群との中間ほどの割合となった。

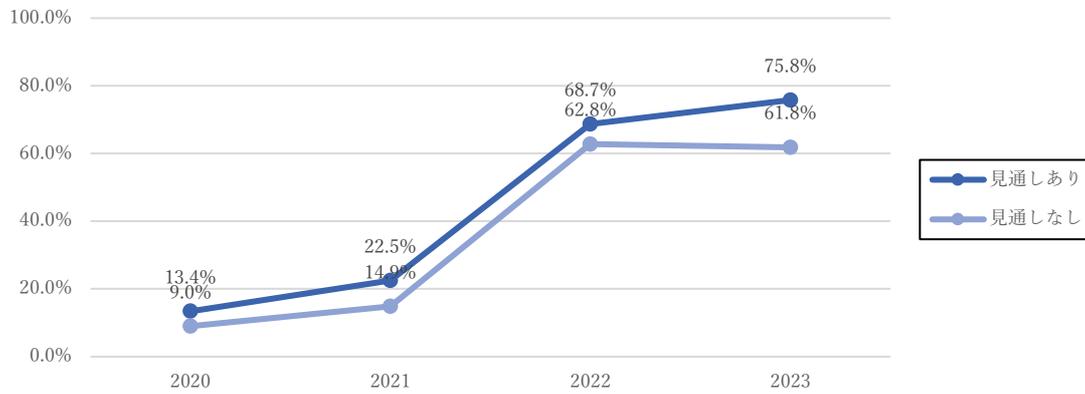


図3—5 「将来の見通し」別—社会や現実との関わりを意識しながら学ぶ

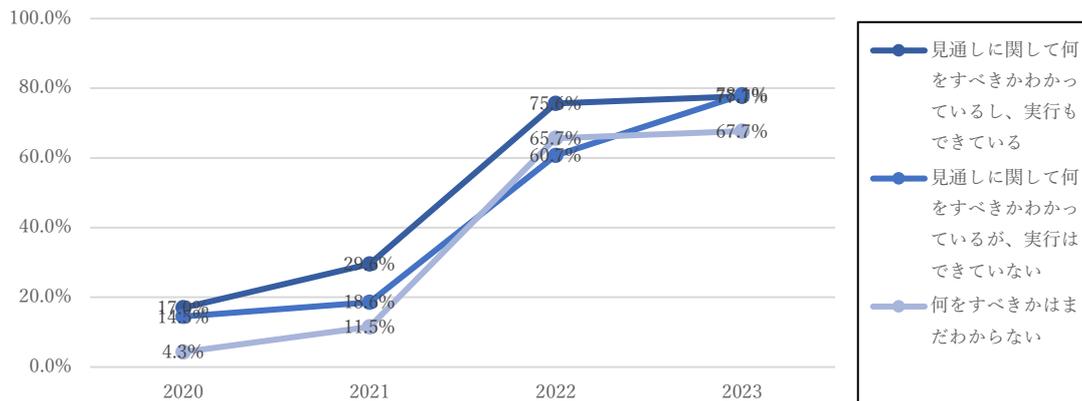


図3—6 「現在の状況」別—社会や現実との関わりを意識しながら学ぶ

一方で、「異文化について学ぶ」についてみると、「将来の見通し」別の4年間の回答傾向は、1年次では肯定的な回答の割合に12.7%の開きがあったものの、その開きは徐々に縮まっていき、4年次にはほとんど差がなくなった。また、「現在の状況」では、1年次時点では「見通しあり+実行あり」群と「何をすべきかまだわからない」群がほぼ同じ値を示しており(54.9%・54.3%)、「見通しあり+実行なし」群が最も低い値となった(41.8%)。しかし2年次以降は「見通しあり+実行なし」群が最も伸び幅が大きく、4年次には最も高くなった(63.9%)。

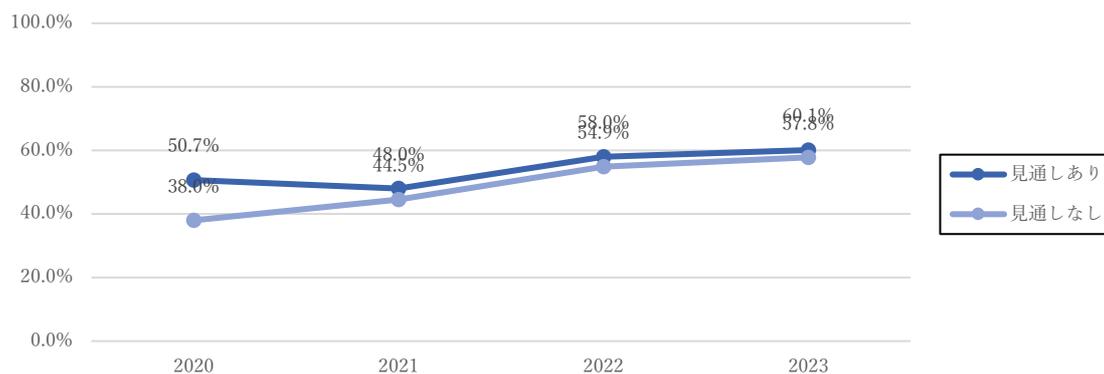


図 3—7 「将来の見通し」別—異文化について学ぶ

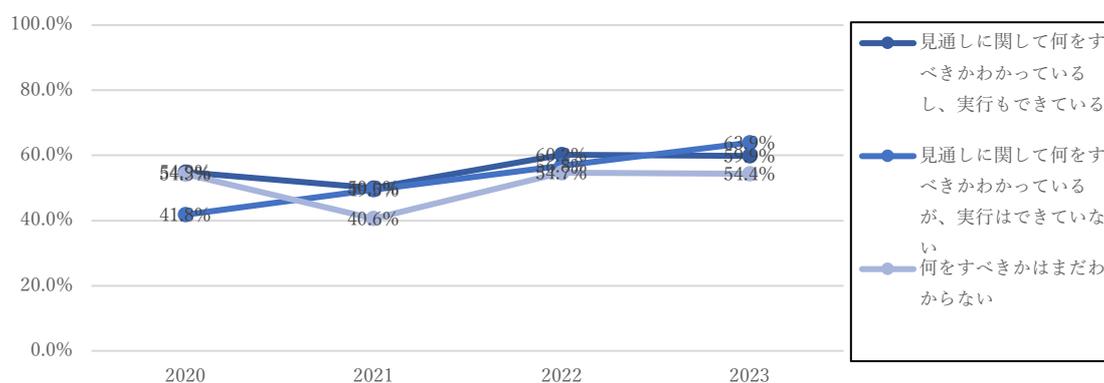


図 3—8 「現在の状況」別—異文化について学ぶ

「ボランティアについて学ぶ」の回答傾向の推移をみると、1年次では「将来の見通し」「現在の状況」ともにほとんど差がみられず、3年次・4年次に若干ではあるが肯定的な回答の割合の差が開いた。ただしその差の開き方は比較的緩やかで、4年間を通した肯定的回答の上昇の推移も顕著には現れていない。

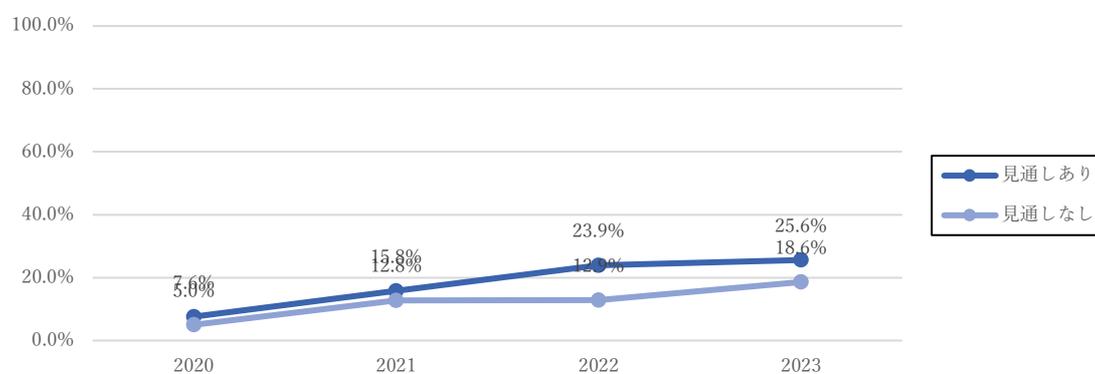


図 3—9 「将来の見通し」別—ボランティアについて学ぶ

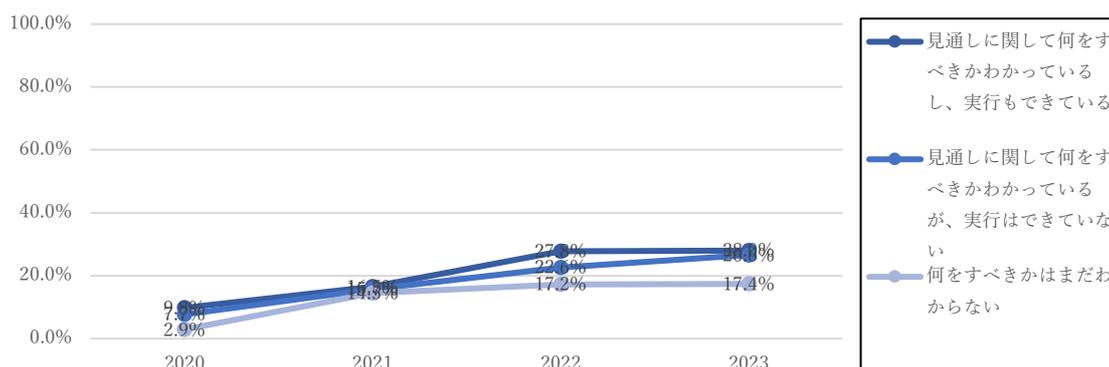


図3—10 「現在の状況」別—ボランティアについて学ぶ

「将来に役立つ実践的な知識や技能を学ぶ（実験、実習、実技など）」については、まず「将来の見通し」別にみると、1年次から2年次にかけて肯定的な回答の割合が逆転するという結果となった。1年次ではやや「見通しあり」群の方が肯定的な回答の割合が高いが、2年次になると「見通しなし」群の肯定的な割合が「見通しあり」群よりも10%高くなった。その後3年次にはもとに戻り、「見通しあり」群の方が「なし」群より肯定的な回答の割合がやや高くなった。「将来の見通し」だけでみれば、「将来に役立つ実践的な知識や技能を学ぶ」が4年間でどのように影響しているのかは読み取りがたい。

一方で、「現在の状況」についてみると、全体的に年度を経るにつれて肯定的な回答の割合の差が開いていく傾向を示した。特に「見通しあり+実行あり」群と「何をすべきかはまだわからない」群の割合の差は、1年次時点では10.8%だったものが3年次には22.4%に開いており、「見通しあり+実行なし」群と「何をすべきかわからない」群の差も3年次に最も大きく開いた。このことから、就職活動が本格化する4年次より以前の2・3年次における経験の差の開きと、4年次の「現在の状況」には関連があることが推測できる。

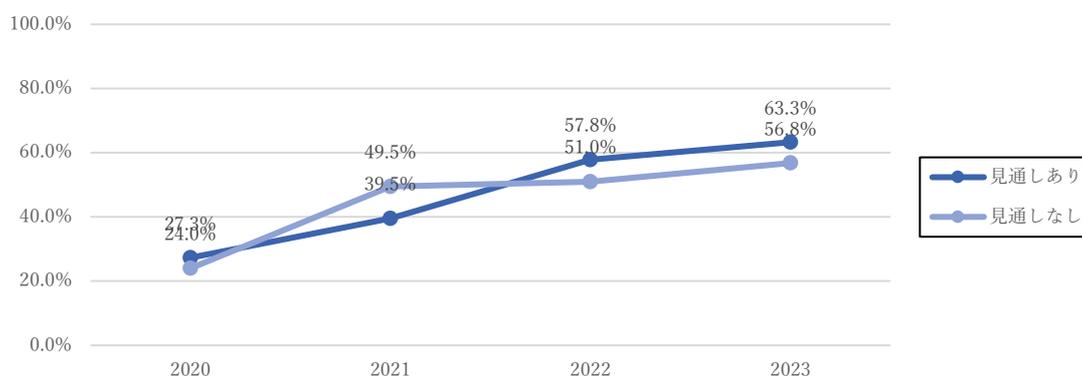


図3—11 「将来の見通し」別—将来に役立つ実践的な知識や技能を学ぶ
（実験、実習、実技など）

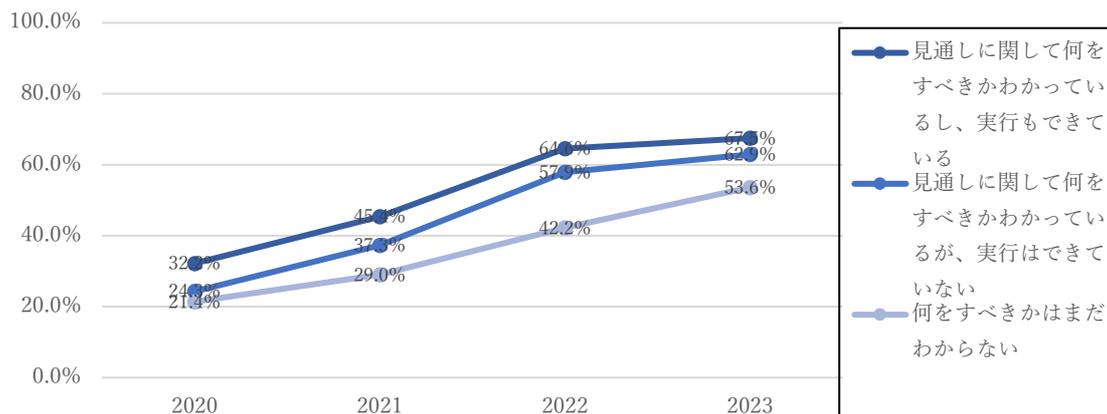


図3—12 「現在の状況」別—将来に役立つ実践的な知識や技能を学ぶ
(実験、実習、実技など)

次に、「キャリア形成について学ぶ」について、「将来の見通し」別にみると、他の項目より相対的に顕著に差があることが見て取れる。すでに1年次において8.5%の差がみられるが、その差は3年次に22%、4年次に24.4%と大きく開き、「将来の見通しあり」群の方が肯定的な回答の割合が高くなった。この差の開きは他の項目と比較しても相対的に大きく、将来の見通しの有無に対しては、特に3年次以降のキャリア形成についての学修と関係性があることが推測される。

一方で、将来の見通しあり群ごとの「現在の状況」について比較すると、1年次と3年次はほとんど差が収束した一方、2年次に「見通しあり+実行あり」群が他の群より10%ほど肯定的な回答の割合が高くなり、3年次にその差は収束するが、4年次に再びその差が開くという結果となった。



図3—13 「将来の見通し」別—キャリア形成について学ぶ

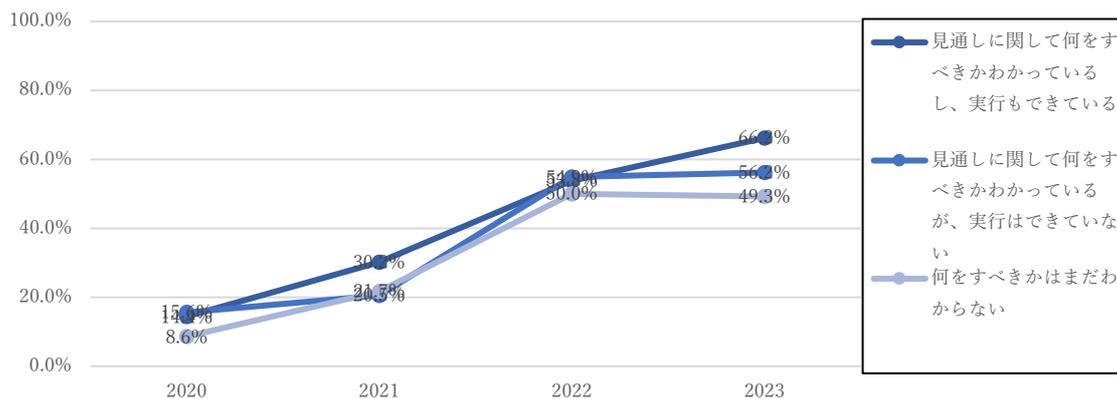


図3—14 「現在の状況」別—キャリア形成について学ぶ

最後に「学術や研究の意義や役割について考える」についての回答傾向をみると、「将来の見通し」の有無については、1年次に12.2%の差が開いていたが、その後3年次には差がなくなった。

一方で、「見通しあり」群ごとの現在の状況についてみると、「見通しあり+実行あり」群と「何をすべきかわからない」群には9.4%の差がみられたが、その後「見通しあり+実行あり」群と「実行なし」群の肯定的な回答の割合は逆転し、4年次に至るまで「見通しあり+実行なし」群の方が肯定的な回答の割合が高くなった。

全体的に3年次に肯定的な回答の割合が高くなった点については、多くの回答者が3年次に入り多くの学部等において開始される「ゼミ」への参加によって、3年次に肯定的な回答の割合が全体的に底上げされているのではないかと考えられる。ただし、具体的な実行の有無について「実行なし」群の方が「学術や研究の意義や役割について考える」の肯定的な回答の割合が高いことについては、例えば大学院への進学などの関係で、具体的な就職行動などとは異なる進学をした回答者などが該当している可能性がある。

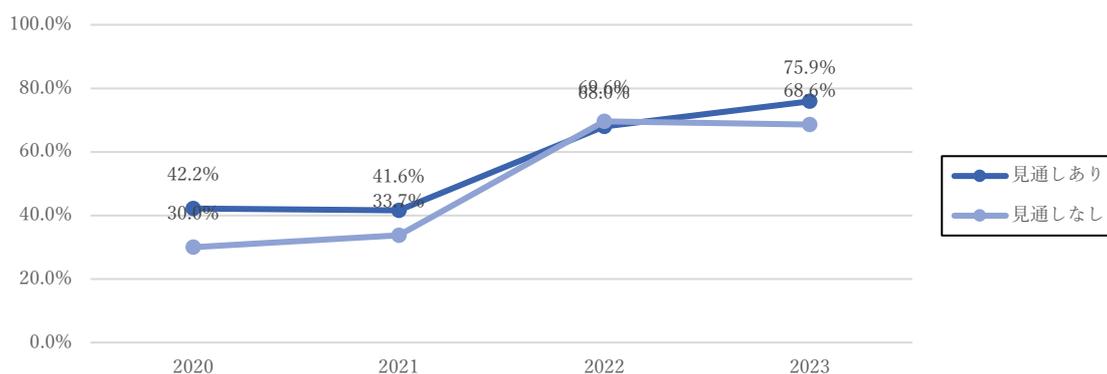


図3—15 「将来の見通し」別—学術や研究の意義や役割について考える

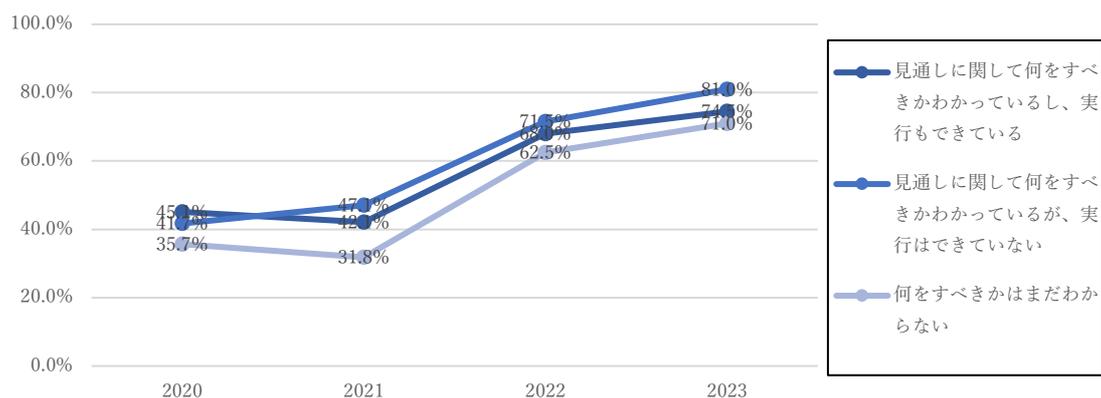


図3—16 「現在の状況」別—学術や研究の意義や役割について考える

3—2. まとめ

本章では、4年間回答者が4年次に回答した「将来の見通し」及び「現在の状況」に対する回答ごとに、大学における4年間の教育経験の推移を確認してきた。本章は、あくまでも教育経験と将来の見通し間の関係の推移について検討したものであり、在学時の特定の教育経験が、将来の見通しに影響を与えているか否かの正確な因果関係を把握できるものではないことに留意する必要がある。例えば、キャリア形成について学んでいるから4年次に将来の見通しがあると回答することもあれば、すでに1年次から将来の見通しがあり、そのためキャリア形成に関する学びに積極的だった可能性も想定できる。この因果関係を厳密に探るためには、パネルデータの更なる蓄積とより詳細な分析が必要である。

一方で、パネル調査に基づき4年間の教育経験の推移を確認できたことで、4年次時点での「将来の見通し」及び「現在の状況」に対する回答にとって、どの時点での、どの教育経験が回答の傾向に関連している可能性があるかという点については一定の示唆を得られたと考えられる。以降、この点に関連して特徴的な傾向を示したものを確認しておきたい。

まず、「将来の見通し」について、特に他の項目と比較して相対的に差が顕著にみられたものを挙げる。まず、「社会や現実との関わりを意識しながら学ぶ」では、初年度時点では「見通しあり」群と「なし」群で4%ほどの差であり3年次には同程度の推移で上昇していくが、4年次になるとその差は15%となった。また、「キャリア形成について学ぶ」では、1年次では8.5%程度の差であったが、その差は特に3年次になると大きく開き、4年次には24.4%ほどの差へと開いた。こうした結果をふまえると、特に3年次から4年次という就職活動を意識するようになる段階における、「社会や現実に関連した学び」や「キャリア形成に関連する学び」の経験は、4年次時点での将来の見通しの有無と関連があることが推測できる。

次に、見通しに関する「現在の状況」についてである。まず、「将来の見通し」と同様に「社会と現実との関わりを意識しながら学ぶ」において差がみられた。すでに1年次時点で「見通しあり+実行あり」群と「何をすべきかわからない」群に12.7%の差があったが、2年次になるとその差は18.1%となり、その後3年次・4年次になると差は継続するものの10%ほどの差に収束した。また、他の項目では

異なる傾向が確認できた。「将来に役立つ実践的な知識・技能を学ぶ（実験、実習、実技など）」では、すでに初年次時点で「見通しあり＋実行あり」群と「何をすべきかわからない」群に 10.8%の差があったが、2年次に徐々にその差は開き（16.4%の差）、また「見通しあり＋実行なし」群と「何をすべきかわからない」群の差も開いていった（8.3%の差）。最も差が開くのは3年次時点であり、「見通しあり＋実行あり」群と「何をすべきかわからない」群の際は 22.4%まで開いた（4年次になると、その差はやや縮まった）。これは、「将来の見通し」の有無においては顕著に差が開いた「キャリア形成について学ぶ」と比較しても、特徴的な傾向を示している。このように、「社会と現実との関わりを意識しながら学ぶ」や「将来に役立つ実践的な知識・技能を学ぶ（実験、実習、実技など）」といった教育経験は、将来の見通しがあり、かつ現在それを「実行」しているかどうかという現在の具体的な状況と関連していることが推測される。さらに、これらの項目が「将来の見通しの有無」における傾向とは異なり1・2年次からすでに比較的差がみられたことをふまえると、「実行」の有無については、より早い段階から具体的・実践的な知識・技能を学んでいることが一定程度関係していることが推測できる。

本章における検討を通して、在学時の教育経験と、「将来の見通し」及び「現在の状況」に対する回答について、関連が示唆される教育経験や特にそれが表出する年次について確認することができた。パネルデータの蓄積とともに、この関連性の示唆される項目が、どのような因果関係のもと、どのように影響を与えているかを確認することが今後の課題である。

第4章 大学入学年次にコロナ禍の影響を受けた学生の4年間の分析

本章では、第2章・第3章でも扱った4年間のパネルデータ ($n = 461$) を活用し、この4年間のコロナ禍の影響と、それが4年生までの教育経験や学生生活に与えた影響について検討していく。

2020年度調査では、その年に急速に拡大していた新型コロナウイルス感染症の影響に伴う大学生生活の急激な変化をふまえ、コロナ禍のなかの学生の状況を把握するための項目として、複数選択式の質問項目を設定していた。教示文は「新型コロナウイルス感染症拡大によって、経済的あるいは学習環境について、あてはまるものすべて選択してください。」であり、それぞれ「アルバイト収入が減少した」「主たる家計の収入が減少した」「PCやWiFiを購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」「気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」「その他（心身の健康に関する問題があれば具体的に）」「特にない」を複数選択する形式を取った。これらはコロナ禍で学生が受けた影響の一部に過ぎないが、この質問項目を通して、コロナ禍が始まった当初の2020年当時の学生がコロナ禍の中でいかなる学生生活上の変化を被ったかについての一端を探ろうとしていた。

今回の調査である2023年度調査は、この2020年度調査時点で1年生であった学生が4年生になった年度にあたる。そこで、本章ではこの4年間に継続した回答者を対象として、この2020年度におけるコロナ禍での経済的あるいは学習環境についての項目への回答群ごとに、それぞれの回答群の学生がその後の4年間の学生調査に対して、学生生活についてどのように4年間回答していったのかを検討していく。すなわち、2020年度時点でコロナ禍で何らかの形で「影響がある」あるいは「影響はない」と回答した人々は、2020年度時点でどのような学生生活上の満足度や不安感を抱き、それはその後の4年間でどのように推移していったのかを、パネル調査を通して明らかにしていく。それを通して、初年度にコロナ禍という状況で何らかの生活上の変化を被った学生が、その後の4年間の学生生活をどのように過ごしたのかについて探ることを目的とする。

なお、分析にあたっては第2章・第3章と同じパネルデータを用いて分析を行い、2023年度調査時点で4年生の回答者のみを対象としている。そのため、本章の分析対象は、コロナ禍の影響が始まった2020年度時点で1年生として入学し、2023年度調査時点で4年生になった学生である。なお、毎年度4度の調査に回答している学生であるため、母集団と比べるとやや肯定的な回答が多いことも予想される点には留意する必要がある。

4—1. 2020年度におけるコロナ禍での経済的あるいは学習環境の回答

まず、4年間継続回答者の2020年度におけるコロナ禍での経済的あるいは学習環境についての項目への回答傾向を確認すると、以下のようになった(図4—1)。2020年度における学生調査の回答者全体と比較すると、「アルバイト収入が減少した」の割合が異なるものの³、おおよそ割合としては同様の傾向を示した。

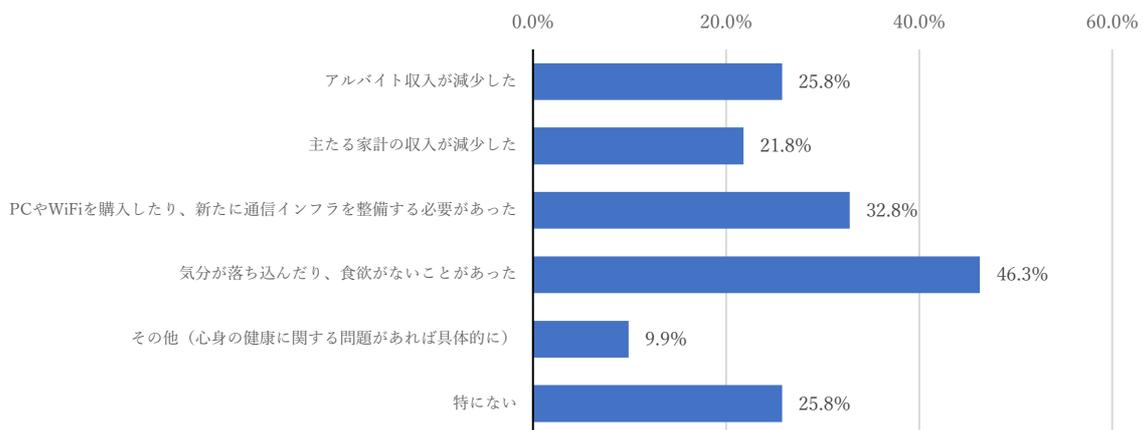


図4—1 新型コロナウイルス感染症拡大による経済的あるいは学習環境の影響
(4年間回答者・2020年度調査・複数回答)

この項目は複数回答であることに留意する必要があるが、4年間回答者のおよそ半数が2020年時点で「気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」と回答し、その他の「アルバイト収入が減少した」「主たる家計の収入が減少した」などの項目についても一定の回答数があることがわかる。

2022年度調査以降はこの質問項目を設定していないため、この回答自体の傾向が4年間を通してどのように変化していくかについては把握することはできない。しかし、2020年度時点でこの質問項目に各項目で「はい」(=影響がある)と回答した群が、その後の4年間の大学生活をどのように過ごし、その傾向にどのような変化があったのかについては、この回答ごとの群のパネル調査をもとに明らかにすることができる。

以下、この回答ごとに群を分け、4年間の大学生活に関する項目について検討していく。大学生活に関する項目は、①大学生生活の満足度、②大学生生活上の健康面、③大学生活における不安や悩みである。以下、これらの項目の4年間の推移を確認していく。なお、①の大学生生活の満足度については、2020年度・2021年度調査においては「満足していない～満足している」の5件法であり、2022年度・2023年度調査では1点～10点の得点で回答する形式となっていた。これについては、10点の得点を5件法に換

³ 「2020年度早稲田大学学生生活・学修行動調査報告書」では、「新型コロナウイルス感染症の影響」として各項目について分析を行っている。当時の学生全体を対象にした調査(回答総数:10665名)では、「アルバイト収入が減少した」(49.2%)、「主たる家計の収入が減少した」(25.1%)、「PCやWiFiを購入したり、新たに通信インフラを整備する必要がある」(28.8%)、「気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」(43.5%)、「その他(心身の健康に関する問題があれば具体的に)」(8.7%)、「特になし」(17.1%)であった。

算する形で対応した（「満足していない」＝1点＋2点の合計、「どちらかといえば、満足していない」＝3点＋4点の合計…）。以降の「満足度」に関する項目では、この換算をしたのち「どちらかといえば、満足している」「満足している」の合計値をもとにグラフを作成している。

4—2. 2020年度コロナ禍における回答別 大学生生活に関する項目の推移

4—2—1. 「2020年度にコロナ禍でアルバイト収入が減少した」

まず、「2020年度にコロナ禍でアルバイト収入が減少した」と回答した群と回答していない群で、大学生生活に関する項目について比較していく。「大学生生活満足度」に対する肯定的回答の推移を確認すると、特に2年次において、「コロナ禍でアルバイトが減少した」という経験がなかった群よりも、経験があったと回答した群の方が10%ほど肯定的な回答の割合が低くなった。一方で、健康面・精神面の不安という点については、20年度にアルバイト収入が減少したと回答した群とそうでない群では1年次に15%～20%ほどの差がみられた。最後に大学生生活上の不安や悩みについてみると、特に「大学を休学したい」については回答年度の2020年度（1年次）に「経験あり」群と「経験なし」群で11.1%の差があり、その後4年次に向かってゆるやかにその差が縮まっていく傾向がみられた。

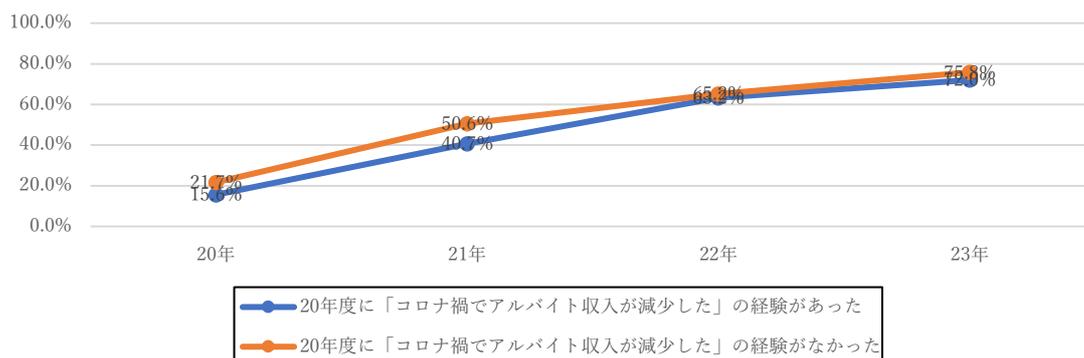


図4—2 「2020年度にコロナ禍でアルバイト収入が減少した」別：
大学生生活満足度（どちらかといえば満足している・満足している）の推移

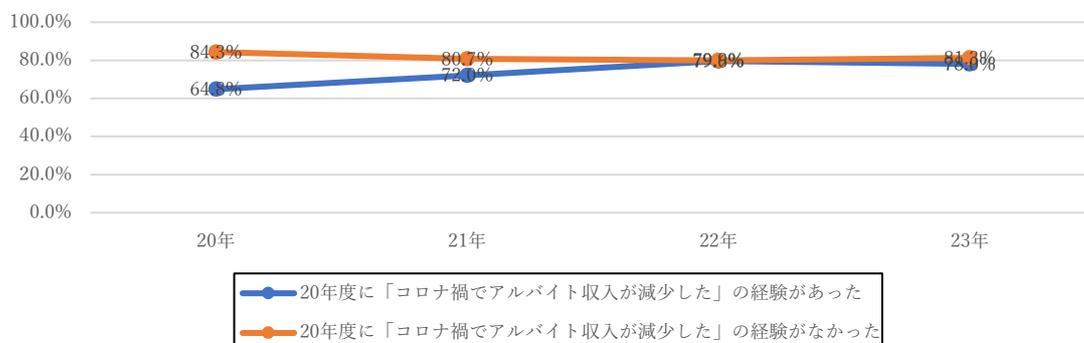


図4—3 「2020年度にコロナ禍でアルバイト収入が減少した」別：
身体面で「健康である」「とても健康である」の推移

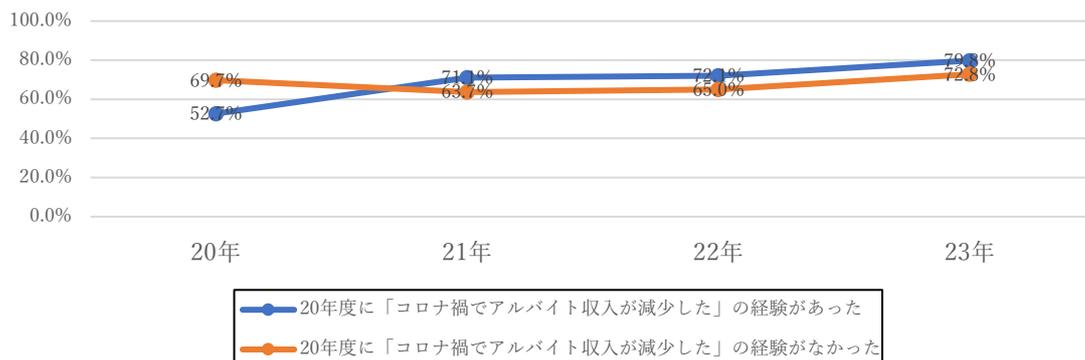


図4—4 「2020年度にコロナ禍でアルバイト収入が減少した」別：
精神面で「健康である」「とても健康である」の推移

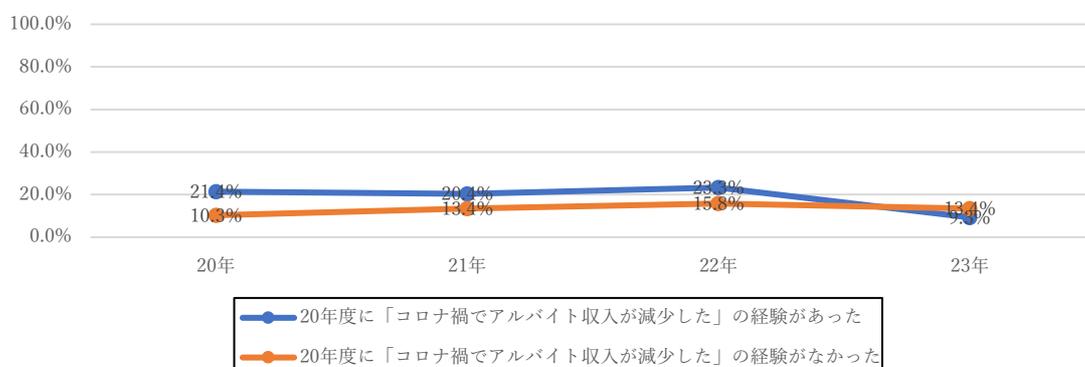


図4—5 「2020年度にコロナ禍でアルバイト収入が減少した」別：
「大学を休学したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

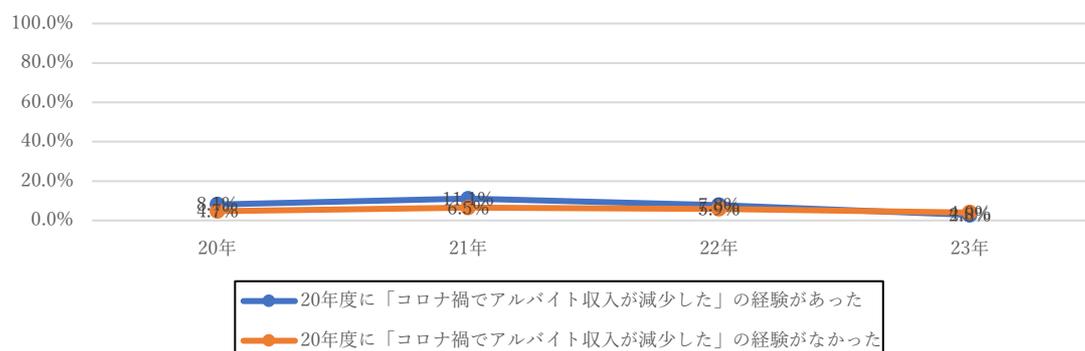


図4—6 「2020年度にコロナ禍でアルバイト収入が減少した」別：
「大学を退学したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

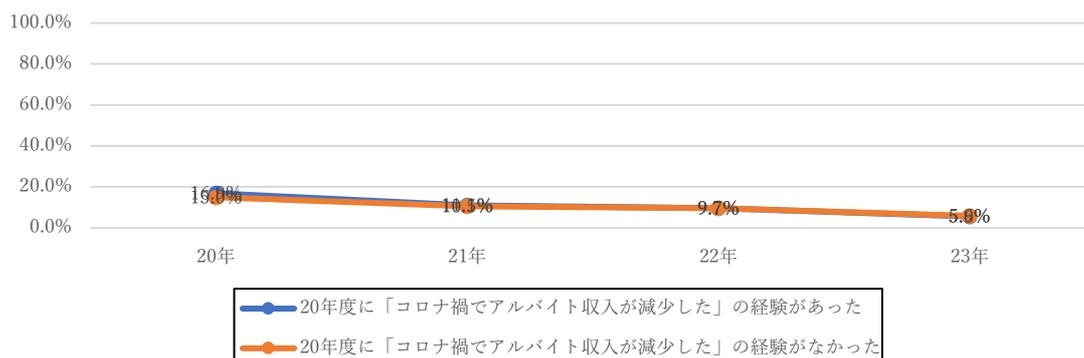


図4—7 「2020年度にコロナ禍でアルバイト収入が減少した」別：
「他の大学に入り直したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

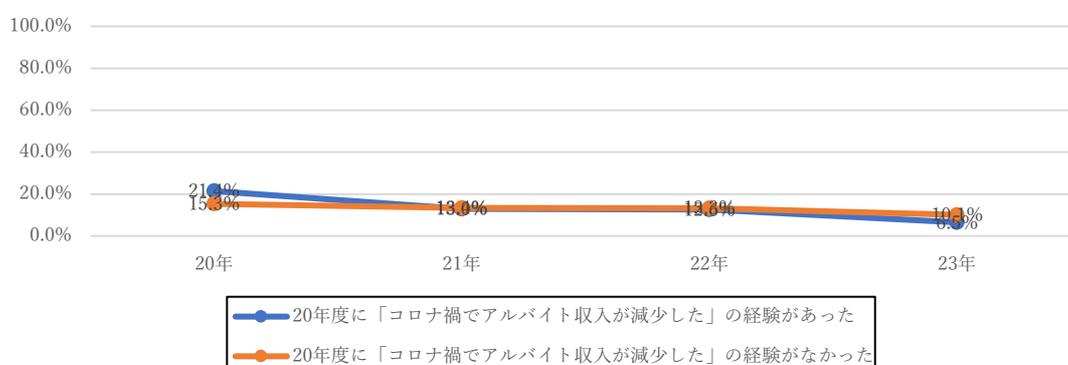


図4—8 「2020年度にコロナ禍でアルバイト収入が減少した」別：
「同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

4—2—2. 「2020年度にコロナ禍で主たる家計の収入が減少した」

次に、「2020年度に主たる家計の収入が減少した」について、「経験があった」群と「経験がなかった」群の差を確認していく。まず大きな差が現れていたのは、「大学生活の満足度」の2年次以降である。回答年度の1年次には「経験あり」・「なし」群でほとんど差がなかったにもかかわらず、2年次になると「経験あり」群の方が「経験なし」群よりも肯定的な回答の割合が16.3%低くなった。その後学年があがるにつれてその差はゆるやかに縮まったが、引き続き差が見られる傾向にあった。

一方で、大学への不安や悩みについては、「大学を休学したい」については1年次時点ですでに「経験あり」群が「経験なし」群よりも「まあまあある」「よくある」の割合が13.4%高く、同様の差が3年次まで継続していた。そのほかの「大学を退学したい」「他の大学に入り直したい」「同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい」については、1年次時点で最も差が開いており（10%ほど）、その後緩やかに差が縮まっていた。

「2020年度に主たる家計の収入が減少した」と回答した群は、大学生活満足度については2年次以降

に肯定的な回答が減少し、大学への不安や悩みについては1年次に「まあまあある」「よくある」の割合が「経験なし」群よりも高くなるという結果となった。

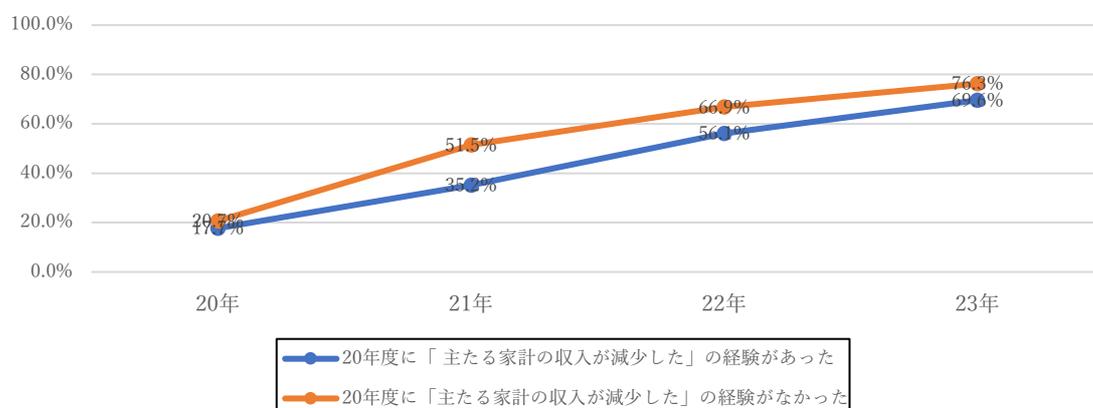


図4—9 「2020年度に主たる家計の収入が減少した」別：
大学生生活満足度（どちらかといえば満足している・満足している）の推移

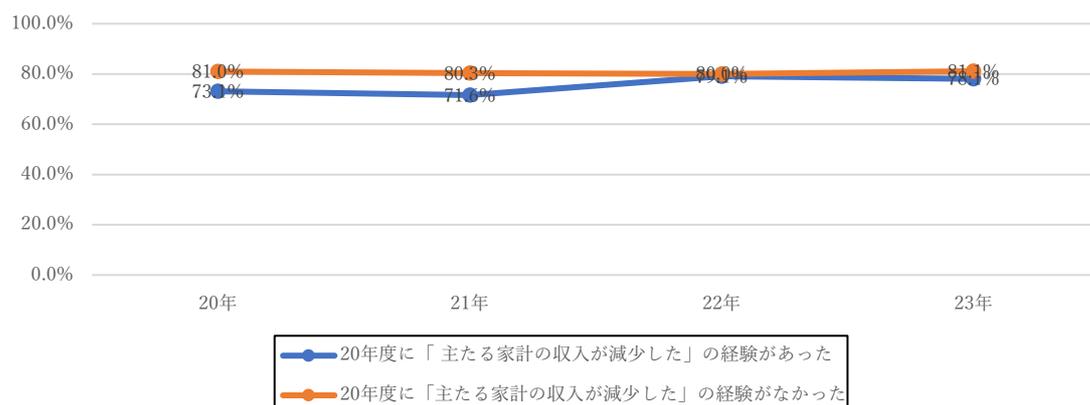


図4—10 「2020年度に主たる家計の収入が減少した」別：
身体面で「健康である」「とても健康である」の推移

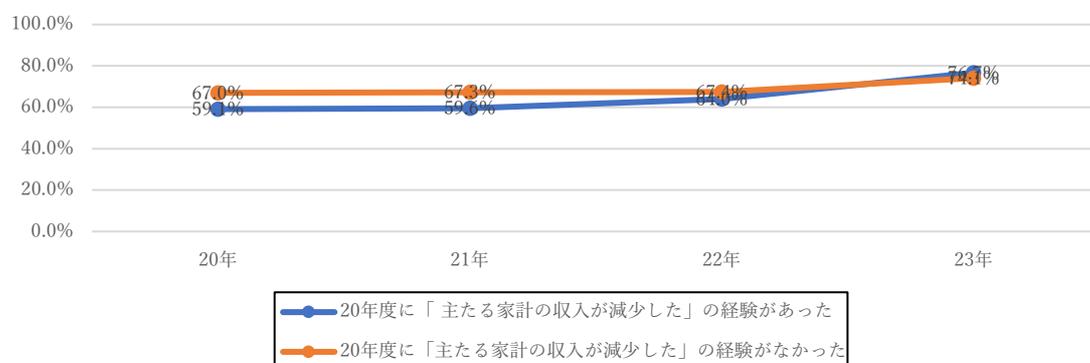


図4—11 「2020年度に主たる家計の収入が減少した」別：
精神面で「健康である」「とても健康である」の推移

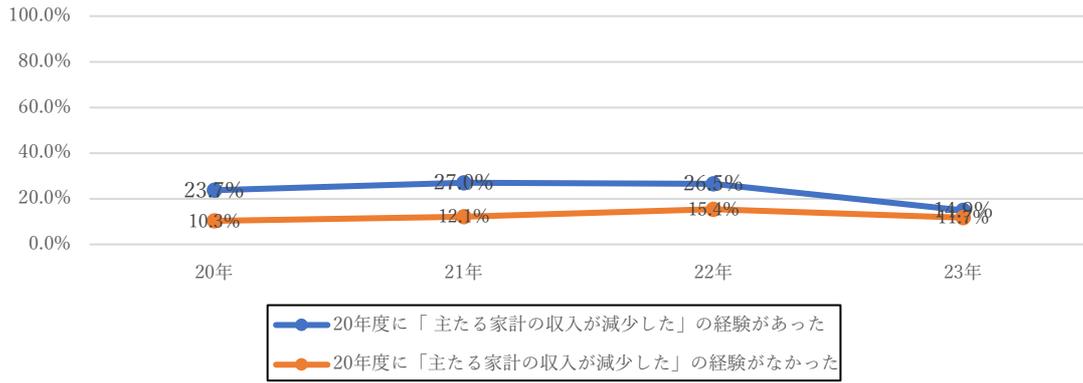


図4—12 「2020年度に主たる家計の収入が減少した」別：
「大学を休学したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

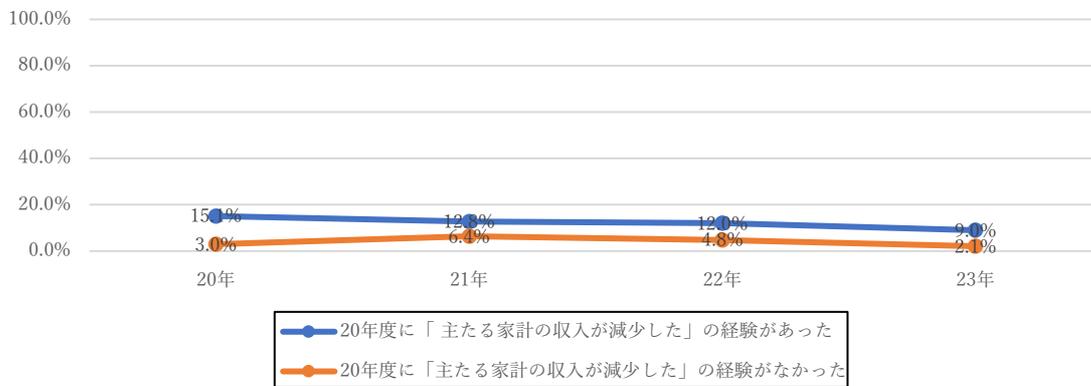


図4—13 「2020年度に主たる家計の収入が減少した」別：
「大学を退学したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

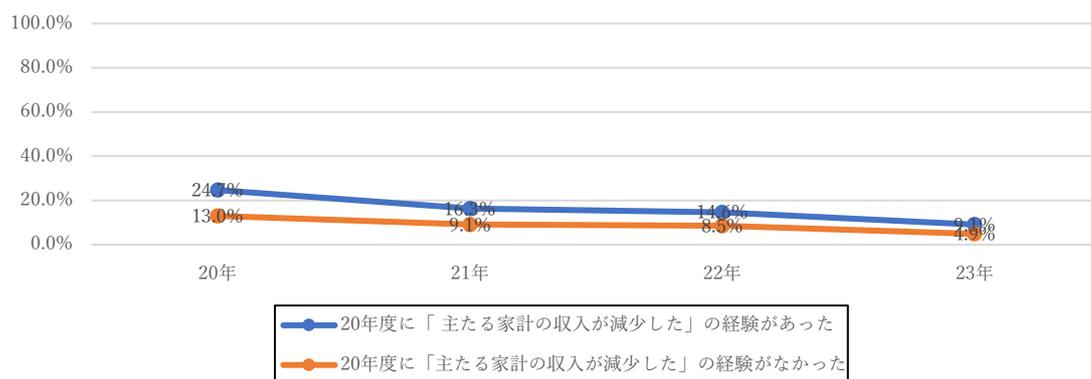


図4—14 「2020年度に主たる家計の収入が減少した」別：
「他の大学に入り直したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

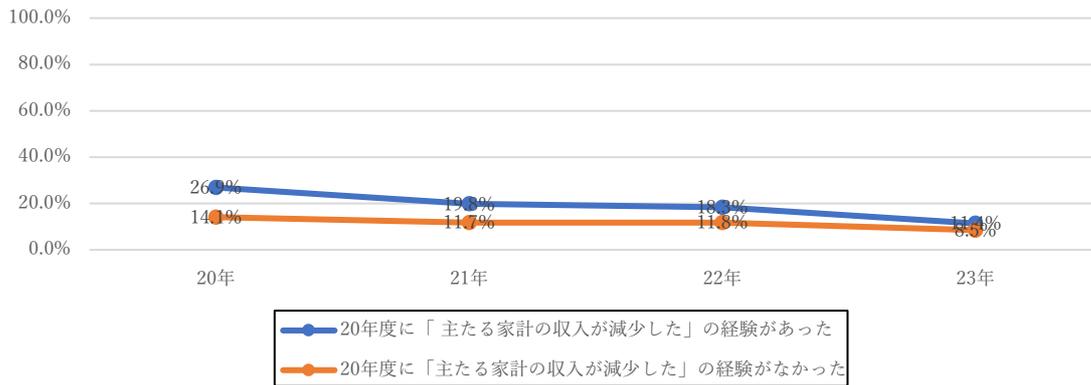


図 4—15 「2020 年度に主たる家計の収入が減少した」別：

「同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

4—1—3. 「2020 年度にコロナ禍で PC や WiFi を購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」

2020 年度に「コロナ禍で PC や WiFi を購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」に「経験があった」と回答した群と「経験がなかった」と回答した群の差をみると、大学生活の満足度については 1 年次に 10% ほどの差がみられたが、2 年次にはその差はほぼなくなった。健康面・精神面の不安という点でも、1 年次に 10% 前後の差がみられ、その後多少の前後はあれども緩やかに差が縮まっていた。一方で、大学への不安や悩みという点については、「他の大学に入り直したい」「同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい」などにおいて、1 年次の差が最も大きく（およそ 10%）、3 年次以降その差が縮まった。具体的なオンライン授業の受講設備に関する項目について、特に入学初年度の 1 年次に大学生活上の様々な不安や悩み、満足度との関係性が示唆された。

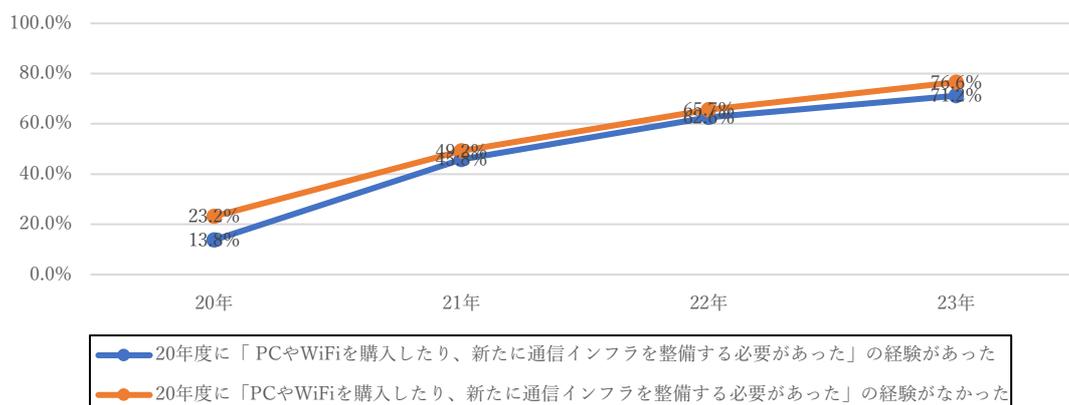


図 4—16 「2020 年度に PC や WiFi を購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」別：
大学生活満足度（どちらかといえば満足している・満足している）の推移

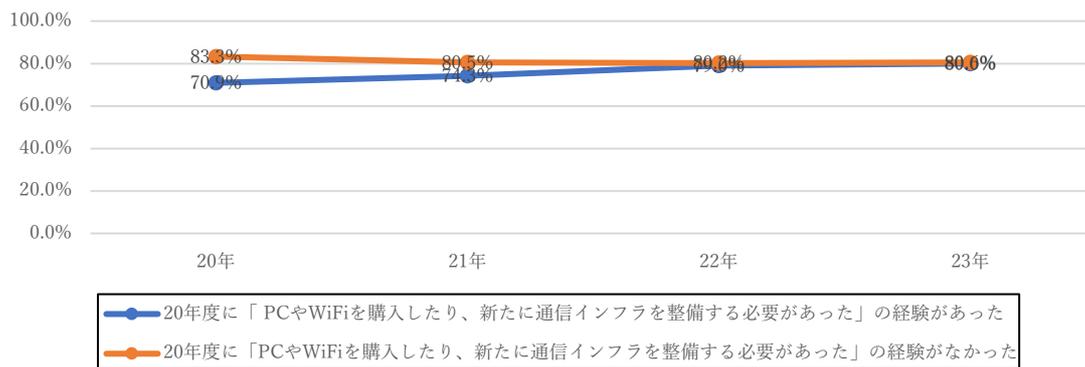


図 4—17 「2020 年度に PC や WiFi を購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」別：
身体面で「健康である」「とても健康である」の推移

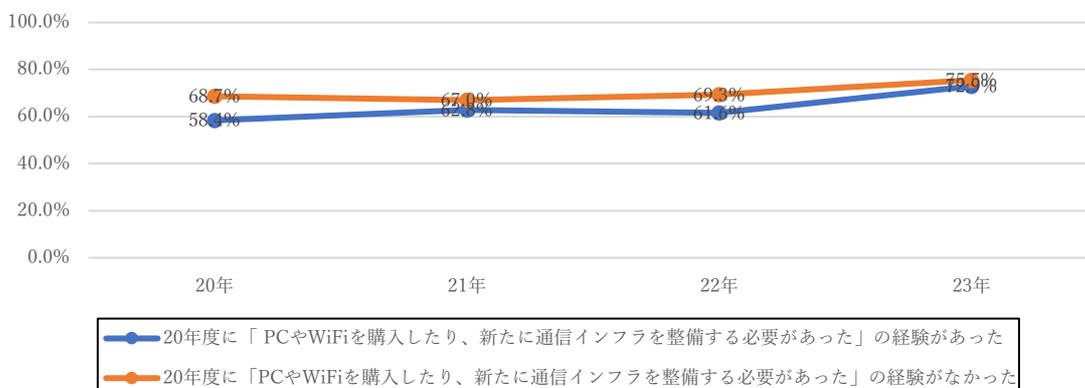


図 4—18 「2020 年度に PC や WiFi を購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」別：
精神面で「健康である」「とても健康である」の推移

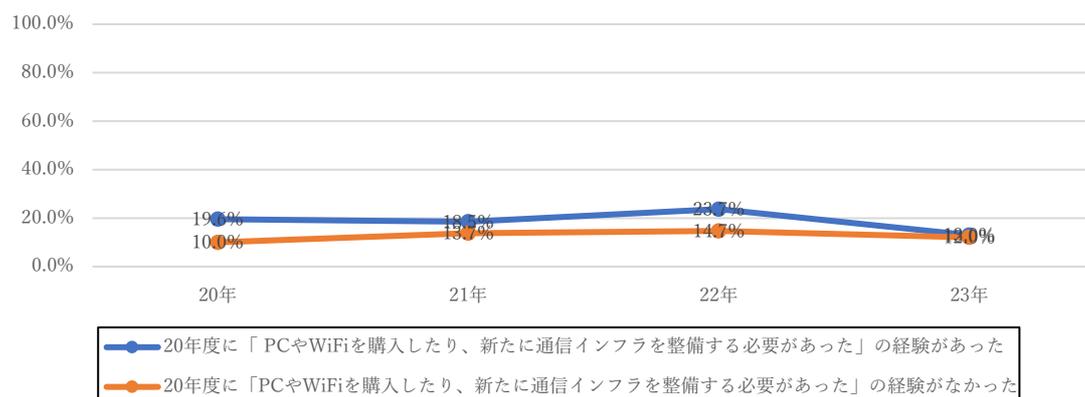


図 4—19 「2020 年度に PC や WiFi を購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」別：
「大学を休学したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

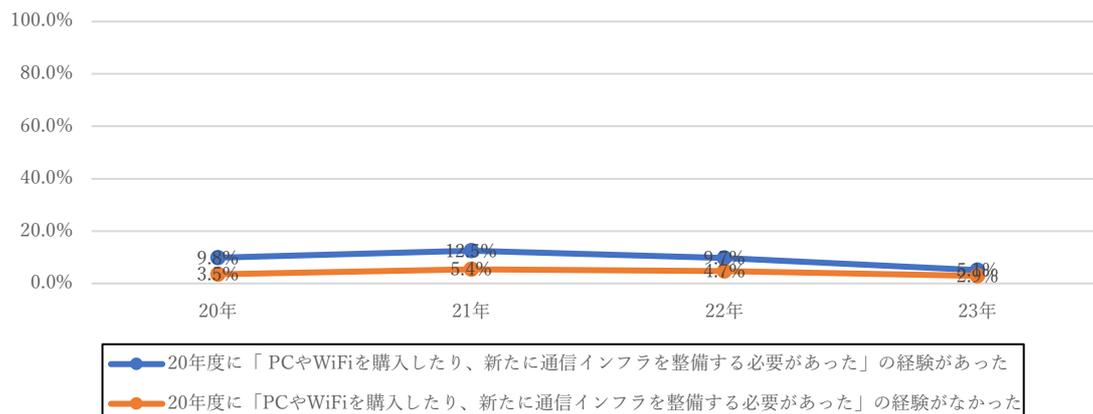


図4—20 「2020年度にPCやWiFiを購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」別：「大学を退学したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

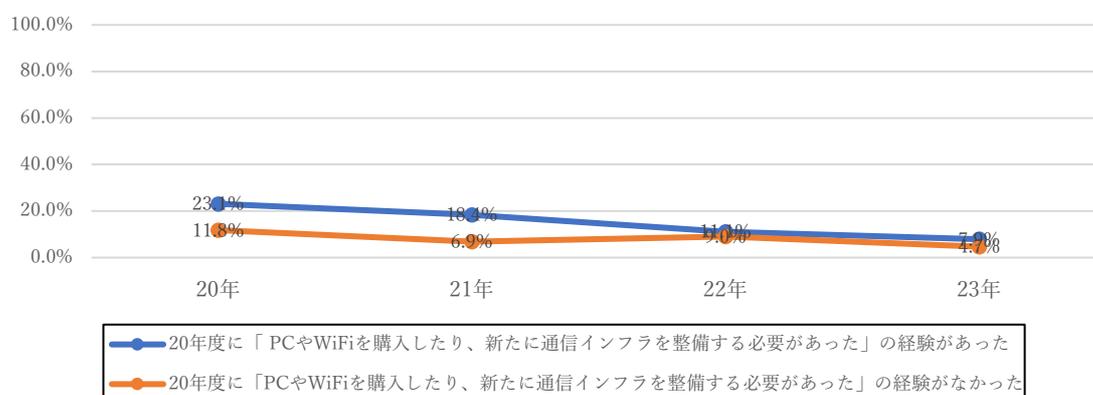


図4—21 「2020年度にPCやWiFiを購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」別：「他の大学に入り直したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

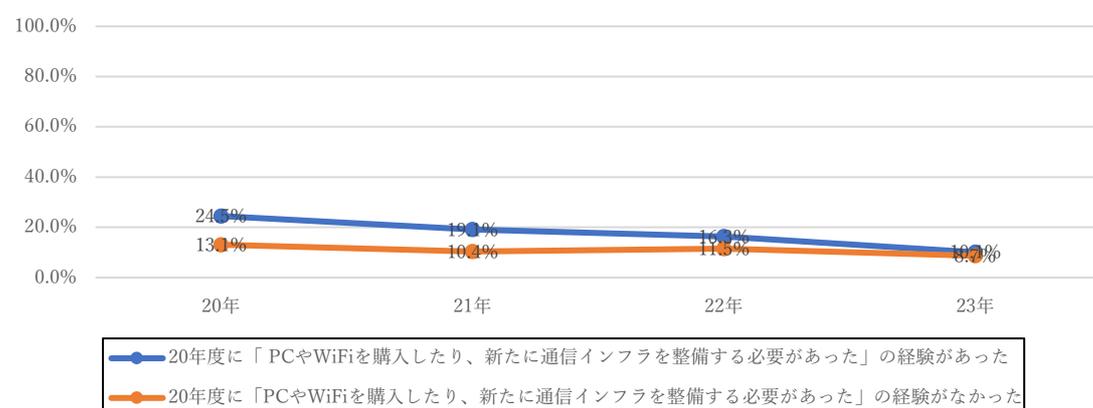


図4—22 「2020年度にPCやWiFiを購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった」別：「同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

4—1—4. 「2020年度にコロナ禍で気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」

次に、「2020年度にコロナ禍で気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」についての回答別の差をみていく。

まず、大学生生活満足度についてみると、1年次において「経験あり」群の方が「経験なし」群よりも満足度が低く、かつその差は4年間で最も開いていた（14.7%の差）。その後差は2年次に縮まり、4年次ではほとんど同じ値となった。

一方で、身体面・精神面の健康という点については顕著な差がみられた。精神面・健康面ともに1年次から差がみられ、かつその後学年があがるにつれてもさほど差は縮まらなかった。特に精神面の健康については、1年次からすでに「経験あり」群は「経験なし」群と比較して「健康である」「とても健康である」の割合が31.8%低いという結果となったが、その後3年次にやや差は縮まるものの4年次時点でもいまだ低い値となった（21.8%の差）。

この点との関係性は推測の域を出ないが、「大学を休学したい」についても、1年次に「まあまあある」「よくある」の回答割合は「経験あり」群が9.6%高かった。この差は4年間を通じてさほど縮まっておらず、身体面・精神面での健康が「大学の休学」とも一定の形で関連していることも推測できる。

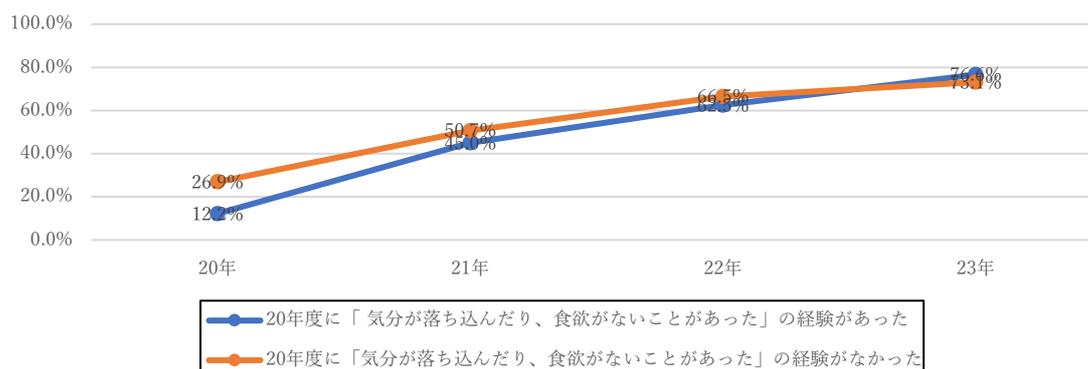


図4—23 「2020年度に気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」別：大学生生活満足度（どちらかといえば満足している・満足している）の推移

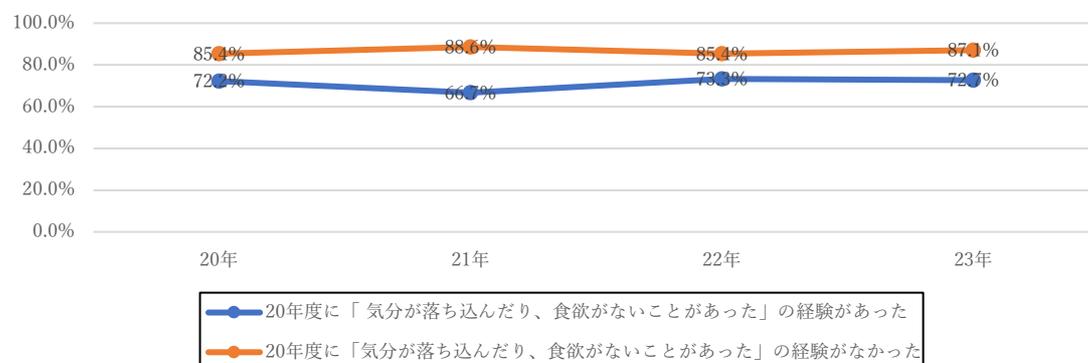


図4—24 「2020年度に気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」別：身体面で「健康である」「とても健康である」の推移

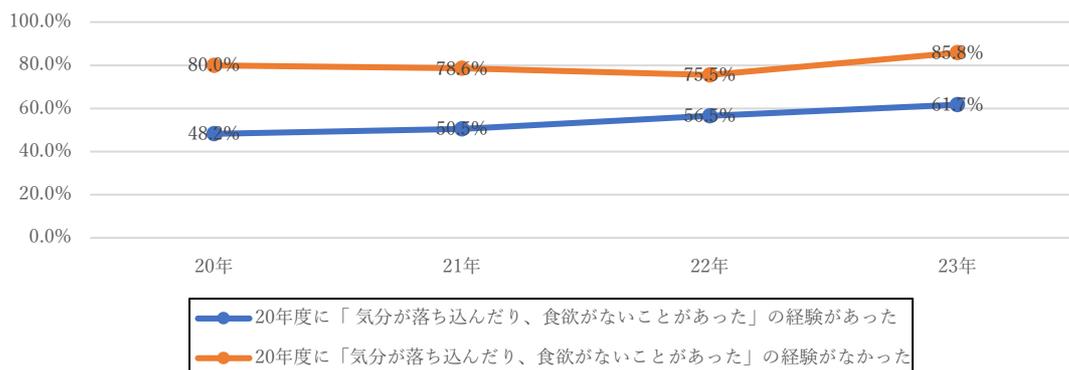


図 4—25 「2020 年度に気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」別：精神面で「健康である」「とても健康である」の推移

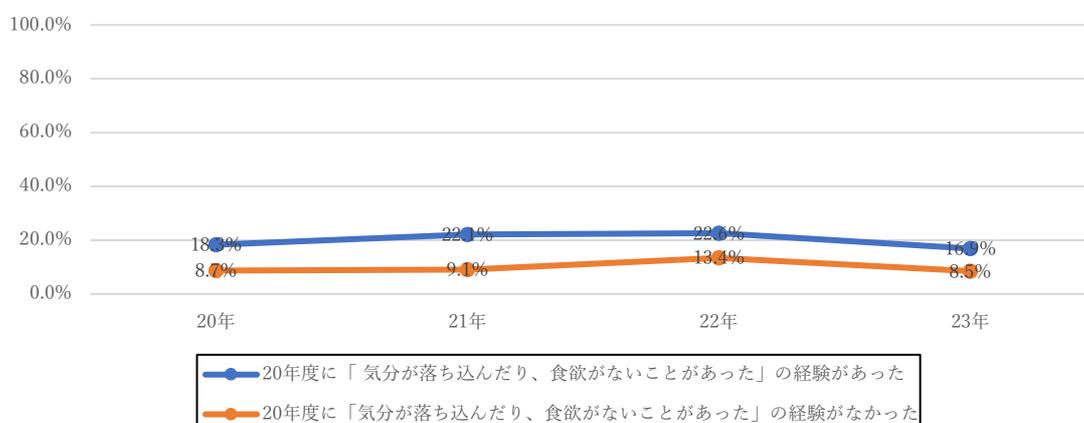


図 4—26 「2020 年度に気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」別：「大学を休学したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

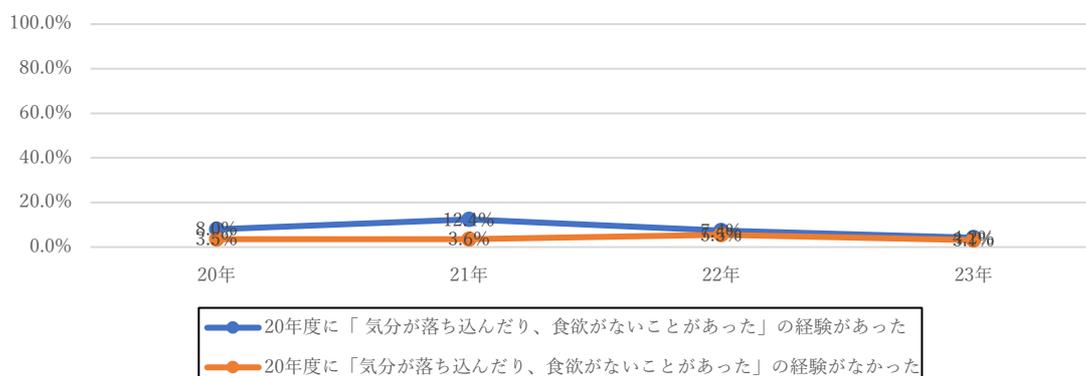


図 4—27 「2020 年度に気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」別：「大学を退学したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

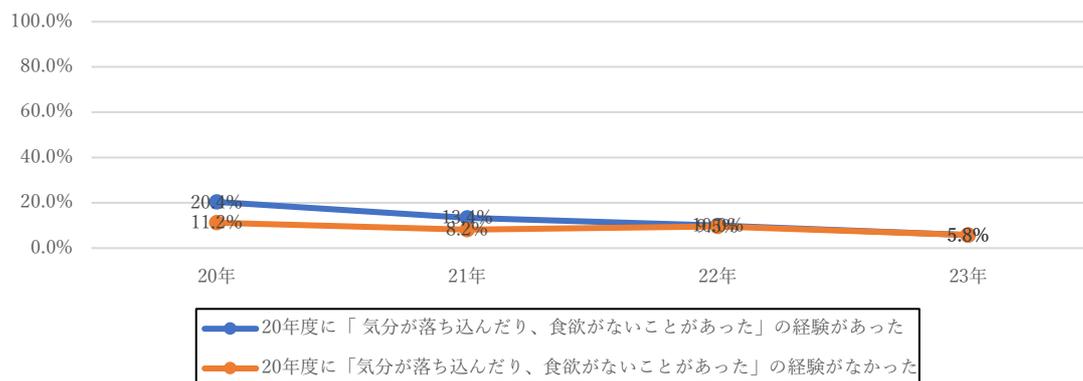


図4—28 「2020年度に気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」別：
「他の大学に入り直したい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

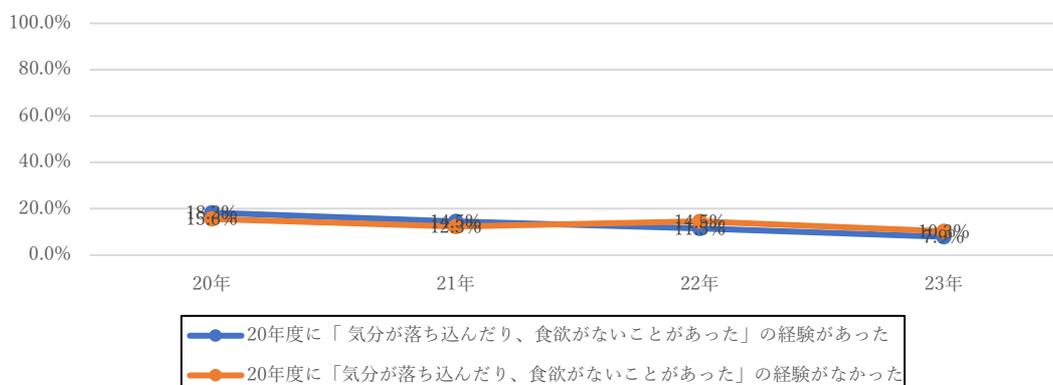


図4—29 「2020年度に気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」別：
「同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい」について、「まあまあある」「よくある」の推移

4—3. まとめ

本章では、2020年度調査におけるコロナ禍の影響についての回答について、それぞれの項目における「経験あり」「経験なし」群の差から、その後の4年間におけるコロナ禍の影響について示唆を得ることを目的とした。もっとも、コロナ禍による影響は多様であり、また大学生活に対する回答の傾向が、コロナ禍という状況を原因にしているかどうかを判別することは難しいことに留意する必要がある。この点を考慮した上で、以下、4年間パネル調査の結果をもとに、全体の傾向について確認したい。

第一に、2020年度に「コロナ禍でアルバイト収入が減少した」「主たる家計の収入が減少した」といった、本人および本人を支える家計の経済的状況に関するコロナ禍の影響についてである。これらの項目では、「経験なし」群と比較して、特に1年次から2年次にかけての大学生活満足度の相対的な低さや、「大学を休学したい」という大学生活の不安・悩みの相対的な高さとして現れた。特に大学生活満足度においては、ともに2年次に相対的に「経験なし」群と比較して最も差が開いた。

第二に、2020年度のコロナ禍の影響でインフラ面といった具体的な受講環境を整備する必要性が生じ

た回答者とそうでない回答者の傾向の差は、主に1年次における「他の大学に入り直したい」「同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい」といった回答の相対的な高さとして現れた。

第三に、「気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」といった、2020年度においてコロナ禍の中で自身の「健康」に何らかの影響があったと回答している群は、総じてその後の大学生活における身体面・精神面の健康への肯定的な回答の割合が相対的に低い傾向にあった。また特徴的なのは、1年次に「経験あり」群と「経験なし」群で大きく開いた差は、その後の4年間を通して完全に差が収束することなく、比較的差が開いたままであったという点である。先述のように3年次・4年次における就職活動の影響なども考慮に入れる必要はあるが、コロナ禍の健康面での影響を被ったと回答した群がその後も肯定的な回答の割合にさほど変化がなかった点は特徴的である。また、他の項目と同様に大学生活の満足度についても、1年次および2年次において「経験あり」群は相対的に満足度が低かった。また、経済的状況の影響についての項目と同様に、「大学を休学したい」という不安・悩みについても「まあまあある」「よくある」と回答する割合が相対的に高い傾向にあった。これらは4年次に向かって徐々に収束していく傾向にあったが、他の質問項目と比較して収束の幅が狭いものもみられた。

こうした結果をふまえると、コロナ禍という状況の中で学生が被った様々な影響が、特定の大学生活に関する回答傾向と関連していると推測できる。先述したように、今回の検討はコロナ禍における影響以外の要素を統制したものではなく、あくまでも1年次のコロナ禍における経験と、4年間の大学生活に対する回答の推移の関係性を確認したものである。今後、コロナ禍を経験していない学生群との比較や、コロナ禍を過ごした居住地別の比較など、より詳細な調査をふまえた分析を行うことで、コロナ禍がもたらした学生への影響をより深く検討することが求められる。また、こうした全体の傾向の分析だけでなく、当事者である個々の学生自身の経験から検討を深める必要もある。コロナ禍で影響を被った学生が、その後の4年間をどのように過ごしていったのか、どんな対応や支援が求められていたのかなどについて、さらに綿密に迫っていく必要がある。

第5章 学習観・マインドセット4 類型の傾向

本章では、学生の学習観・マインドセットに焦点を当てて分析をする。本調査では学生の学習観やマインドセットに関する質問を4問設定している。これらは自分の学習に関する原因帰属や知能に関する信念、また授業や単位取得に関する方針や考え方である。本章ではこれらを学習観・マインドセットと捉え、この学習観・マインドセットが学修習慣や学修成果とどのように関係するかを分析する。

なお本章では一般的な学習（Learning）に関する信念やマインドセットを取り扱う関係上、学びに関しては「学習」と表記するが、一部特に大学における学びを意味する場合、これまで通り「学修」と表記する。

5-1. 学習観・マインドセットの調査項目と4 類型

本調査では、学習観・マインドセットに関する質問を4つ設定しており、本章ではこのうち「(1) A. 知識や技能を身に付けられるかどうかは、大学や教員の責任である or B. 知識や技能を身に付けられるかどうかは、学生自身の責任である」と、「(2) A. 大学で知識は増やせるが、元々の賢さは変わらないと思う or B. 大学で努力して学習すれば、それに応じて賢くなると思う」に注目する(表5-1)。回答方法は、学習観やマインドセットに関して、およそ逆の表現をAとBで記述し、1. Aに近い、2. ややAに近い、3. ややBに近い、4. Bに近い、という4件法で回答する方法であった。このような「どちらに近いか？」という質問形式は、必ずしも真逆の事柄を聞いているとは言い切れないが、現実的な事柄に関して、二分法的に対比させて問えると仮定できる場合に、学生調査でもしばしば用いられる(e.g. 溝上, 2015: 206, ベネッセ教育総合研究所, 2017: 11)⁴。

「(1) A. 知識や技能を身に付けられるかどうかは、大学や教員の責任である or B. 知識や技能を身に付けられるかどうかは、学生自身の責任である」は、ベネッセ教育総合研究所(2017)の「大学生の学習・生活実態調査」でも、「大学教育観」として設定されている項目であり、知識の獲得や成長に関する責任の所在、すなわち学習の原因帰属に関する質問である。ワイナーの理論では、内的で不安定な要因である努力に原因帰属をする人が、外的な要因や能力に原因帰属をする人よりも根気よく学習を続けるとされる⁵。また「(2) A. 大学で知識は増やせるが、元々の賢さは変わらないと思う or B. 大学で努力して学習すれば、それに応じて賢くなると思う」は、ドゥエック(2006: 2016)⁶が提唱した成長的知能観(成長的マインドセット)に関する質問である。成長的マインドセットは、しなやかマイン

⁴ 溝上慎一(責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾(編集)、2015、『どんな高校生が大学、社会で成長するのか - 「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ-』学事出版。ベネッセ教育総合研究所、2017、『「第3回大学生の学習・生活実態調査」速報版』 https://berd.benesse.jp/up_images/research/3_daigaku-gakushu-seikatsu_all.pdf (2024年4月8日閲覧)

⁵ 市川伸一、1997、『考えることの科学: 推論の認知心理学への招待』中央公論新社。

⁶ Dweck, C. S., 2006, *Mindset: The New Psychology of Success*, New York: The Random House Publishing Group. (ドゥエック, C. (著)・今西康子(訳)、2016、『マインドセット「やればできる!」の研究』草思社。)

ドセットともいわれ、自分を向上させることに関心を向けるタイプであり、その逆の固定的マインドセットは、硬直的マインドセットともいわれ、自分が他人からどう評価されるかを気にするタイプである。成長的（しなやか）マインドセットの方が、自分が成長することを目的にして、努力をするタイプとされる。

表5-1 学習観・マインドセットの質問項目

大学（大学院）教育について、「現在の」あなたの考え方に、A、B でより近い方をそれぞれ一つ選択してください。	
回答方法：1. Aに近い ・ 2. ややAに近い ・ 3. ややBに近い ・ 4. Bに近い	
(1) A. 知識や技能を身に付けられるかどうかは、大学や教員の責任である	B. 知識や技能を身に付けられるかどうかは、学生自身の責任である
(2) A. 大学で知識は増やせるが、元々の賢さは変わらないと思う	B. 大学で努力して学習すれば、それに応じて賢くなると思う

回答者全体（ $n = 11575$ ）で、これら2つの質問の相関係数(r)は.14と極めて小さかったため、2つの質問を軸として、Aに近いという回答（1, 2）と、Bに近いという回答（3, 4）に基づき、学生の学習観・マインドセットを4つのタイプに分類した（表5-2）。すなわち、①「学習の責任は自分/知能は伸ばせない（自責/硬直）」、②「学習の責任は環境/知能は伸ばせない（他責/硬直）」、③「学習の責任は環境/知能は伸ばせる（他責/しなやか）」、④「学習の責任は自分/知能は伸ばせる（自責/しなやか）」、という4類型である。

表5-2 学習観・マインドセットの4類型の度数

	度数	有効パーセント
① 自責/硬直	1206	10.4
② 他責/硬直	1183	10.2
③ 他責/しなやか	3427	29.6
④ 自責/しなやか	5756	49.7
合計	11572	100.0
欠損値	1603	

表5-3及び図5-1は、4類型の各学年の度数であり、特に学部2年次と4年次で、4類型の違いがみられた。2年次は他責の2類型が、自責の2類型よりも相対的に度数が多く、4年次では他責/硬直が相対的に少なかった。したがって学生は、2年次では自分の外部に学びの原因帰属をする傾向にあり、一方で4年次には、学びの原因を外部に帰属させ、同時に自分の賢さは変わらないという考えは、少なくなるようである。

表5-4は、4類型の各学年の通算 GPA であり、特に学部4年次で4類型の違いがみられ、「自責/しなやか」が、相対的に平均値が高かった。したがって4年次では、学びの原因を自分に帰属させ、同時

に努力により自分は賢くなるという知能観の学生が、GPAが高くなるようである。

表5-3 学習観・マインドセットの4類型の各学年の度数

		1年	2年	3年	4年	5年以上	合計
① 自責/硬直	度数	322	236	196	191	17	962
	類型ごとの %	33.5%	24.5%	20.4%	19.9%	1.8%	100.0%
② 他責/硬直	度数	326	321	188	151	17	1003
	類型ごとの %	32.5%	32.0%	18.7%	15.1%	1.7%	100.0%
③ 他責/しなやか	度数	915	832	522	537	50	2856
	類型ごとの %	32.0%	29.1%	18.3%	18.8%	1.8%	100.0%
④ 自責/しなやか	度数	1382	1118	852	920	128	4400
	類型ごとの %	31.4%	25.4%	19.4%	20.9%	2.9%	100.0%
合計	度数	2945	2507	1758	1799	212	9221
	類型ごとの %	31.9%	27.2%	19.1%	19.5%	2.3%	100.0%

1) 5年以上の超過生は「5年以上」にひとまとめにした

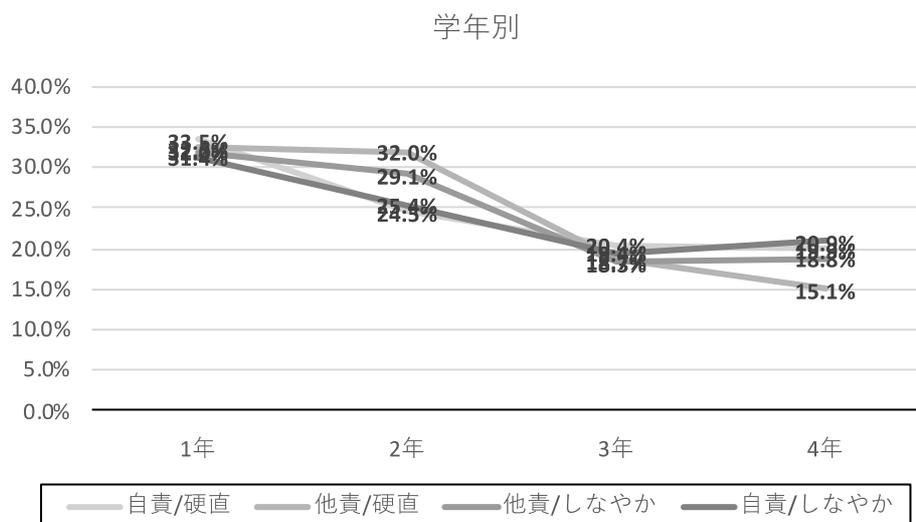


図5-1 学習観・マインドセットの4類型の各学年の割合（1年次から4年次まで）

表5-4 学習観・マインドセットの4類型の各学年の通算 GPA

① 自責/硬直	通算 GPA			② 他責/硬直	通算 GPA		
	度数	平均値	標準偏差		度数	平均値	標準偏差
2年	236	2.64	0.72	2年	321	2.53	0.75
3年	196	2.63	0.69	3年	188	2.57	0.69
4年	191	2.66	0.62	4年	151	2.61	0.64
5年以上	17	1.84	0.73	5年以上	17	2.05	0.71

合計	962	1.95	1.33	合計	1003	1.90	1.31
③ 他責/しなやか 通算 GPA				④ 自責/しなやか 通算 GPA			
	度数	平均値	標準偏差		度数	平均値	標準偏差
2年	832	2.61	0.76	2年	1118	2.57	0.88
3年	522	2.62	0.67	3年	852	2.63	0.71
4年	537	2.64	0.62	4年	920	2.74	0.56
5年以上	50	1.77	0.72	5年以上	128	2.00	0.80
合計	2856	1.91	1.33	合計	4400	1.93	1.35

1) 1年次は集計の関係で掲載していない

5-2. 学習観・マインドセット4類型の特徴：入学後の経験や学習行動

学習観・マインドセットの4類型に基づき、本調査において特に目立った違いが見られた質問項目について報告をする。この方法の場合、偶然的に4類型で違いが生じた質問項目をも、違いがあるように報告するリスクを許容するが、質問項目が多数であるため、煩雑さを避けるために、特に傾向の見られた質問項目に注目をする。

まずは入学以降、意欲的に取り組んだことに関して、4類型で特徴が見られた項目をまとめる。質問は「あなたは大学（大学院）入学以降、次のことにどれほど意欲的に取り組んできましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。」であり、選択肢は「1. 意欲的ではない、～4. 意欲的」の4件法であった。各質問項目で全体の回答者数が多少異なるのは、当該の質問項目をスキップした回答者数の違いである。

図5-2は、「自身の専門分野の勉強」に関する4類型のグラフである。「意欲的」の回答の割合は、「自責/しなやか」(45.9%) > 「自責/硬直」(40.4%) > 「他責/しなやか」(34.7%) > 「他責/硬直」(30.8%)の順であった。「自責/しなやか」と「他責/硬直」ではおよそ15%の違いがあった。つまり、知識や技能を身につけられるのは自分自身の責任であり、大学で努力して学習すれば、それに応じて賢くなるというマインドセットを持っている学生が、自身の専門分野を意欲的に学習したようである。図5-3は、「自身の専門分野以外の勉強（グローバルエデュケーションセンターや所属学部の副専攻）」に関する4類型のグラフである。「意欲的」の回答の割合は、自責の2類型が22%ほど、他責の2類型が16%ほどであり、特に原因帰属の影響が見られた。

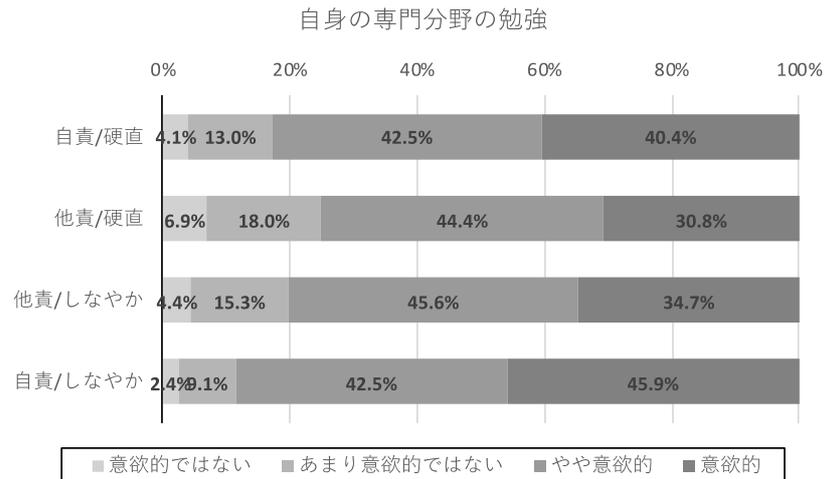


図5-2 入学後意欲的：自分の専門分野の勉強（4類型, $n = 9178$ ）

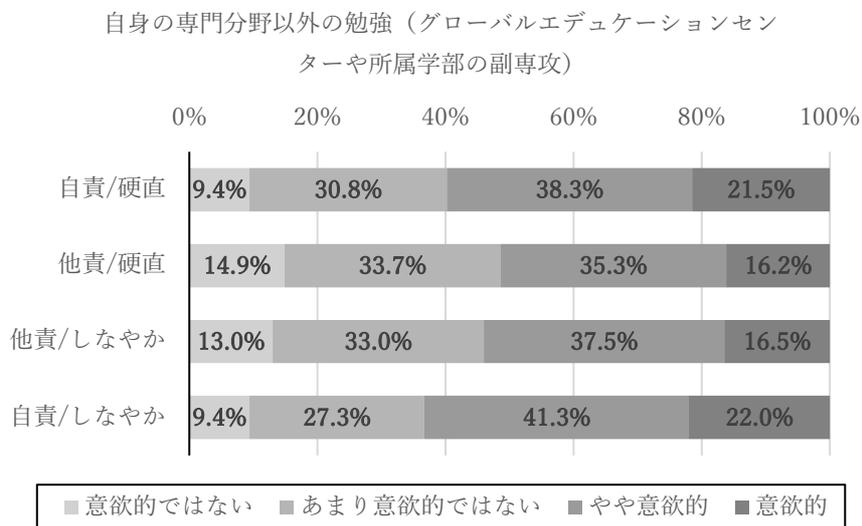


図5-3 入学後意欲的：自分の専門分野以外の勉強（4類型, $n = 9182$ ）

つぎに入学以降、経験したことに関して、4類型で特徴が見られた項目をまとめる。質問は「あなたは大学（大学院）入学以降、次のことをどれほど経験しましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。」であり、選択肢は「1. 全くなかった、～4. よくあった」の4件法であった。

図5-4は、「大学での勉強の方法（スタディ・スキル）を学ぶ」に関する4類型のグラフである。「よくあった」の回答の割合は、「自責/しなやか」（28.8%）＞「自責/硬直」（24.8%）＞「他責/しなやか」（20.1%）＞「他責/硬直」（12.4%）の順であった。「自責/しなやか」と「他責/硬直」ではおよそ16%の違いがあった。本調査は横断的調査であるため、勉強の方法を学んだことで、「自責/しなやか」な学習観・マインドセットになっているのか、元々そういう人が積極的に勉強の方法を学んできたのかはわからないが、「他責/硬直」の人と比べて相対的に、勉強の方法をよく学んできたようである。図5-5は、「社会や現実との関わりを意識しながら学ぶ」に関する4類型のグラフである。「よくあった」の回答の割合は、「自責/しなやか」（32.7%）＞「自責/硬直」（28.5%）＞「他責/しなやか」（24.8%）

> 「他責/硬直」(17.4%)の順であった。「自責/しなやか」と「他責/硬直」ではおよそ15%の違いがあり、「自責/しなやか」な学習観・マインドセットの人は、社会や現実との関わりを意識した学びの経験が多いようである。

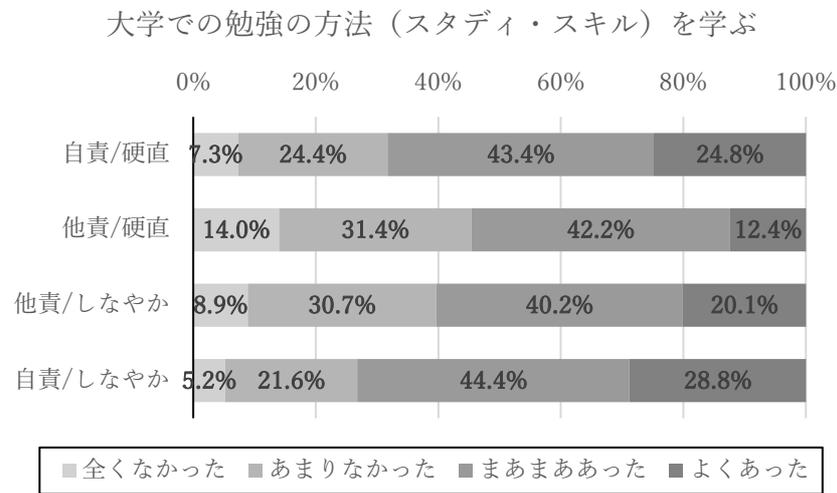


図5-4 入学後経験：大学での勉強の方法を学ぶ（4類型，n = 9180）

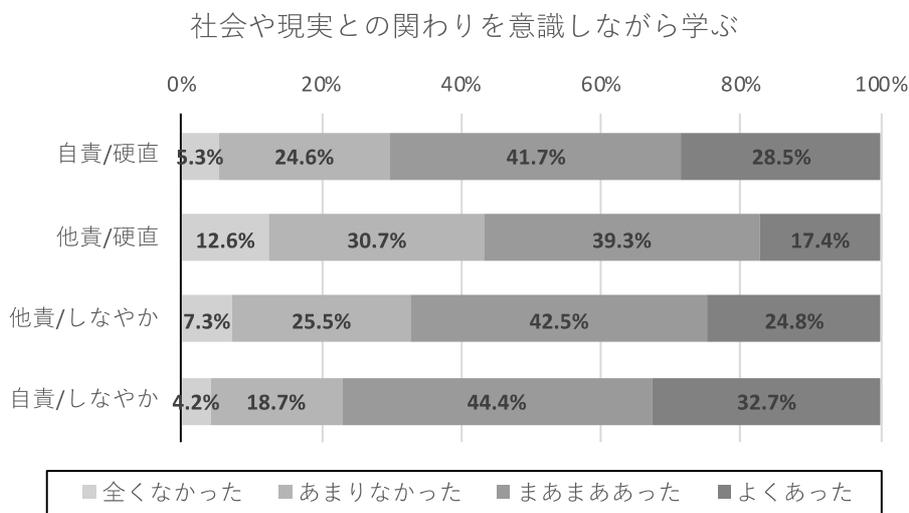


図5-5 入学後経験：社会や現実との関わりを意識しながら学ぶ（4類型，n = 9175）

図5-6は、「異文化について学ぶ」に関する4類型のグラフである。「よくあった」の回答の割合は、自責の2類型が31%ほど、他責の2類型が20%前後であり、特に原因帰属による違いが見られた。図5-7は、「将来に役立つ実践的な知識や技能を学ぶ（実験、実習、実技など）」に関する4類型のグラフである。「よくあった」の回答の割合は、特に「自責/しなやか」と「他責/硬直」の間で違いが大きく、およそ10%の差があり、「自責/しなやか」な学習観・マインドセットの人は、社会や現実との関わりを意識した学びの経験が多いようである。

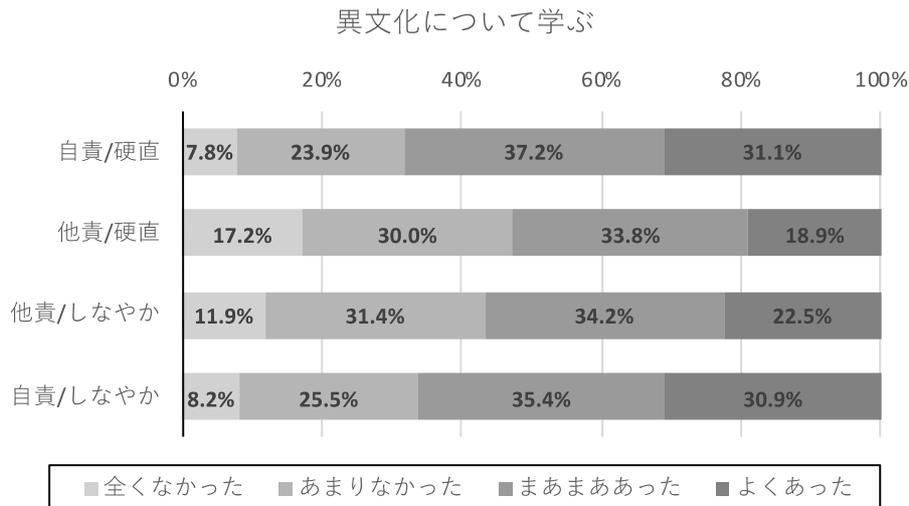


図5-6 入学後経験：異文化について学ぶ（4類型, $n = 9165$ ）

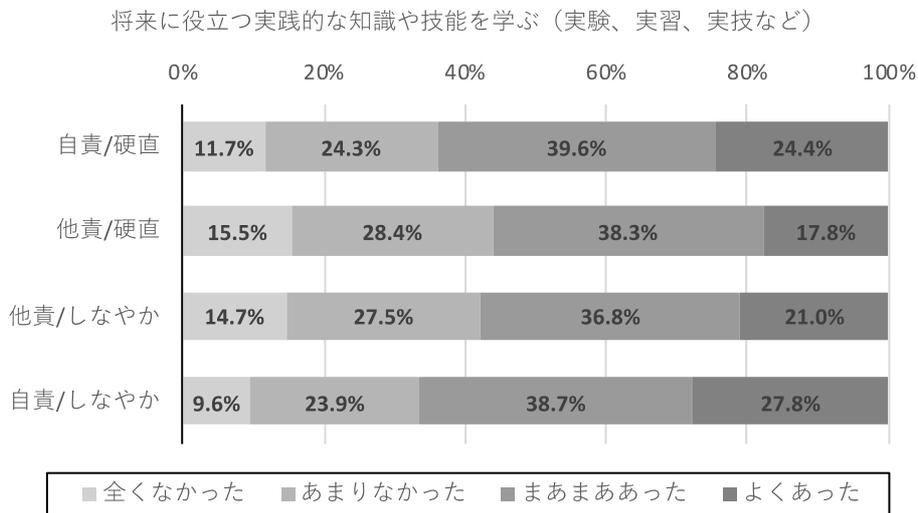


図5-7 入学後経験：将来に役立つ実践的な知識や技能を学ぶ（実験、実習、実技など）
（4類型, $n = 9169$ ）

図5-8は、「問題や課題について改善策や解決策を議論する」に関する4類型のグラフである。「よくあった」の回答の割合は、自責の2類型は30%を越える同程度の割合であるが、他責の2類型は、「他責/しなやか」(26.1%)と「他責/硬直」(18.9%)と割合に違いが見られ、特に「自責/しなやか」(34.0%)と「他責/硬直」(18.9%)の間には、約15%の違いが見られた。したがって問題や課題について改善策や解決策を議論する経験は、自分に学びの原因帰属をする学習観の人に多く、逆に自分の外に原因帰属をし、同時に自分の賢さは変えられないと思っている人ほど、そのような問題解決の議論の経験は少ないようである。図5-9は、「授業を通じて問題や課題を考えたり、見出したりする」に関する4類型のグラフである。「よくあった」の回答の割合は、「自責/しなやか」(40.0%) > 「自責/硬直」(35.9%) > 「他責/しなやか」(30.9%) > 「他責/硬直」(21.1%)の順であった。「自責/しなやか」と

「他責/硬直」ではおよそ 19%の違いがあり、また「自責/しなやか」(40.0%)と「自責/硬直」(35.9%)の割合の差が4%程度なの比べ、「他責/しなやか」(30.9%)と「他責/硬直」(21.1%)の差は10%程度であった。したがって、特に「他責/硬直」な学習観・マインドセットの人は、問題や課題を考えたり見出したりする学びの経験が、相対的に少ないようである。

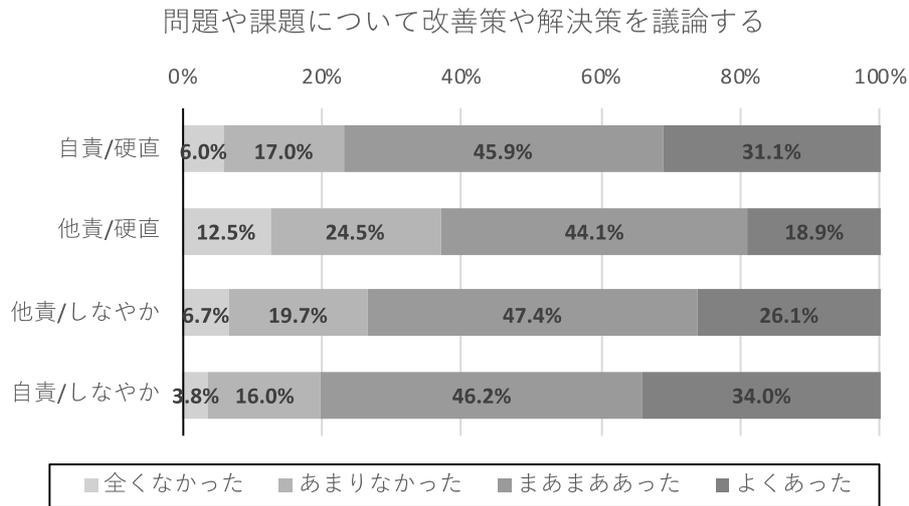


図5-8 入学後経験：問題や課題について改善策や解決策を議論する（4類型, n = 9169）

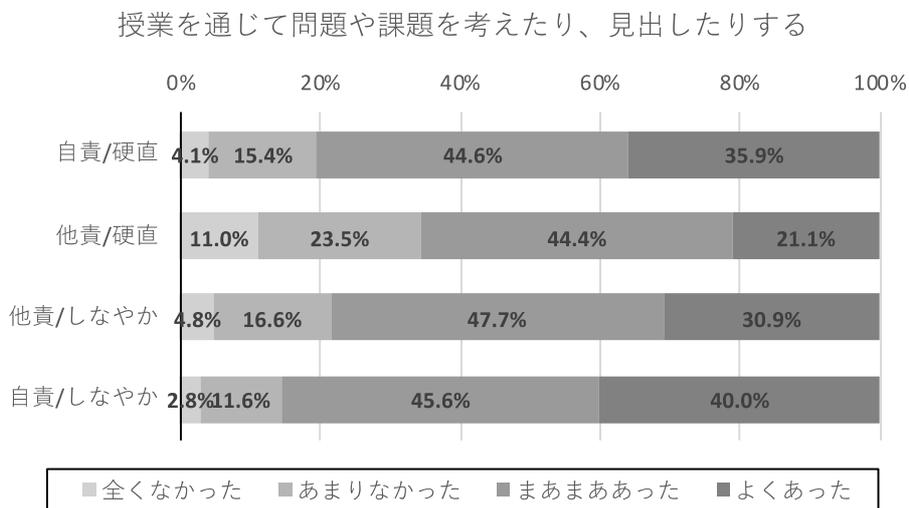


図5-9 入学後経験：授業を通じて問題や課題を考えたり見出したりする（4類型, n = 9163）

つぎに入学以降の行動に関して、4類型で特徴が見られた項目をまとめる。質問は「大学（大学院）入学以降のあなたについて、次のことはどれほどありましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。」であり、選択肢は「1. 全くなかった、～4. よくあった」の4件法であった。

図5-10は、「グループワークなどで授業に積極的に参加する」に関する4類型のグラフである。「よ

くあった」の回答の割合は、「自責/硬直」(30.1%) > 「自責/しなやか」(28.7%) > 「他責/しなやか」(24.1%) > 「他責/硬直」(20.4%) の順であった。これまでの項目と同様に、自責の2類型が他責の2類型よりも割合は大きい、自責の中では「自責/硬直」が「自責/しなやか」よりも大きいことが特徴的である。さらに他責の中では、「他責/しなやか」が「他責/硬直」よりも割合が大きく、知能観において、自責とは逆の順序となっている。学びの責任を自分に帰属させながら、知能は努力で伸ばせないと考える人は、それだけ意識的に積極的な学習行動を取ることもあり、一方で学びの責任を自分の外に帰属させる人の場合、硬直的な知能観と組み合わせられて、積極的な学習行動を低減させるのかもしれない。図5-11は、「分からない点は教員に質問した」に関する4類型のグラフである。「よくあった」の回答の割合は、自責の2類型が17-20%程度、一方他責の2類型は12-13%程度であり、学びの責任の帰属による違いが見られた。

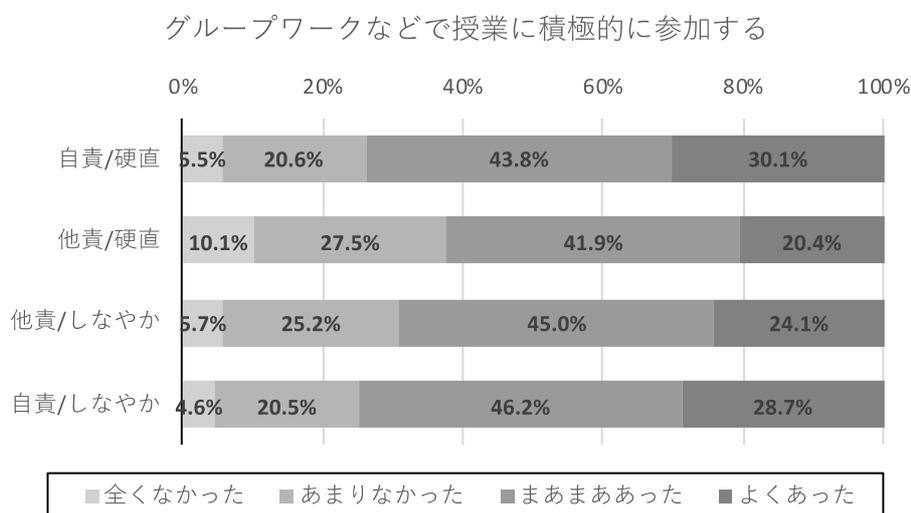


図5-10 入学後行動：グループワークなどで授業に積極的に参加する（4類型, n = 9174）

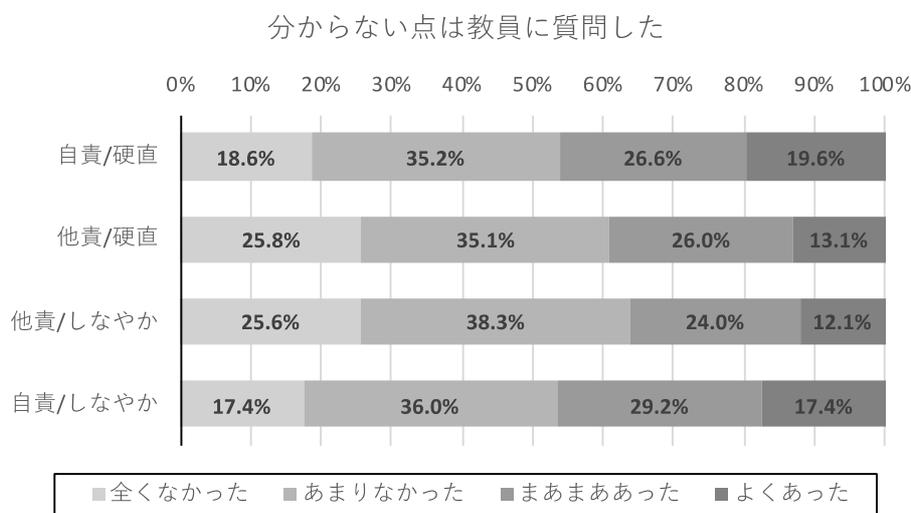


図5-11 入学後行動：分からない点は教員に質問した（4類型, n = 9165）

図5-12 と図5-13 の項目は、真面目さや勤勉さに関わる学習行動である。図5-12 は、「できるだけ授業を休まないようにした」に関する4類型のグラフである。「よくあった」の回答の割合は、特に「自責/しなやか」(60.4%)が高く、「他責/硬直」(45.9%)が低かった。図5-13 は、「積極的に授業の予習・復習をした」に関する4類型のグラフである。「よくあった」の回答の割合は、自責の2類型が24-26%程度、一方他責の2類型は18%程度であり、学びの責任の帰属による違いが見られた。両項目共に、肯定的な回答の自責の割合が高く、真面目に勤勉に学習するうえで、学びの責任の自分自身への帰属が関係しているようである。

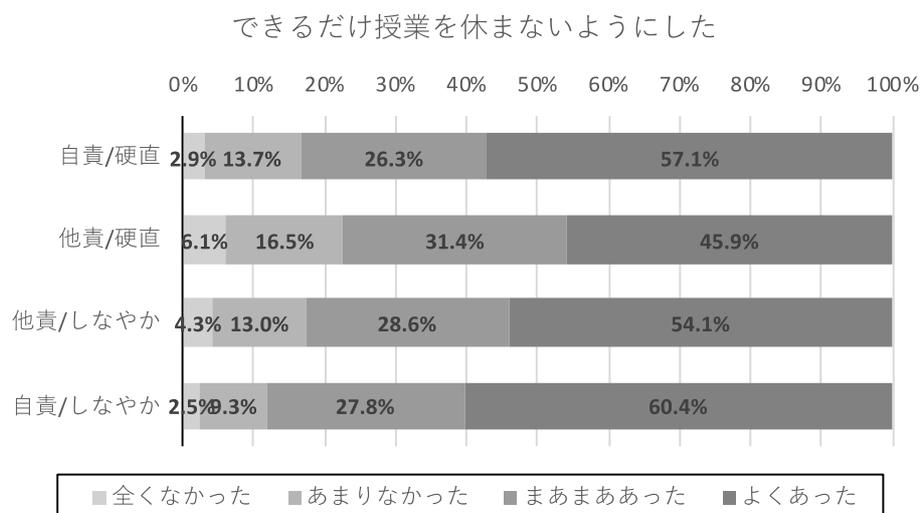


図5-12 入学後行動：できるだけ授業を休まないようにした（4類型， $n = 9163$ ）

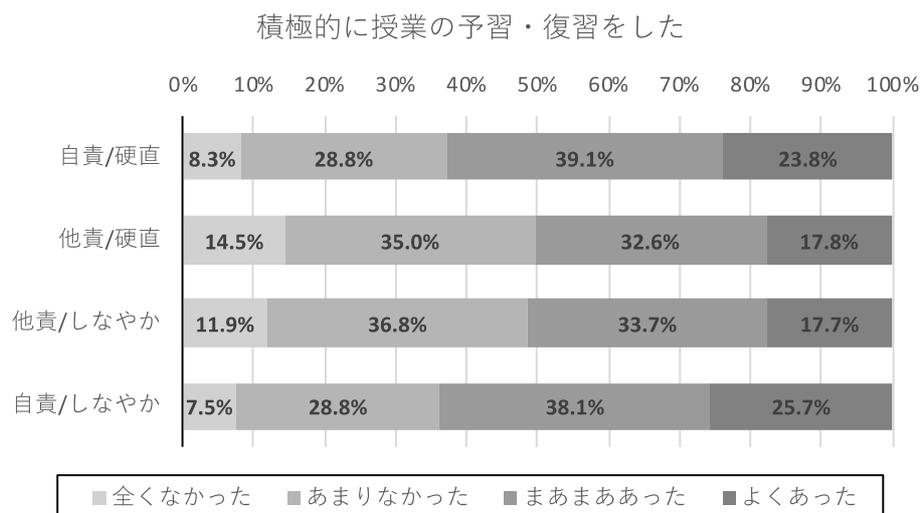


図5-13 入学後行動：積極的に授業の予習・復習をした（4類型， $n = 9165$ ）

本節の最後に、粘り強く勉強することに関して、4類型で特徴が見られた項目をまとめる。質問は「次のことはあなたにどのくらいあてはまりますか。大学（大学院）入学以降の状況をお答えください。それぞれあてはまるものを選択してください。」であり、選択肢は「1. あてはまらない、～4. あてはまる」の4件法であった。

図5-14は、「大学の授業で、自分が好きではないものにも全力で取り組んでいる」に関する4類型のグラフである。「あてはまる」の回答の割合は、「自責/しなやか」(30.9%) > 「自責/硬直」(25.8%) > 「他責/しなやか」(22.6%) > 「他責/硬直」(21.3%)の順であった。特に自責の2類型において違いが見られ、他責の2類型ではほぼ割合に違いはなかった。したがって自分が好きではない授業でも全力で取り組むことにおいて、自分に学びの責任を帰属させることと、しなやかなマインドセットを持つことの両方が組み合わされて影響しているといえる。図5-15は、「なかなか理解できなくてもあきらめずに、しっかり勉強をつづけている」に関する4類型のグラフである。「あてはまる」の回答の割合は、「自責/しなやか」(39.8%) > 「自責/硬直」(33.4%) > 「他責/しなやか」(28.7%) > 「他責/硬直」(25.4%)の順であった。特に自責の2類型が、他責の2類型よりも相対的に割合が大きく、同時に、しなやかな2類型が、硬直の2類型よりも大きかった。特に違いが大きかったのは、「自責/しなやか」と「他責/硬直」の間であり、14%の割合の差が見られた。

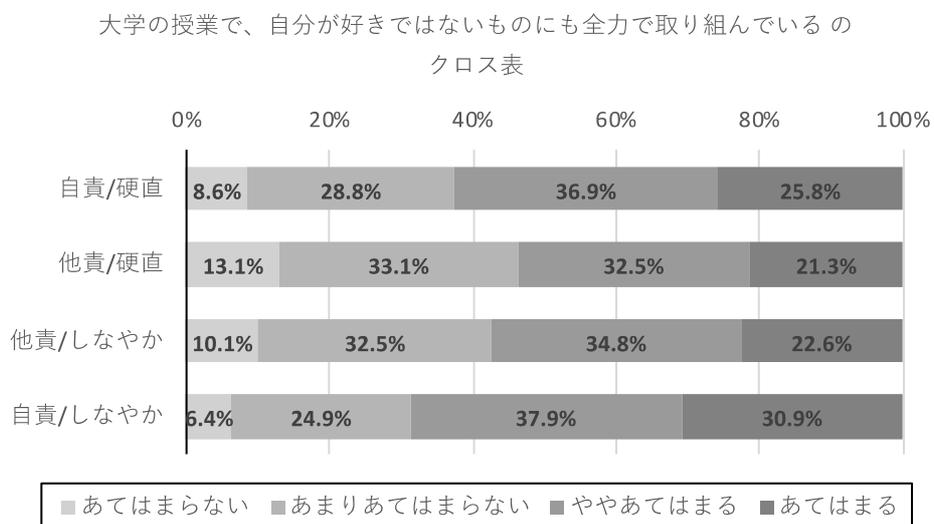


図5-14 入学後状況：大学の授業で自分が好きではないものにも全力で取り組んでいる（4類型， $n = 9194$ ）

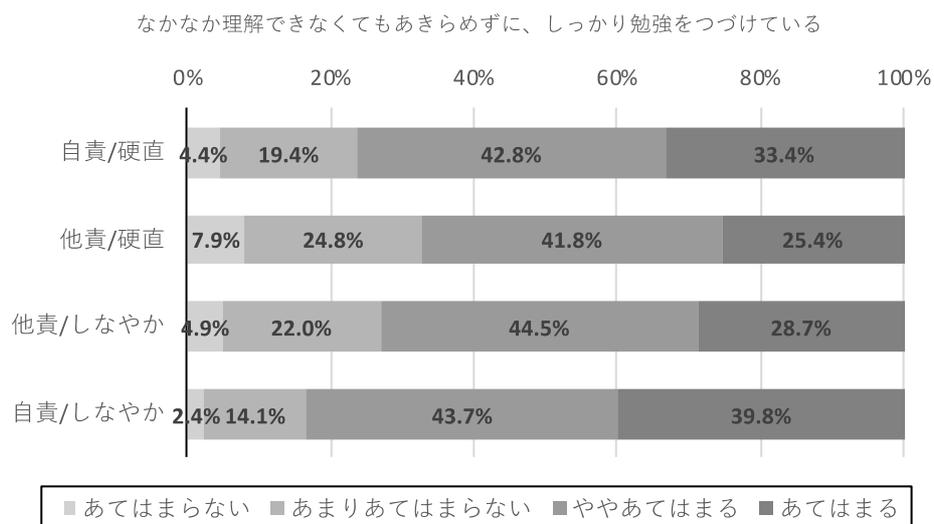


図5-15 入学後状況：なかなか理解できなくてもあきらめずにしっかり勉強をつづけている（4類型, $n = 9192$ ）

5-3. 学習観・マインドセット4類型の特徴：今現在の自分や入学後に身についたこと

次に、学習観・マインドセットの4類型に基づき、特に今現在の自分や、入学後に身についたことに関する質問項目に注目し、特徴的なことをまとめる。今現在の自分自身に関して、4類型で特徴が見られた項目をまとめる。質問は「【いま現在】、次のことはどの程度あてはまりますか。それぞれあてはまるものを選択してください。」であり、選択肢は「1. あてはまらない、～4. あてはまる」の4件法であった。

図5-16は、「自分で必要だと考えた学習や活動に取り組むことができる」に関する4類型のグラフである。「あてはまる」の回答の割合は、「自責/しなやか」(39.7%) > 「自責/硬直」(36.0%) > 「他責/しなやか」(34.7%) > 「他責/硬直」(28.8%)の順であった。図5-17は、「同じ目標に向けて他者と協働することができる」に関する4類型のグラフである。「あてはまる」の回答の割合は、「自責/しなやか」(45.6%) > 「自責/硬直」(36.0%) > 「他責/しなやか」(34.7%) > 「他責/硬直」(28.8%)の順であった。図5-16と図5-17では、特に「自責/しなやか」と「他責/硬直」の間で、割合の違いが顕著であった。

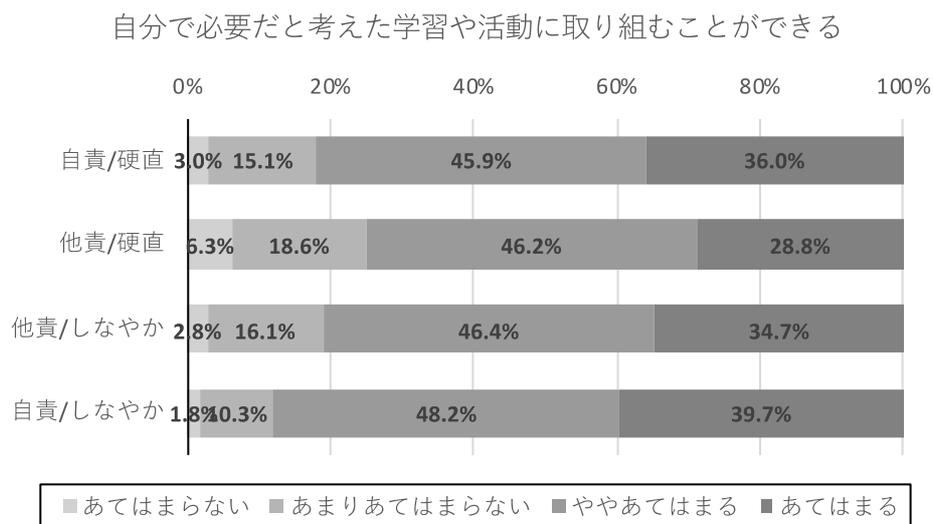


図5-16 今現在：自分で必要だと考えた学習や活動に取り組むことができる（4類型, $n = 9108$ ）

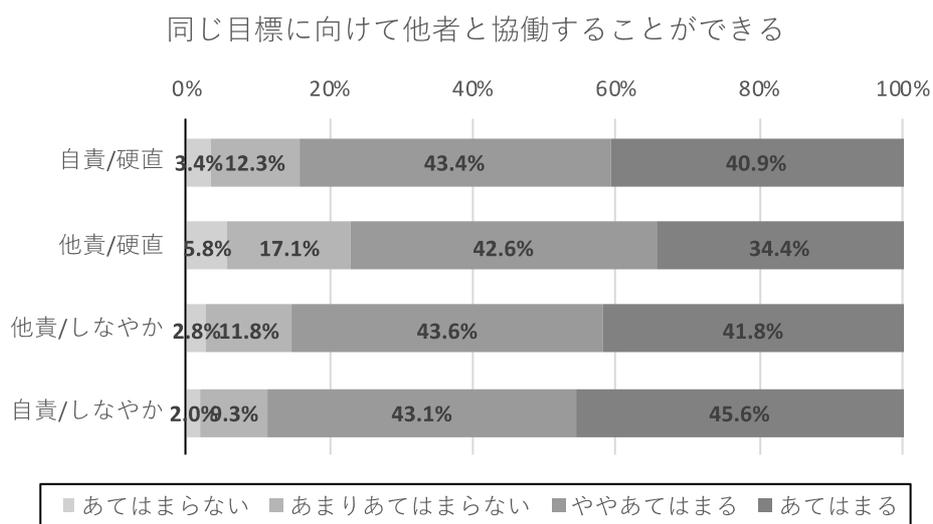


図5-17 今現在：同じ目標に向けて他者と協働することができる（4類型, $n = 9101$ ）

図5-18は、「相手の立場や考え方に共感することができる」の4類型のグラフである。「あてはまる」の割合は、「自責/硬直」(49.8%)、「他責/しなやか」(47.5%)、「自責/しなやか」(51.3%)とおおよそ同じ値を取っているのに対し、「他責/硬直」(36.5%)であり、他の3類型と比較して15%ほど低かった。この項目では「自責/しなやか」だけでなく、他の項目と比較しても「他責/硬直」の間で割合の違いが顕著であった。図5-19では「大学で学んだことを利用して、社会に貢献したいと考えている」について尋ねたものを4類型で分けると、「あてはまる」の回答の割合は「自責/しなやか」(43.1%) > 「自責/硬直」(39.8%) > 「他責/しなやか」(32.4%) > 「他責/硬直」(26.9%)の順であった。「自責/しなやか」と「他責/硬直」の間の差は16.2%であり、大きな差が見て取れる。

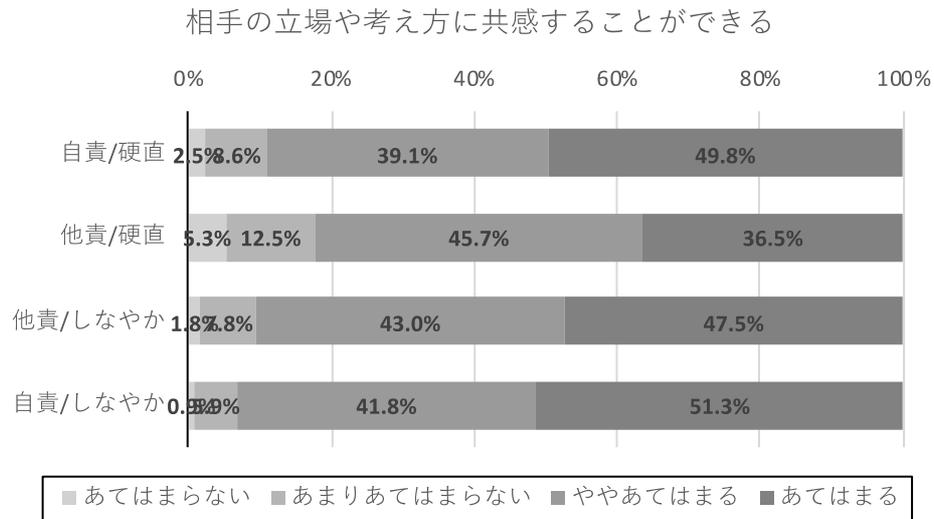


図 5-18 今現在：相手の立場や考え方に共感することができる（4 類型，n = 9100）

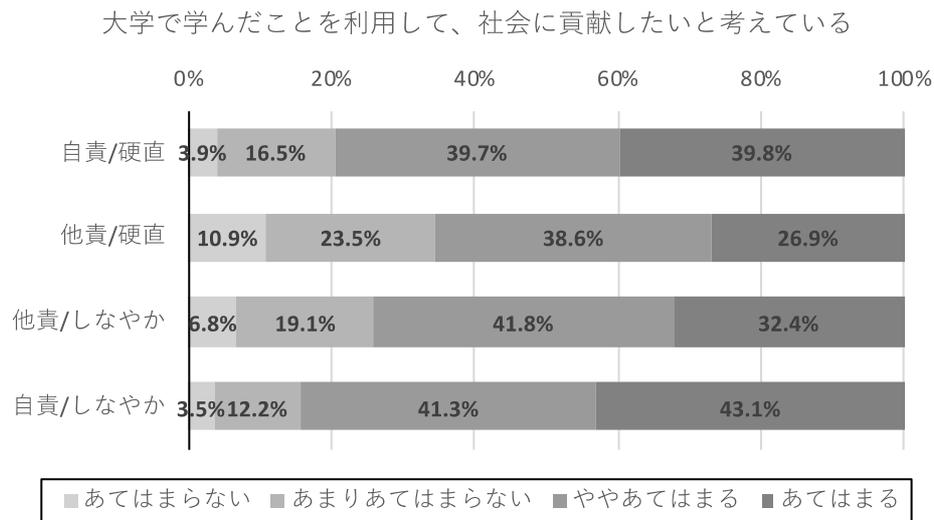


図 5-19 今現在：大学で学んだことを利用して、社会に貢献したいと考えている（4 類型，n = 9099）

図 5-20 以降は、今現在の自分に「身についた」と感じていることを問う質問項目である。質問文は「【いま現在】、次のようなことは、どれくらい身につけていると思いますか」であり、選択肢は「1. 身につけていなかった～4. 身についた」の 4 件法であった。まず、図 5-20 は、「新しいことに挑戦できる」についての 4 類型のグラフであり、「身につけていた」の割合は「自責/しなやか」(36.1%) > 「自責/硬直」(33.0%) > 「他責/しなやか」(31.3%) > 「他責/硬直」(28.5%) であった。全体の値の差自体はさほど大きくないが、割合の差の順序は「今現在あてはまること」と同様となっていた。関連する質問として図 5-21 の「既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる」では、「自責/

しなやか」(24.8%)と「自責/硬直」(24.0%)が同等の数値となっており、それとやや値が開いて「他責/しなやか」(21.5%)と「他責/硬直」(20.4%)という結果となった。「身についていた」の回答をめぐっては、「自責」か「他責」か、という点が影響を与えていることが推測される。

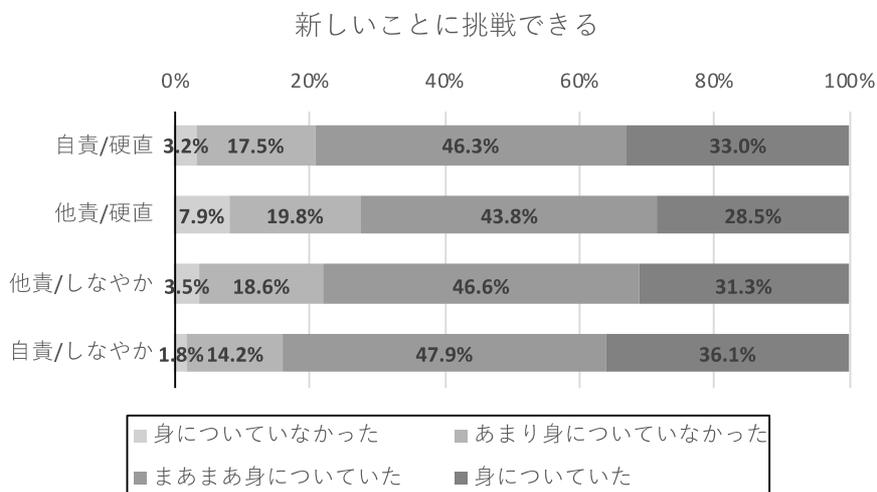


図5-20 今現在：新しいことに挑戦できる（4類型, n = 9108）

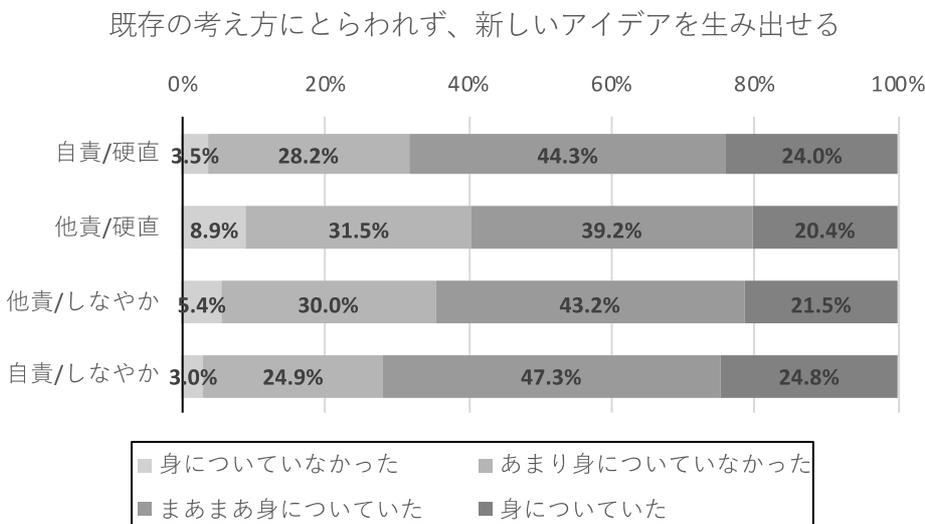


図5-21 今現在：既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる（4類型, n = 9101）

図5-22では、「物事を論理的に考えることができる」についての4類型であるが、回答は「自責/しなやか」(35.5%)・「他責/しなやか」(35.2%)・「自責/硬直」(33.9%)・「他責/硬直」(31.7%)であり、ほとんど差は見られない。同様に、図5-23は「課題の解決方法を提案できる」であるが、「身についていた」の割合は「自責/硬直」が最も高く(33.7%)、最も低い「他責/硬直」(29.0%)との差はほとんどない。これらは論理的思考や課題解決力の定着を問う質問項目であるが、この回答傾向に4類型の影響がみられないことは示唆的である。

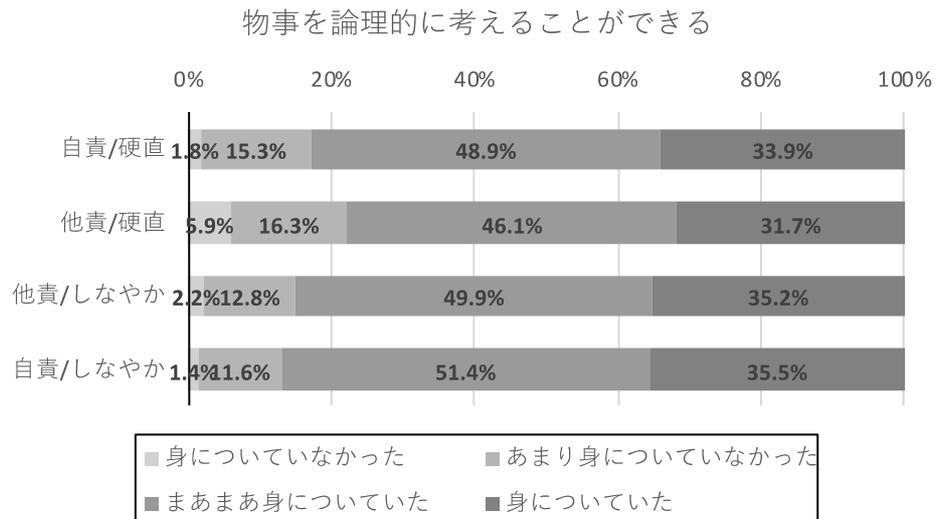


図5-22 今現在：物事を論理的に考えることができる（4類型， $n = 9103$ ）

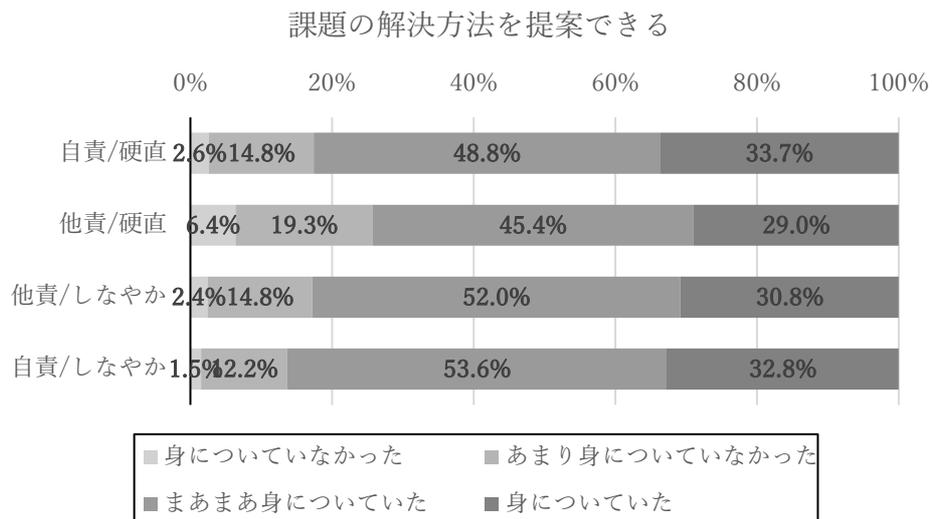


図5-23 今現在：課題の解決方法を提案できる（4類型， $n = 9095$ ）

図5-24は、「物事を多面的に考えることができる」であり、4類型で「身についていた」の割合をみると、「自責/硬直」（41.0%）・「自責・しなやか」（40.3%）が同等の値であり、続いて「他責/しなやか」（36.3%）、「他責/硬直」（33.7%）が続く。「他責/硬直」が最も低い点は他の項目と同様であるが、「自責/硬直」「自責・しなやか」がほぼ同様の値を取っている点が特徴的である。同様に、「異文化を理解できる」（図5-25）についても、「自責/硬直」と「自責・しなやか」は同様の値であり（41.0%）、「他責/しなやか」（35.6%）、「他責/硬直」（32.9%）となっている。こうした物事への見方に関する項目においても、「身についていた」の回答をめぐっては、「自責」か「他責」か、という点が影響を与えているようである。

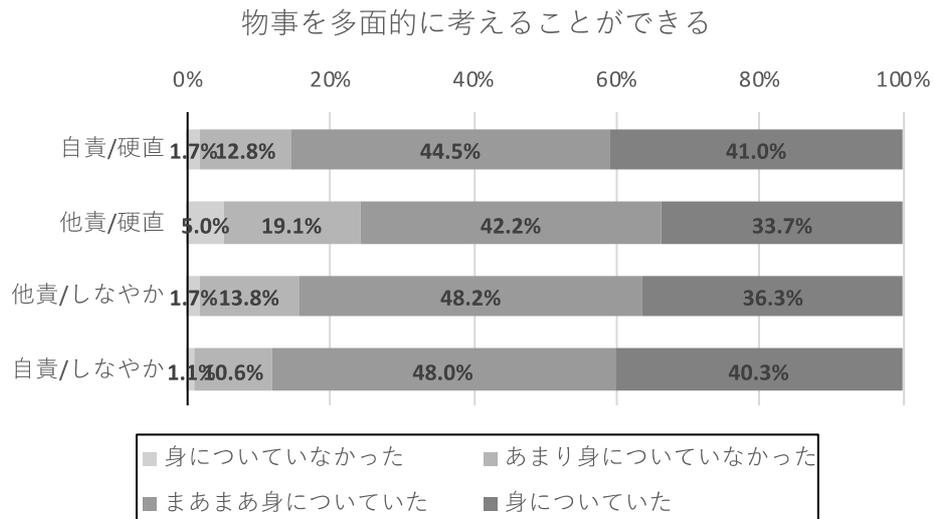


図5-24 今現在：物事を多面的に考えることができる（4類型， $n = 9100$ ）

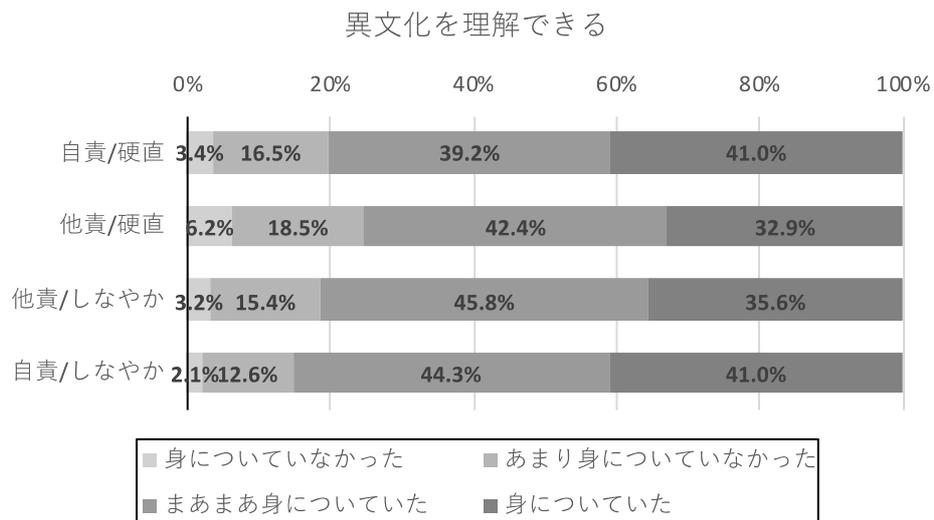


図5-25 今現在：異文化を理解できる（4類型， $n = 9100$ ）

最後に図5-26の「自身の専門に関する知識」についての4類型であるが、「身についていた」の割合をみると、「自責/硬直」（20.1%）・「自責・しなやか」（19.5%）が同等の値であり、それらとは5%ほど低い値で「他責/硬直」（15.1%）、「他責/しなやか」（14.7%）となっている。この点も同様に「自責」類型と「他責」類型で傾向に差がみられる結果となった。

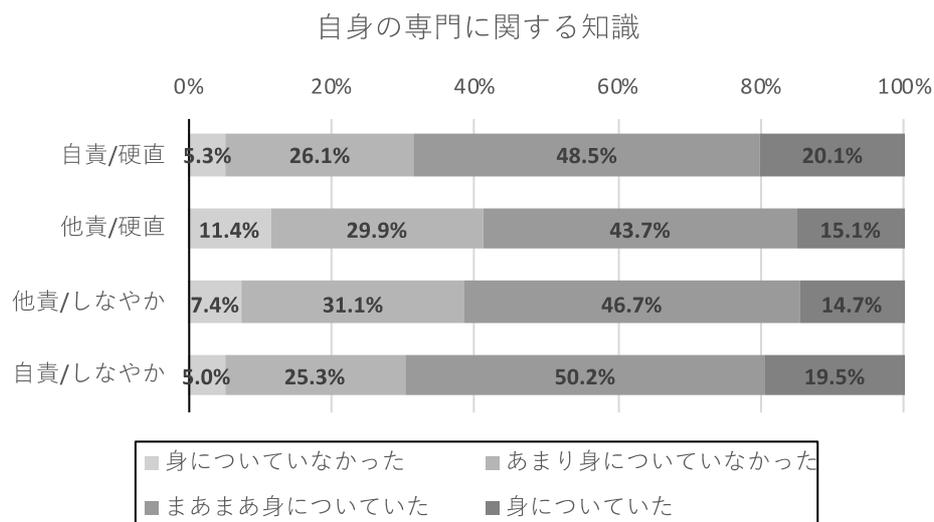


図5-26 今現在：自身の専門に関する知識（4類型， $n = 9107$ ）

5-4. まとめ

本章では、学生の学習観・マインドセットに焦点を当てて分析をおこなった。本調査において設定された、「(1) A. 知識や技能を身に付けられるかどうかは、大学や教員の責任である or B. 知識や技能を身に付けられるかどうかは、学生自身の責任である」と、「(2) A. 大学で知識は増やせるが、元々の賢さは変わらないと思う or B. 大学で努力して学習すれば、それに応じて賢くなると思う」という質問に注目をした。前者(1)は、知識の獲得や成長に関する責任の所在、つまり学習の原因帰属に関する質問であり、後者(2)は、自分の知能を伸ばせるものと認識するかどうかという、知能観(マインドセット)に関する質問である。これら2つの質問を軸とした、学生の学習観・マインドセットの4類型に基づき、特徴的な質問項目についてまとめた。

全体的な傾向としては、「自責/しなやか」の肯定的な回答の割合が大きく、相対的に「他責/硬直」の割合は小さかった。特に入学後の学習行動や経験や学習成果は、学習の責任を自分自身に帰属させている(自責)か、自分の外に帰属させている(他責)かが、差をもたらしているようであり、「自責/しなやか」>「自責/硬直」>「他責/しなやか」>「他責/硬直」という順序になることが多かった。そのうえで、知能観(マインドセット)が、しなやかか硬直かということの違いも見られた。

また以降の章末資料に掲載したが、早稲田大学を選んだ理由なども、肯定的な回答の割合は、自責の2類型が大きい、または特に「他責/硬直」が低かった。一方で、大学への満足度や、心身の健康といった質問項目は、知能観(マインドセット)が、しなやかか硬直かということの影響が、比較的大きいように見られた。この場合の各類型の順序は、「自責/しなやか」>「他責/しなやか」>「自責/硬直」>「他責/硬直」となることが多いようである。

5-5. 章末資料

4 類型に基づく特徴的な質問項目として、早稲田大学を選んだ理由、大学・学部志望度、大学満足度、身体・精神面の健康、についてグラフを資料として掲載する。

① 早稲田大学を選んだ理由

質問文：あなたが大学（大学院）に進学する上で、早稲田大学（大学院）を選んだ理由は何ですか。それぞれあてはまるものを選択してください。

選択肢：選択肢：1. あてはまらない～4. あてはまる、のリッカート4件法

早稲田大学を選んだ理由：自分の志望する専門分野があった

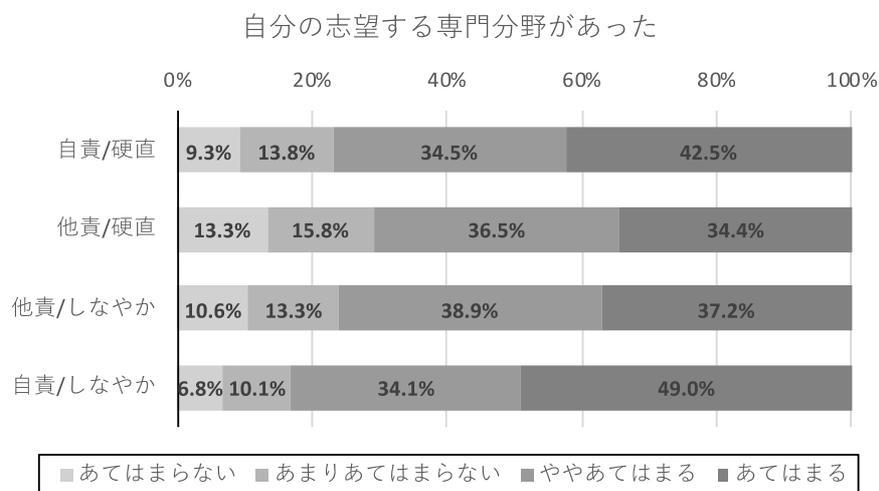


図5-A1 早稲田大学を選んだ理由：自分の志望する専門分野があった（4 類型， $n = 9190$ ）

早稲田大学を選んだ理由：伝統・校風が好き

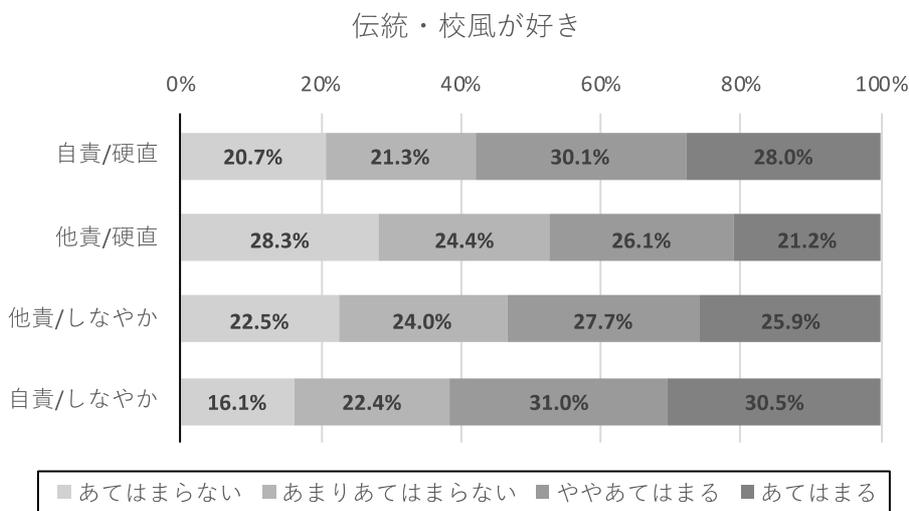


図5-A2 早稲田大学を選んだ理由：伝統・校風が好き（4 類型， $n = 9170$ ）

早稲田大学を選んだ理由：希望した大学に入れなかった

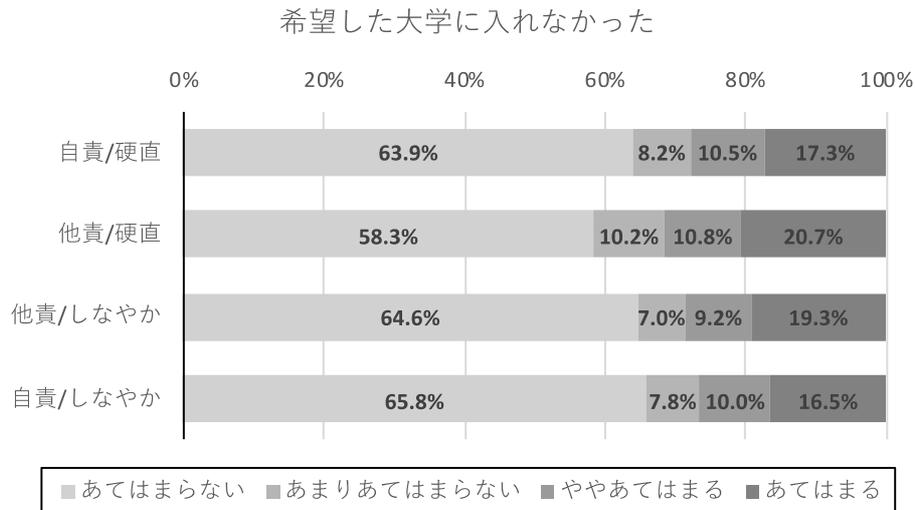


図5-A3 早稲田大学を選んだ理由：希望した大学に入れなかった（4類型，n = 9180）

② 志望度（大学・学部）

質問文：学習観タイプ と 早稲田大学（大学院）と学部（研究科）は第一志望でしたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

選択肢：1. 第一志望ではなかった， 2. 第一志望であった、の2件法

志望度：早稲田大学

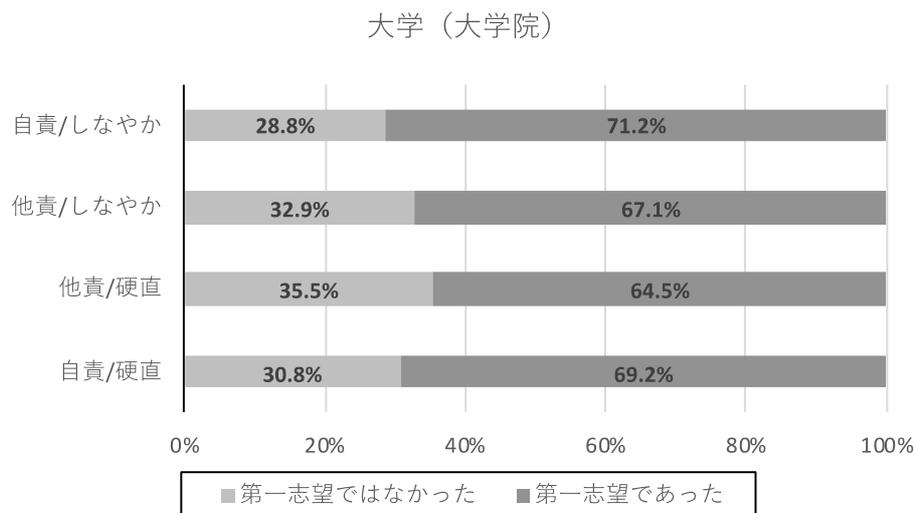


図5-A4 志望度：早稲田大学（4類型，n = 9122）

志望度：学部

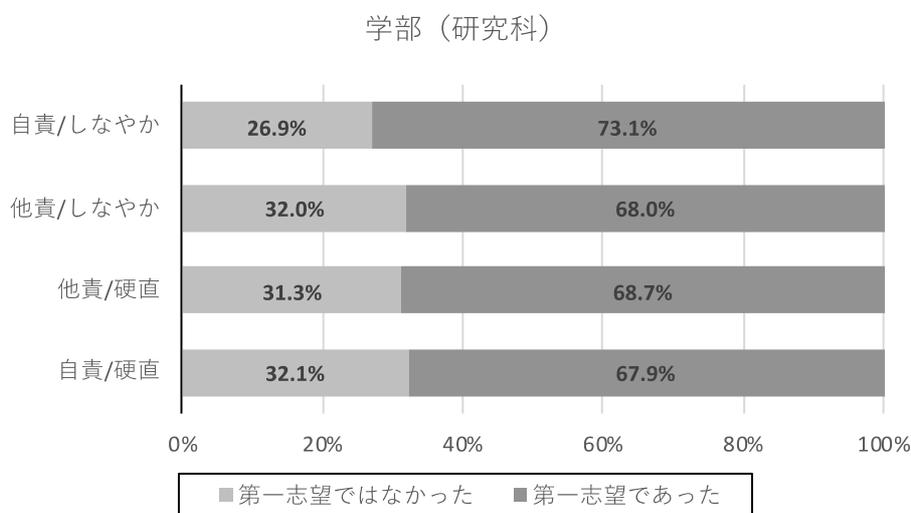


図5-A5 志望度：学部（4類型, n = 9145）

③ 大学満足度

質問文：これまでの大学（大学院）生活を振り返り、授業や学生生活等の満足度についてどのように評価しますか。それぞれあてはまるものを選択してください。

選択肢：1. 満足していない～4. 満足している, 5. 参加/経験していない, の5件法であり、報告にあたり、1.～4. を選択した回答を使用した（これにより n は他の項目より少ない）

大学満足度：一般教育科目

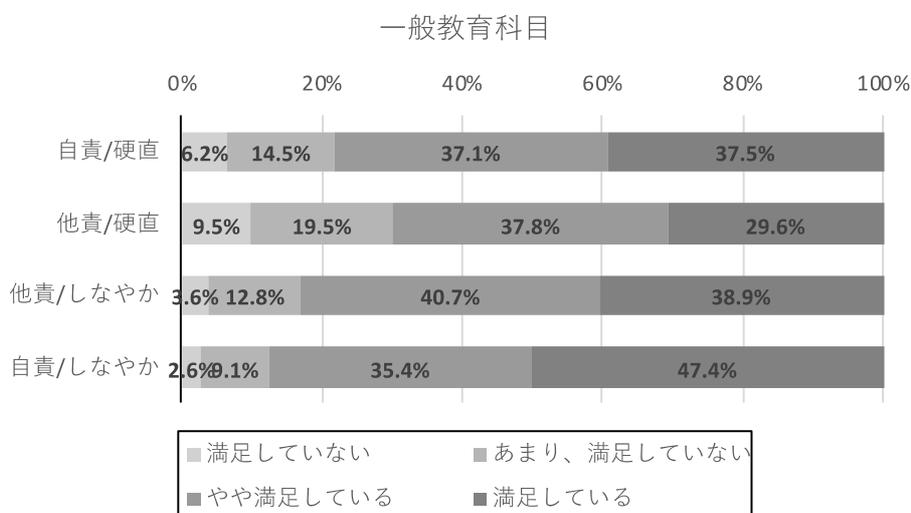


図5-A6 大学満足度：一般教育科目（4類型, n = 8643）

大学満足度：専門科目

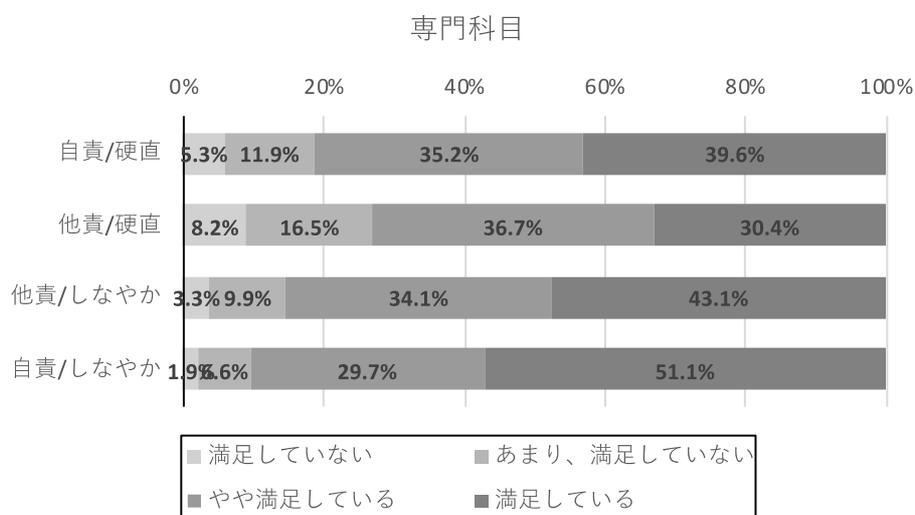


図5-A7 大学満足度：専門科目（4 類型, $n = 8141$ ）

大学満足度：ゼミ

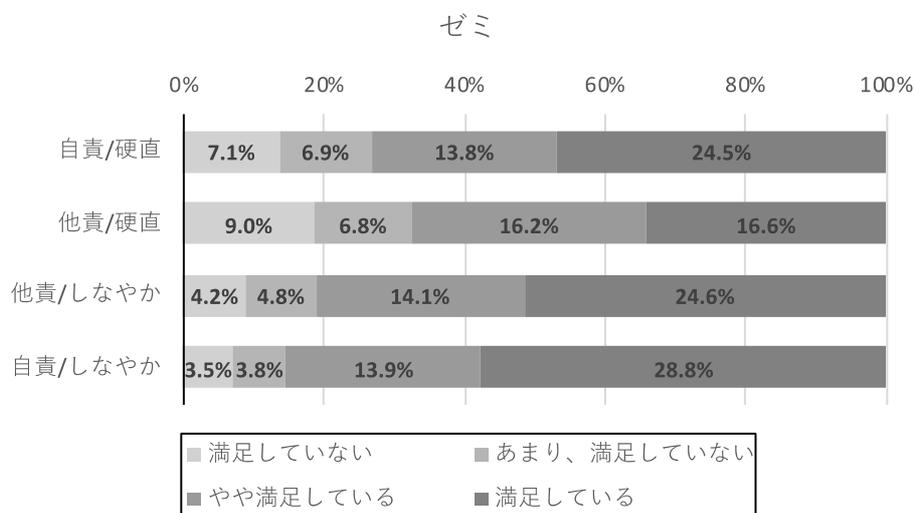


図5-A8 大学満足度：ゼミ（4 類型, $n = 4436$ ）

大学満足度：卒業研究

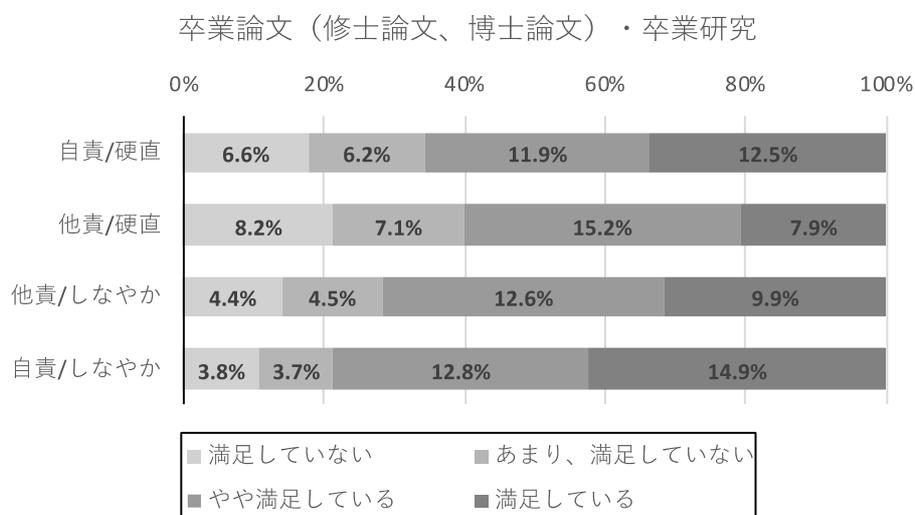


図5-A9 大学満足度：卒業論文・卒業研究（4類型，n = 3099）

大学満足度：部活動やサークル活動

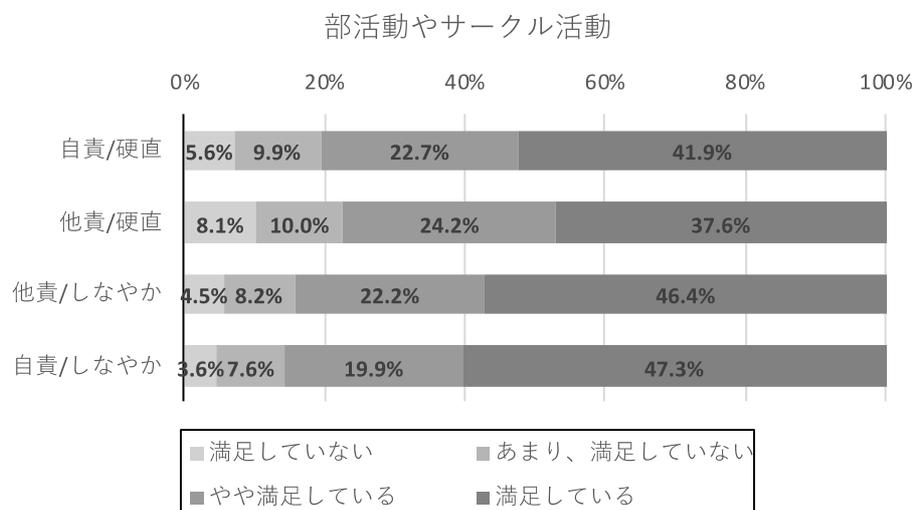


図5-A9 大学満足度：卒業論文・卒業研究（4類型，n = 7212）

大学満足度：友人関係

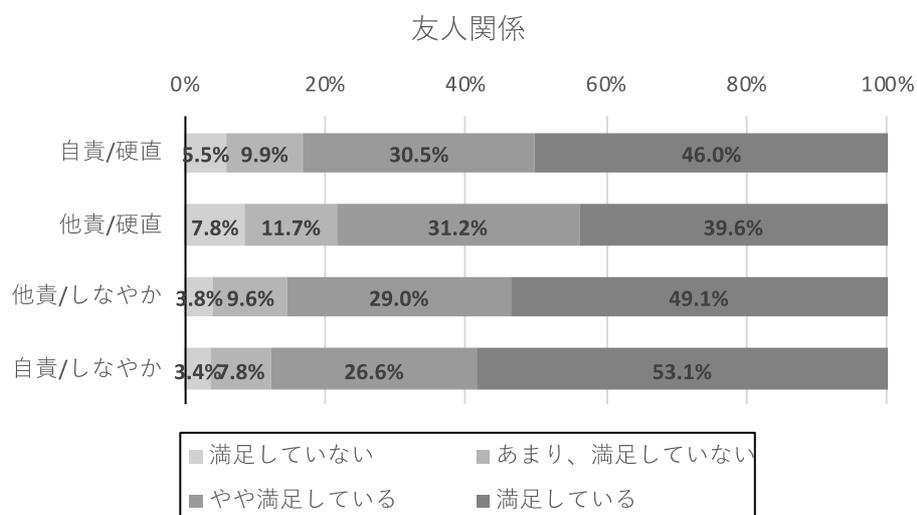


図5-A10 大学満足度：友人関係（4類型, $n = 8262$ ）

大学満足度：教員との人間関係

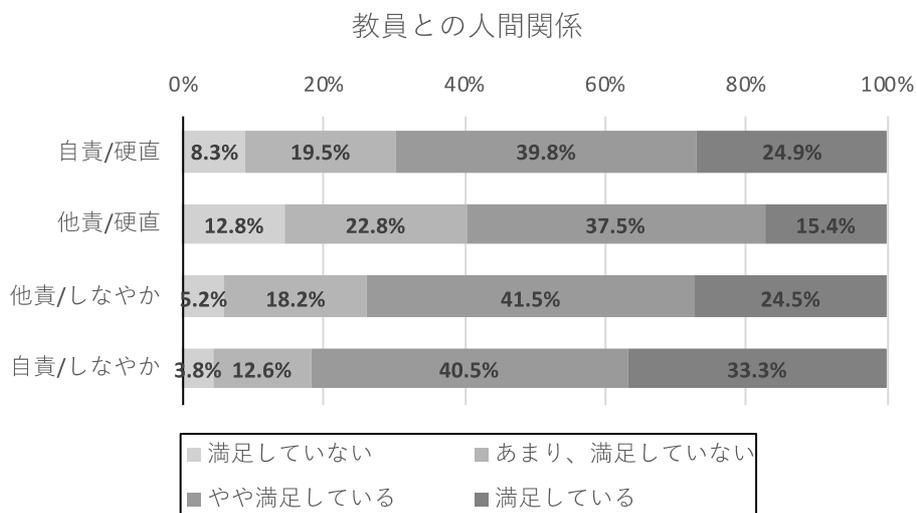


図5-A11 大学満足度：教員との人間関係（4類型, $n = 8151$ ）

④ 身体面・精神面の健康

質問文：あなたは現在、身体面・精神面で健康ですか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。この質問項目に回答したくない場合には、未回答のままで結構です。

選択肢：1. あまり健康ではない（あまり健康ではない（勉学に支障を来すことが多い）, 2. ほぼ健康である（月に1回程度支障がある）, 3. 健康である（勉学に支障がない）, 4. とても健康である、の4件法

健康：身体面

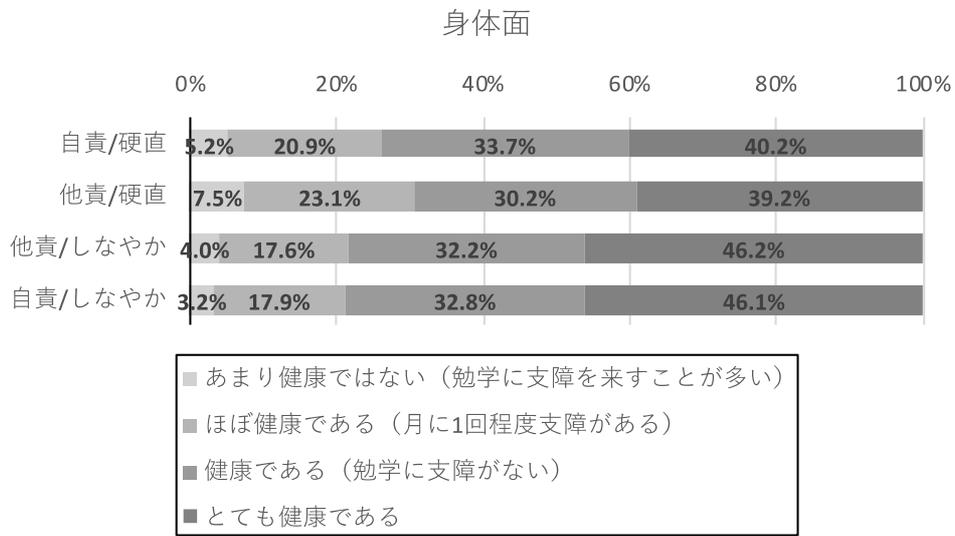


図5-A12 健康：身体面（4類型, n = 8899）

健康：精神面

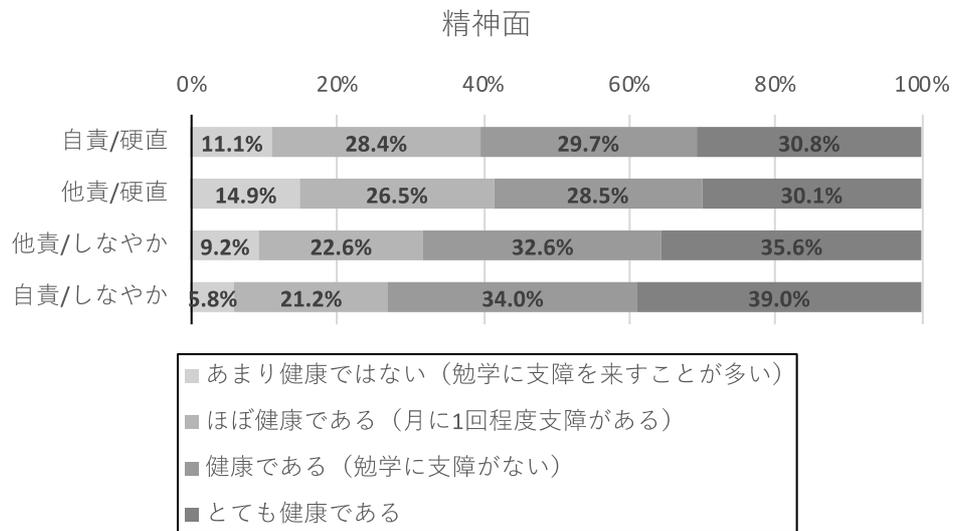


図5-A13 健康：身体面（4類型, n = 8855）

2023 年度 学生生活・学修行動調査 集計表

I. 調査概要

II. 調査項目 ※網掛け部分の自由記述は割愛

1. 基本情報・これまでの経験

- Q01. あなたの出身高校は、次のどれにあてはまりますか。それぞれ 1 つを選択してください。
- Q02. あなたの出身高校は、次のどれにあてはまりますか。それぞれ 1 つを選択してください- 3 年制 or 中高
- Q03. あなたが中学生の頃、次のようなことは、どのくらいあてはまりましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。
- Q04. あなたが「高校 2 年生の 2 学期」の頃、学校の授業以外の学習時間がどれほどだったのか、「平日（ふだん）」と「定期試験期間中」についてお答えください。塾・予備校での学習時間も含めます。それぞれあてはまるものを選択してください。
- Q05. あなたが高校生の頃、次のことはどれほど経験しましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。
- Q06. あなたの高校生の頃を振り返り、以下のような活動において、参加していましたか。
- Q07. あなたの高校生の頃を振り返り、以下のような活動において、リーダー的な役割を担いましたか。
- Q08. あなたの高校時代について、次のことはどの程度あてはまりますか。それぞれあてはまるものを選択してください。
- Q09. 中学 3 年の時と高校 3 年の時の成績は、あなたの通っていた学校のなかでどのあたりでしたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。
- Q10. あなたの高校時代について、次のことはどれほどありましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。
- Q11. 大学入学以前の海外経験についてお答えください。
- Q12. あなたが早稲田大学（大学院）に進学した理由は何ですか。あてはまるものすべてを選択してください。
- Q13. （大学院生のみ）あなたの大学院入学までのキャリアについてあてはまるものを一つ選択してください。
- Q14. （大学院生のみ）あなたが大学院に進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選択してください。
- Q15. 早稲田大学（大学院）と学部（研究科）は第一志望でしたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

2. 学修状況

- Q16. （学部 1 年生のみ）あなたは入学前に、早稲田大学のアドミッション・ポリシー（AP）を確認しましたか。
- Q17. あなたは大学（大学院生の場合、大学院）入学の時点で、次のことはどの程度あてはまっていたか。それぞれあてはまるものを選択してください。
- Q18. 【大学（学部・大学院）入学時】に、次のようなことは、どれくらい身に付いていたと考えていましたか。それぞれ

最も当てはまるものを選択してください。

Q19. 次のことはあなたにどのくらい当てはまりますか。大学（大学院）入学以降の状況をお答えください。それぞれ当てはまるものを選択してください。

Q20. 大学教育について、「現在の」あなたの考え方で、A、Bにより近い方をそれぞれ一つ選択してください。

Q21. あなたは大学（学部・大学院）での授業や研究・勉強が、あなたの今後の進路先で役に立つと思いますか。当てはまるもの一つを選択してください。

Q22. あなたが授業を選ぶ際に重視することは何ですか。当てはまるものすべてを選択してください。

Q23. 現在の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間について、当てはまる時間数を選択してください。それぞれ当てはまるものを選択してください。

Q24. 大学（大学院）入学以降、あなたの授業平均出席率はどれくらいですか。もっとも当てはまるものを一つ選択してください。

Q25. あなたは大学（大学院）入学以降、次のことにどれほど意欲的に取り組んできましたか。それぞれ当てはまるものを選択してください。

Q26. あなたは大学（大学院）入学以降、次のことをどれほど経験しましたか。それぞれ当てはまるものを選択してください。

Q27. 大学（大学院）入学以降のあなたについて、次のことはどれほどありましたか。それぞれ当てはまるものを選択してください。

Q28. 大学（大学院）入学以降、以下のような活動に所属、参加していますか。それぞれの内容について当てはまるものを選択してください。

Q29. 大学入学以降、以下のような活動において、参加していますか。

Q30. 大学入学以降、以下のような活動において、リーダー的な役割を担いましたか。

Q31. 大学（大学院）入学以降の【留学経験】について、あなたの状況をお答えください。それぞれ当てはまるものを選択してください。

Q32. 留学を考えるにあたって、以下のことはどれほど気になりますか。それぞれ当てはまるものを選択してください。

Q33. 大学（大学院）入学以降の【インターンシップ経験】について、あなたの状況をお答えください。それぞれ当てはまるものを選択してください。

Q34. いま現在の居住形態をお答えください。当てはまるものを選択・記入してください。

Q35. 現在、あなたは学部・大学院卒業後、どのような進路を考えていますか。最も当てはまるものを選択してください。内定している場合には、内定先を選択してください。

Q36. あなたは、自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたいという考え）を持っていますか。また、持っている場合は、その見通しに関するいまの状況についてもお答えください。最も当てはまるものを選択してください。-見通し

Q37. あなたは、自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたいという考え）を持っていますか。また、持っている場合は、その見通しに関するいまの状況についてもお答えください。最も当てはまるものを選択してください。-見通しの状況

Q38. あなたは、就職するうえで、次の点はどの程度重要だと思いますか。それぞれあてはまるものを選択してください。

Q39. あなたは、仕事や就職先にどのようなことを望みますか、A、B でより近い方をそれぞれ一つ選択してください。

3. 学修成果・満足度等

Q40. 【いま現在】、次のことはどの程度あてはまりますか。それぞれあてはまるものを選択してください。

Q41. 【現在】あなたは、次のそれぞれについて、どれくらい身に付いたと思いますか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

Q42. これまでの大学（大学院）生活を振り返り、授業や学生生活等の満足度についてどのように評価しますか。それぞれあてはまるものを選択してください。

Q43. 大学（大学院）生活全般について、10点満点で満足度得点をつけるとすれば、何点になりますか。また、高校生活全般についても同様に得点をつけるとすれば、何点になりますか。

Q44. あなたは現在、身体面・精神面で健康ですか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。この質問項目に回答したくない場合には、未回答のまま結構です。

Q45. 現在、次のような不安や悩みがありますか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。この質問項目に回答したくない場合には、未回答のまま結構です。

I. 調査概要

- ◆ **調査方法** 「Qualtrics」を用いたオンライン調査
- ◆ **調査時期** 2023年6月23日（金）～2023年7月21日（金）
- ◆ **調査対象者** 早稲田大学の学生 46,112名
- ◆ **回収状況** 13,175件 回収率（28.6%）

※本報告書の集計表では一部不備のあったデータを除いて作成した。

- ◆ **調査結果引用に関するお願い**

本調査結果を引用される際には、下記の出典を明記くださいますようお願いいたします。

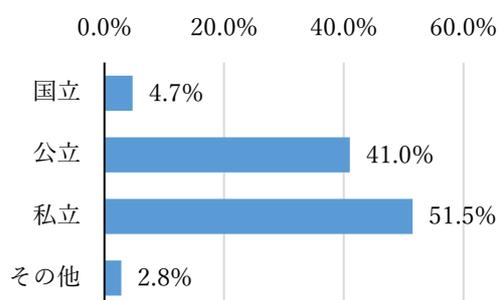
著者：早稲田大学大学総合研究センター

タイトル：2023年度 学生生活・学修行動調査

II. 調査項目

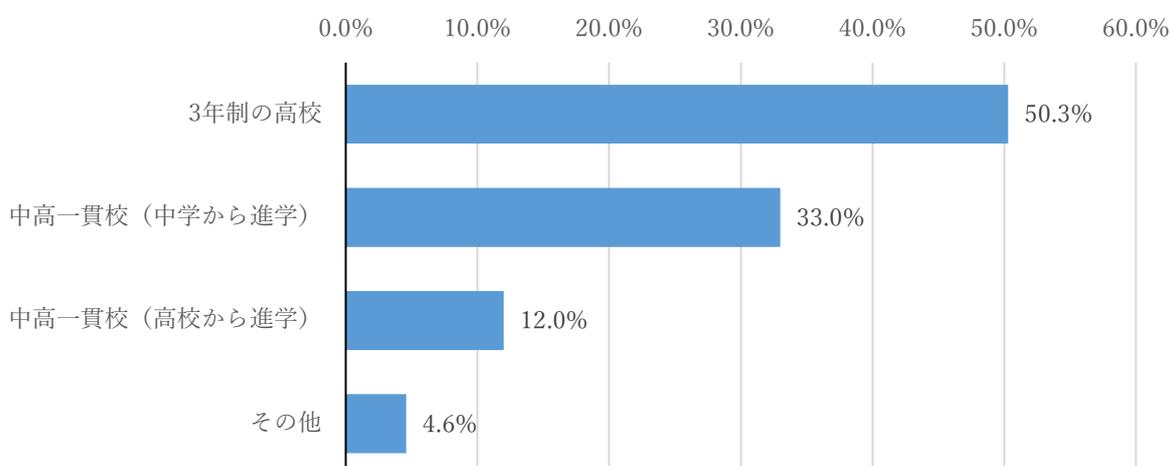
1. 基本情報・これまでの経験

Q01. あなたの出身高校は、次のどれにあてはまりますか。それぞれ1つを選択してください。



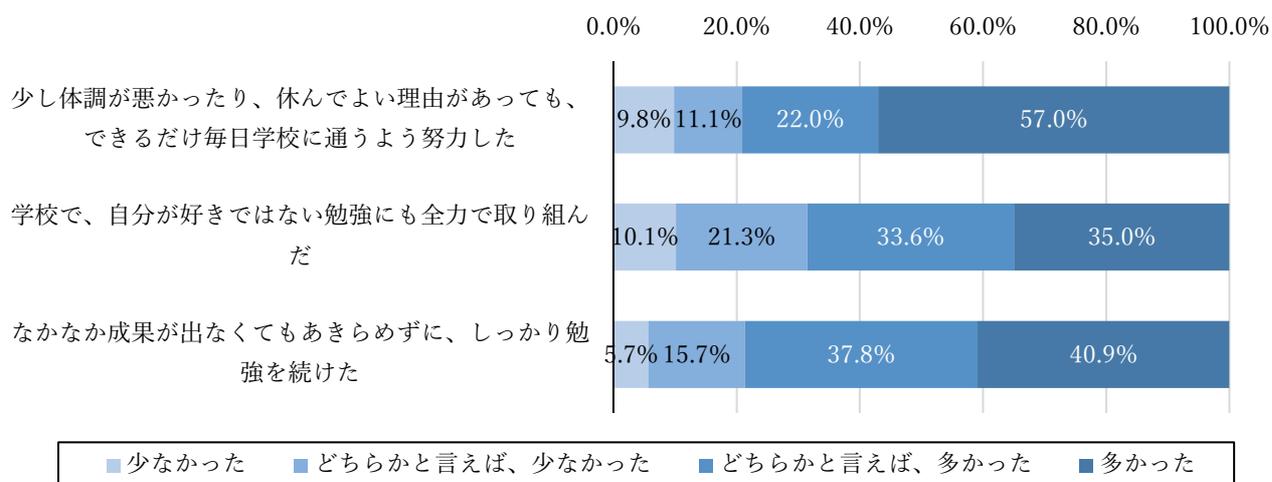
国立	561
公立	4,938
私立	6,193
その他	342

Q02. あなたの出身高校は、次のどれにあてはまりますか。それぞれ1つを選択してください- 3年制 or 中高



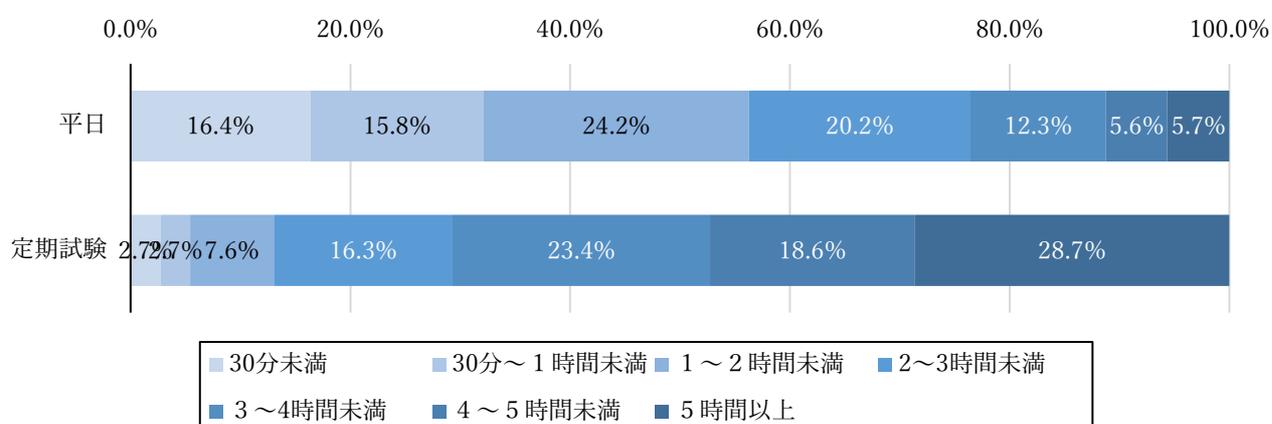
3年制の高校	6,002
中高一貫校 (中学から進学)	3,942
中高一貫校 (高校から進学)	1,437
その他	548

Q03. あなたが中学生の頃、次のようなことは、どのくらいあてはまりましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



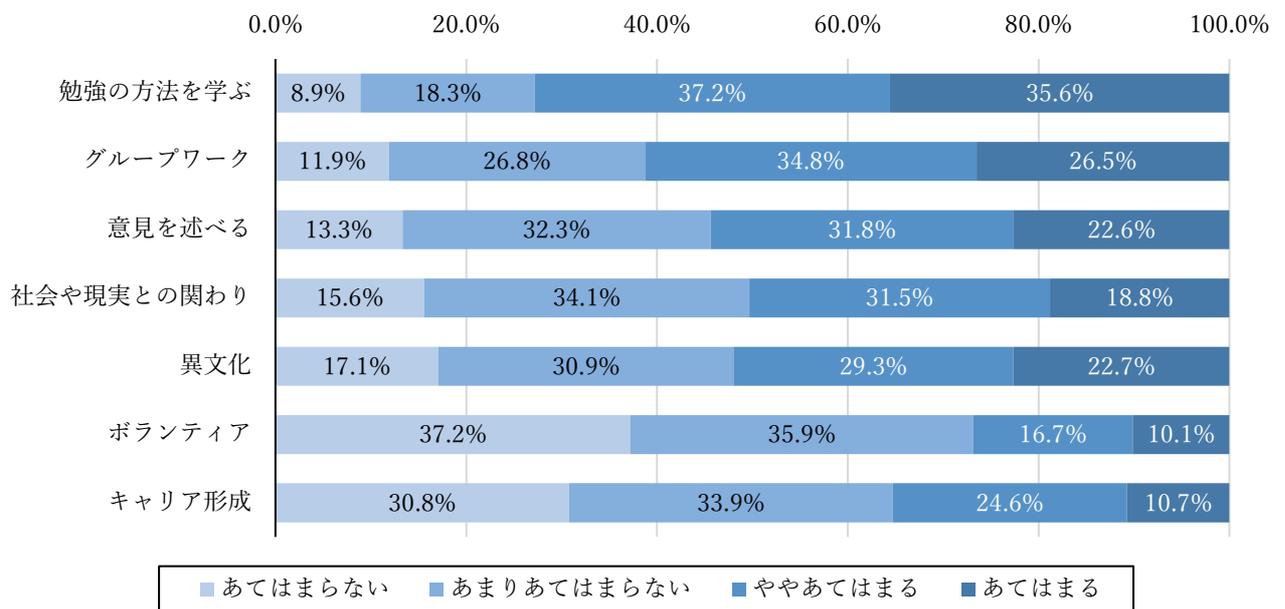
	少なかった	どちらかと言えば、少なかった	どちらかと言えば、多かった	多かった
少し体調が悪かったり、休んでよい理由があっても、できるだけ毎日学校に通うよう努力した	1,207	1,365	2,707	7,009
学校で、自分が好きではない勉強にも全力で取り組んだ	1,245	2,619	4,122	4,292
なかなか成果が出なくてもあきらめずに、しっかり勉強を続けた	695	1,920	4,638	5,015

Q04. あなたが「高校2年生の2学期」の頃、学校の授業以外の学習時間がどれほどだったのか、「平日（ふだん）」と「定期試験期間中」についてお答えください。塾・予備校での学習時間も含めます。それぞれあてはまるものを選択してください。



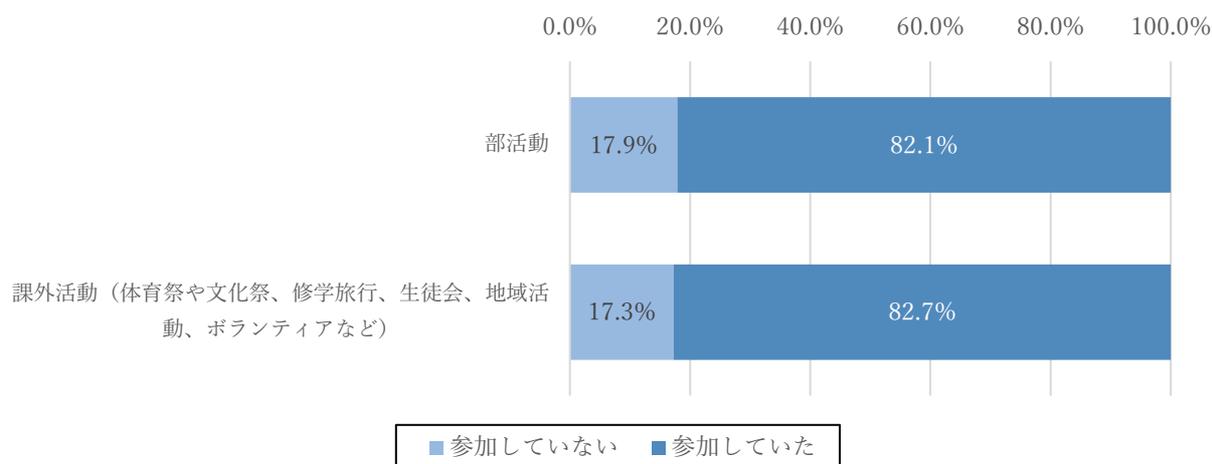
	30分未満	30分～1時間未満	1～2時間未満	2～3時間未満	3～4時間未満	4～5時間未満	5時間以上
中学3年の時	2,004	1,931	2,958	2,469	1,507	684	694
高校3年の時	330	328	925	1,974	2,843	2,257	3478

Q05. あなたが高校生の頃、次のことはどれほど経験しましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。



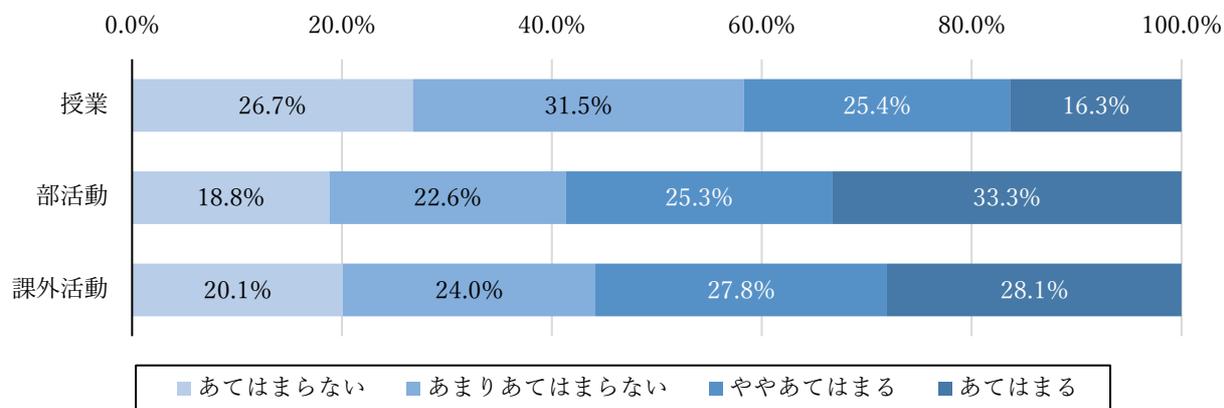
	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
勉強の方法を学ぶ	1093	2235	4561	4357
グループワーク	1461	3289	4261	3249
意見を述べる	1635	3964	3901	2775
社会や現実との関わり	1914	4184	3867	2309
異文化	2097	3796	3595	2780
ボランティア	4569	4407	2054	1245
キャリア形成	3778	4162	3016	1317

Q06. あなたの高校生の頃を振り返り、以下のような活動において、参加していましたか。



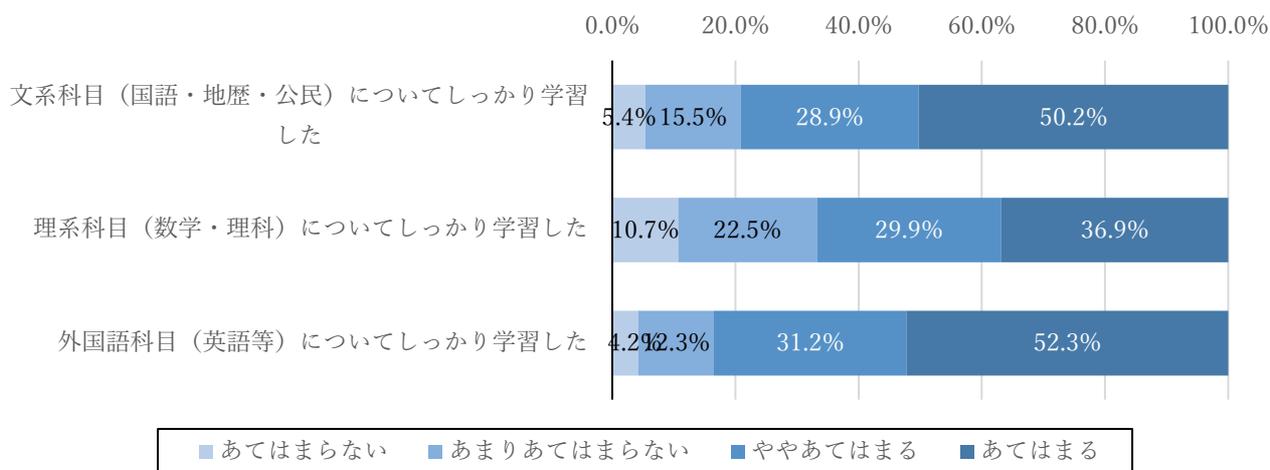
	参加していない	参加していた
部活動	2186	10027
課外活動 (体育祭や文化祭、修学旅行、生徒会、地域活動、ボランティアなど)	2115	10137

Q07. あなたの高校生の頃を振り返り、以下のような活動において、リーダー的な役割を担いましたか。



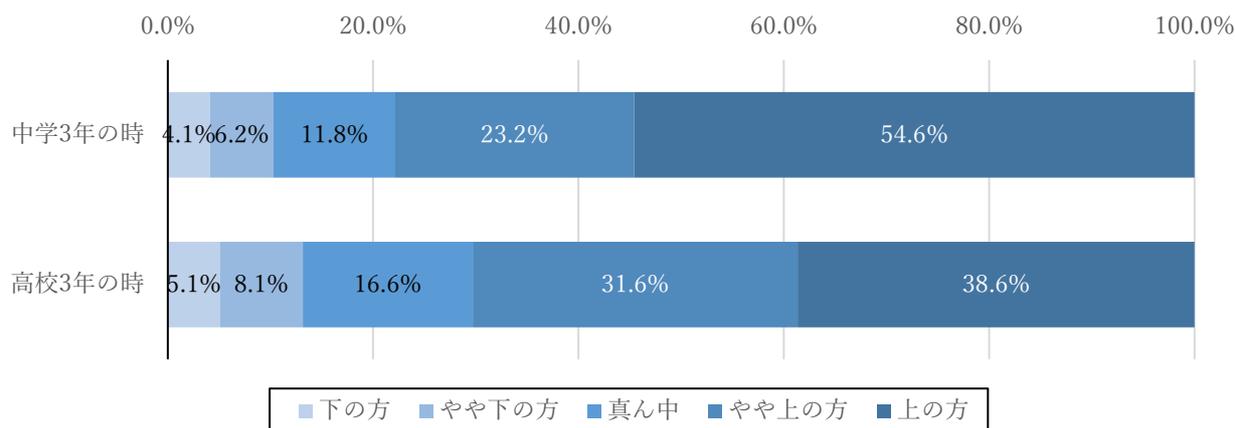
	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
授業	3226	3804	3062	1971
部活動	1855	2226	2499	3288
課外活動	2007	2399	2775	2801

Q08. あなたの高校時代について、次のことはどの程度あてはまりますか。それぞれあてはまるものを選択してください。



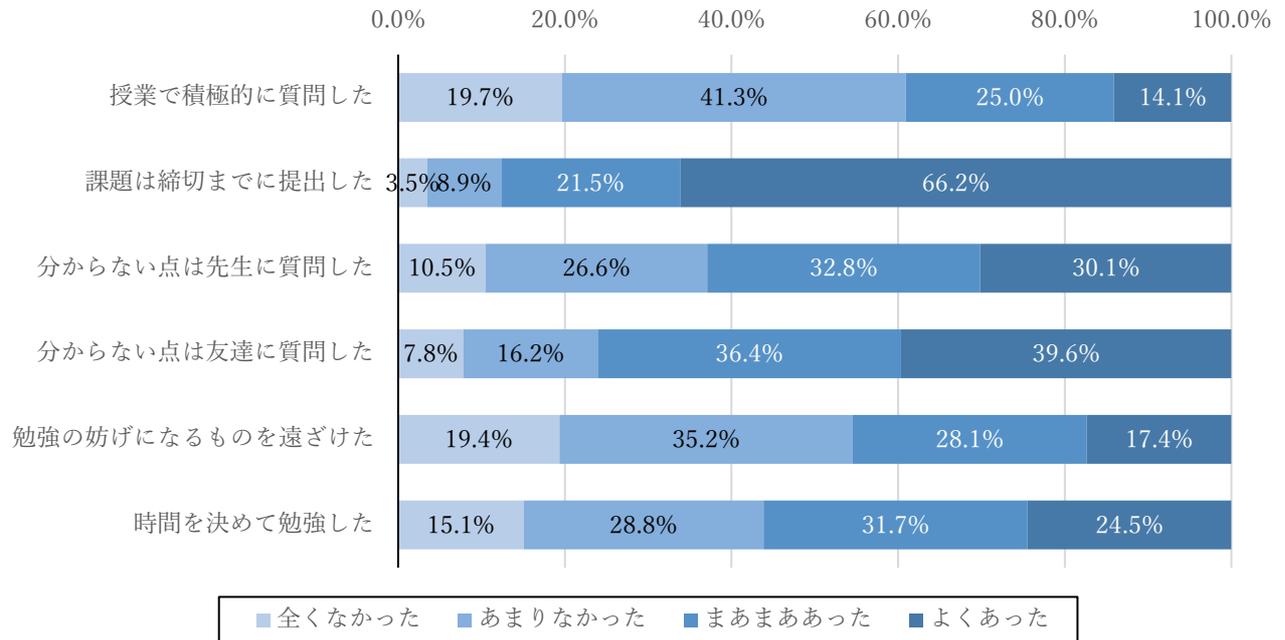
	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
文系科目 (国語・地歴・公民) についてしっかり学習した	653	1876	3501	6089
理系科目 (数学・理科) についてしっかり学習した	1294	2728	3628	4466
外国語科目 (英語等) についてしっかり学習した	512	1488	3777	6328

Q09. 中学3年の時と高校3年の時の成績は、あなたの通っていた学校のなかでどのあたりでしたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



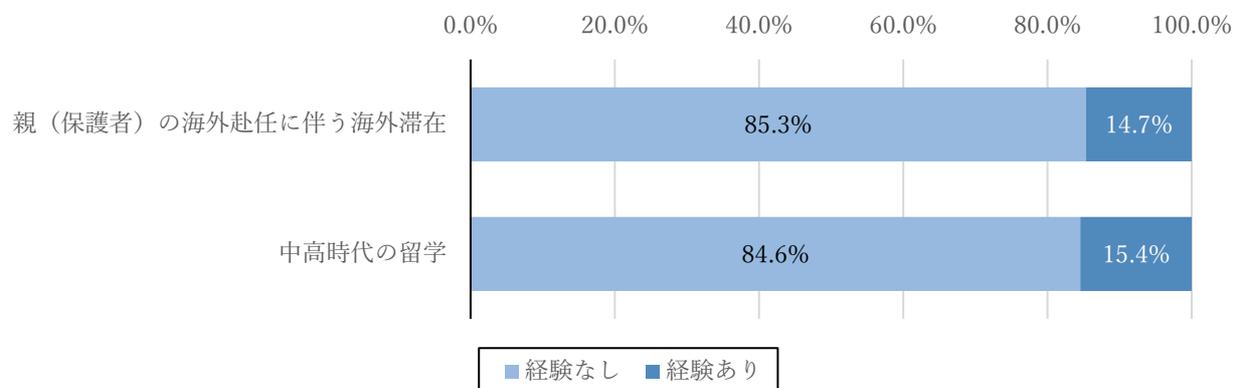
	下の方	やや下の方	真ん中	やや上の方	上の方
中学3年の時	497	752	1435	2815	6612
高校3年の時	613	978	2005	3830	4678

Q10. あなたの高校時代について、次のことはどれほどありましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。



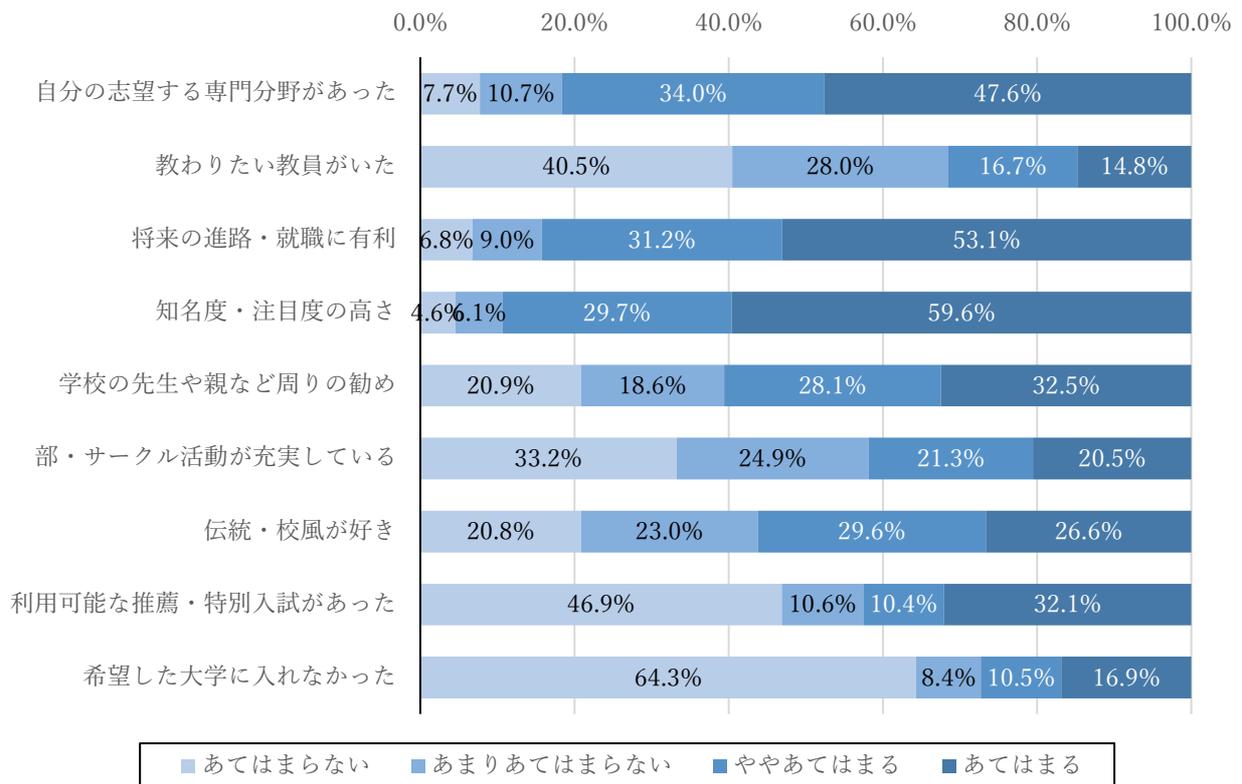
	全くなかった	あまりなかった	まあまああった	よくあった
授業で積極的に質問した	2382	5002	3024	1708
課題は締切までに提出した	422	1077	2601	8018
分からない点は先生に質問した	1273	3219	3973	3650
分からない点は友達に質問した	946	1958	4410	4804
勉強の妨げになるものを遠ざけた	2344	4265	3400	2104
時間を決めて勉強した	1824	3485	3837	2963

Q11. 大学入学以前の海外経験についてお答えください。



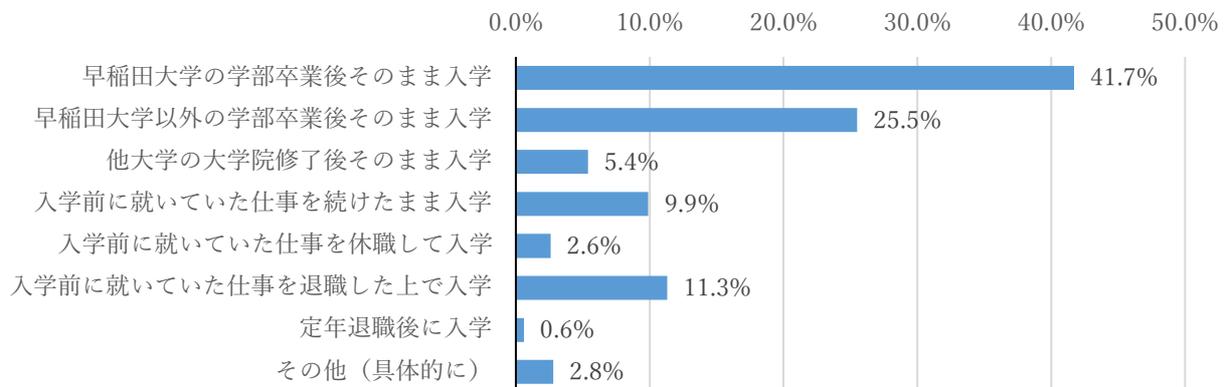
	経験なし	経験あり
親（保護者）の海外赴任に伴う海外滞在	10310	1777
中高時代の留学	10222	1865

Q12. あなたが早稲田大学（大学院）に進学した理由は何ですか。あてはまるものすべて選択してください。



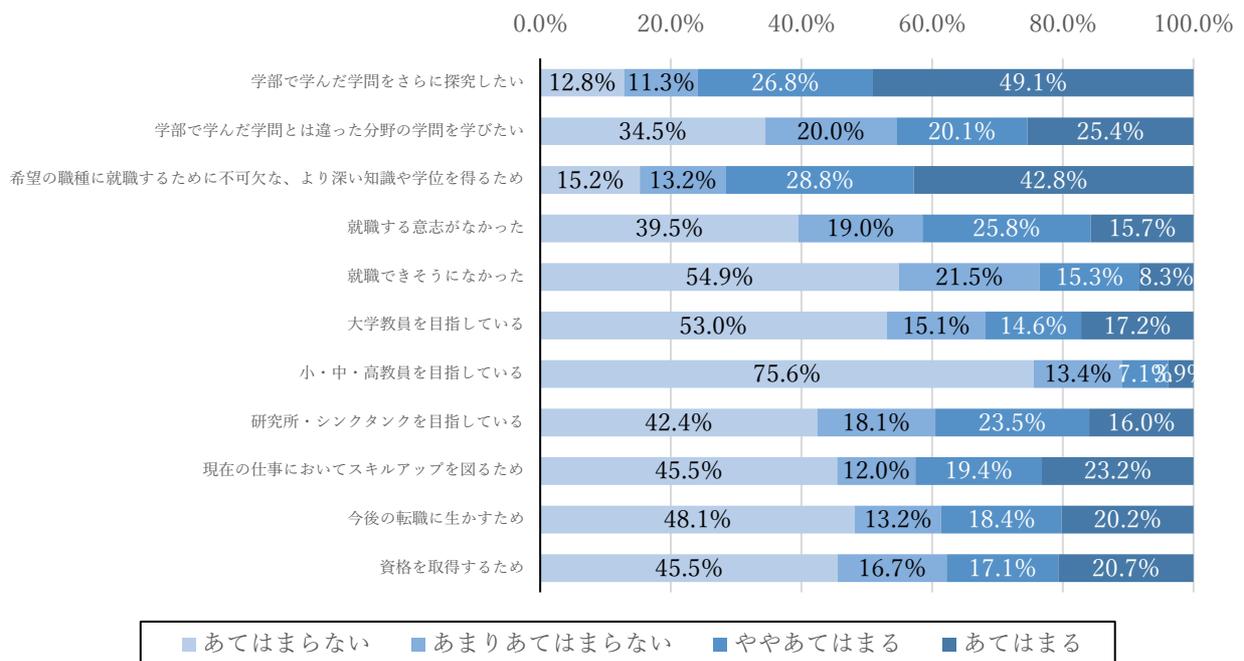
	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
自分の志望する専門分野があった	919	1271	4046	5673
教わりたい教員がいた	4809	3331	1988	1756
将来の進路・就職に有利	806	1069	3706	6315
知名度・注目度の高さ	543	728	3536	7092
学校の先生や親など周りの勧め	2479	2206	3342	3859
部・サークル活動が充実している	3952	2960	2536	2440
伝統・校風が好き	2476	2726	3511	3164
利用可能な推薦・特別入試があった	5580	1256	1242	3821
希望した大学に入れなかった	7647	997	1243	2004

Q13. (大学院生のみ) あなたの大学院入学までのキャリアについてあてはまるものを一つ選択してください。



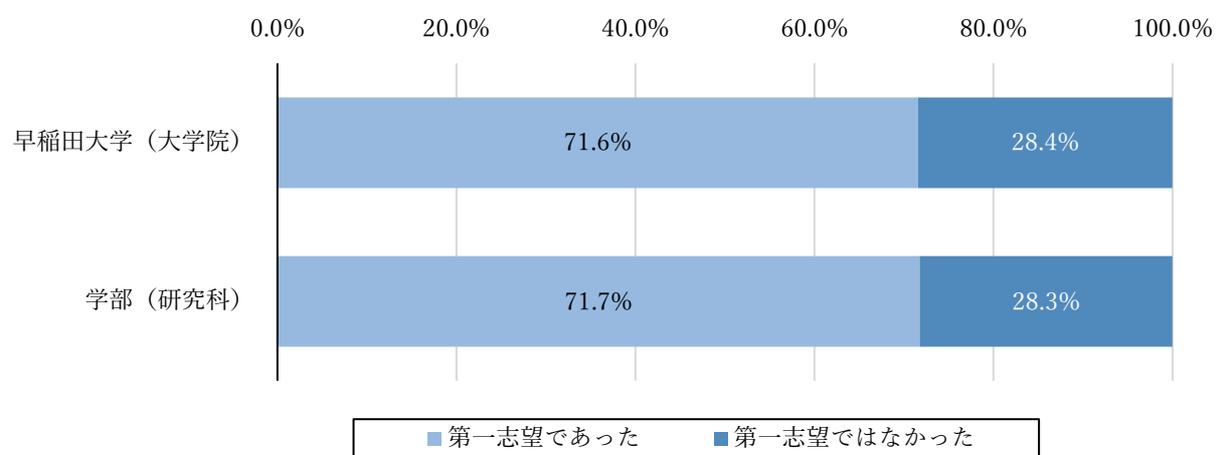
早稲田大学の学部卒業後そのまま入学	1012
早稲田大学以外の学部卒業後そのまま入学	619
他大学の大学院修了後そのまま入学	132
入学前に就いていた仕事を続けたまま入学	240
入学前に就いていた仕事を休職して入学	62
入学前に就いていた仕事を退職した上で入学	275
定年退職後に入学	15
その他 (具体的に)	69

Q14. (大学院生のみ) あなたが大学院に進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選択してください。



	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
学部で学んだ学問をさらに探究したい	309	272	646	1183
学部で学んだ学問とは違った分野の学問を学びたい	830	483	484	612
希望の職種に就職するために不可欠な、より深い知識や学位を得るため	368	319	695	1034
就職する意志がなかった	950	456	619	378
就職できそうになかった	1320	517	367	199
大学教員を目指している	1272	363	351	413
小・中・高教員を目指している	1814	322	171	93
研究所・シンクタンクを目指している	1019	435	566	384
現在の仕事においてスキルアップを図るため	1094	288	466	559
今後の転職に生かすため	1157	318	443	485
資格を取得するため	1092	400	410	497

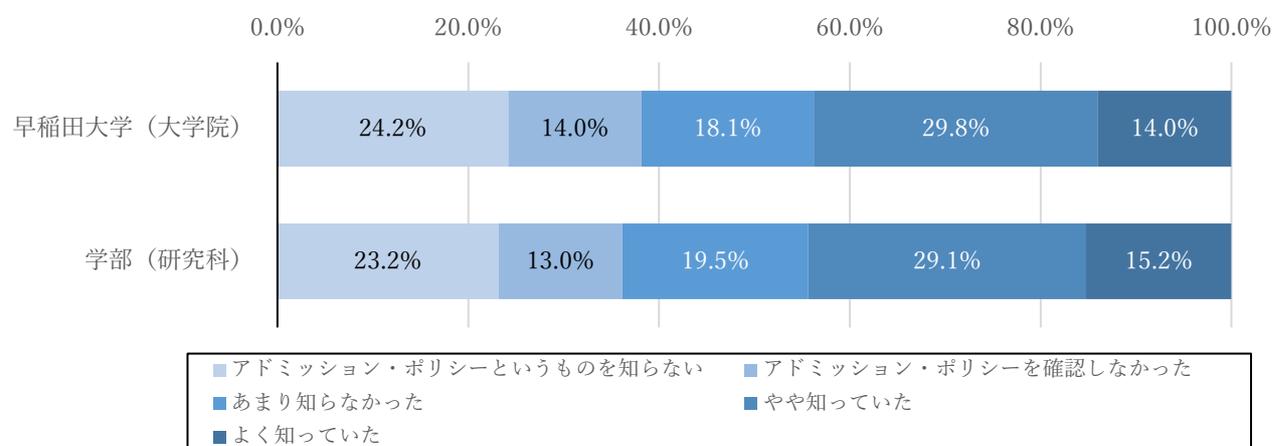
Q15. 早稲田大学（大学院）と学部（研究科）は第一志望でしたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



	第一志望であった	第一志望ではなかった
早稲田大学（大学院）	8,445	3,352
学部（研究科）	8,454	3,330

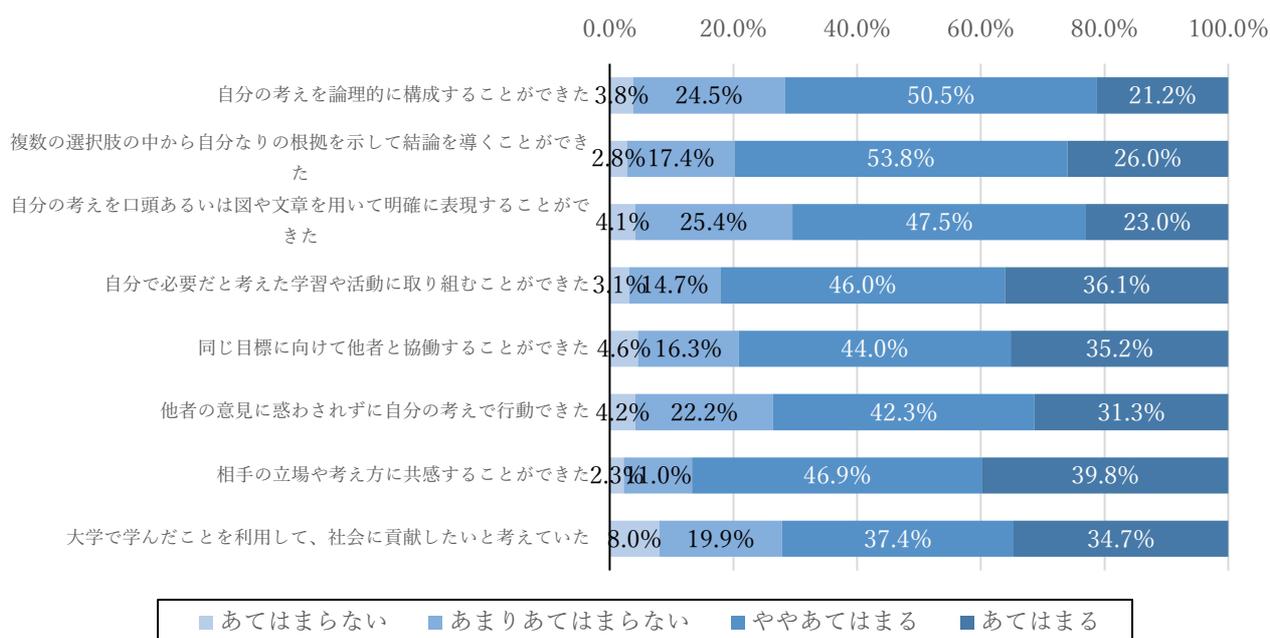
2. 学修状況

Q16. (学部 1年生のみ) あなたは入学前に、早稲田大学のアドミッション・ポリシー (AP) を確認しましたか。



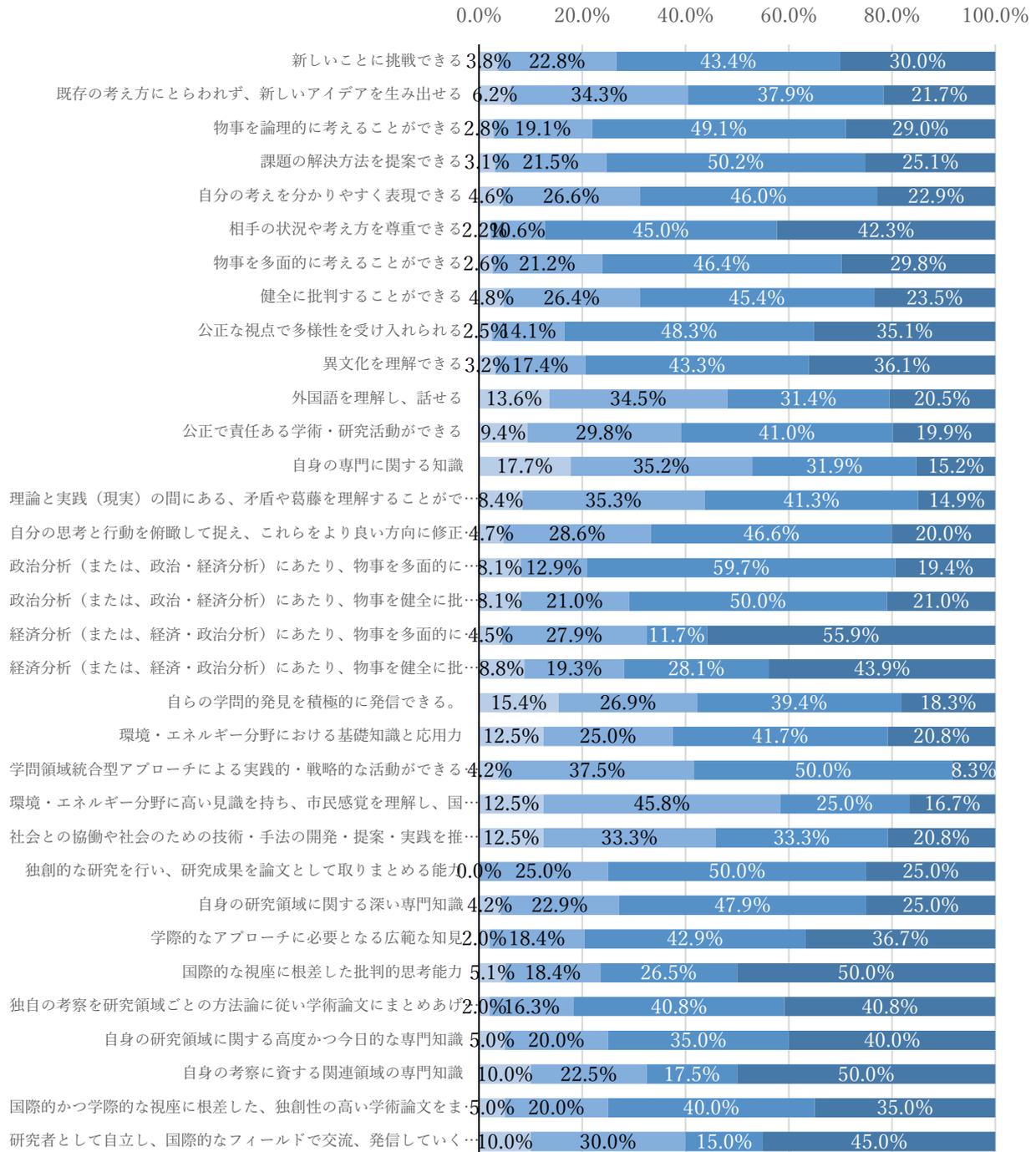
	アドミッション・ポリシーというものを知らない	アドミッション・ポリシーを確認しなかった	あまり知らなかった	やや知っていた	よく知っていた
早稲田大学 (大学院)	2867	1655	2143	3532	1658
学部 (研究科)	2679	1504	2254	3370	1763

Q17. あなたは大学 (大学院生の場合、大学院) 入学の時点で、次のことはどの程度あてはまっていますか。それぞれあてはまるものを選択してください。



	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
自分の考えを論理的に構成することができた	453	2911	5996	2520
複数の選択肢の中から自分なりの根拠を示して結論を導くことができた	332	2064	6388	3091
自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができた	489	3016	5634	2729
自分で必要だと考えた学習や活動に取り組むことができた	373	1747	5464	4285
同じ目標に向けて他者と協働することができた	543	1930	5220	4172
他者の意見に惑わされずに自分の考えで行動できた	494	2639	5016	3717
相手の立場や考え方に共感することができた	272	1310	5569	4720
大学で学んだことを利用して、社会に貢献したいと考えていた	947	2362	4444	4119

Q18. 【大学（学部・大学院）入学時】に、次のようなことは、どれくらい身に付いていたと考えていましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

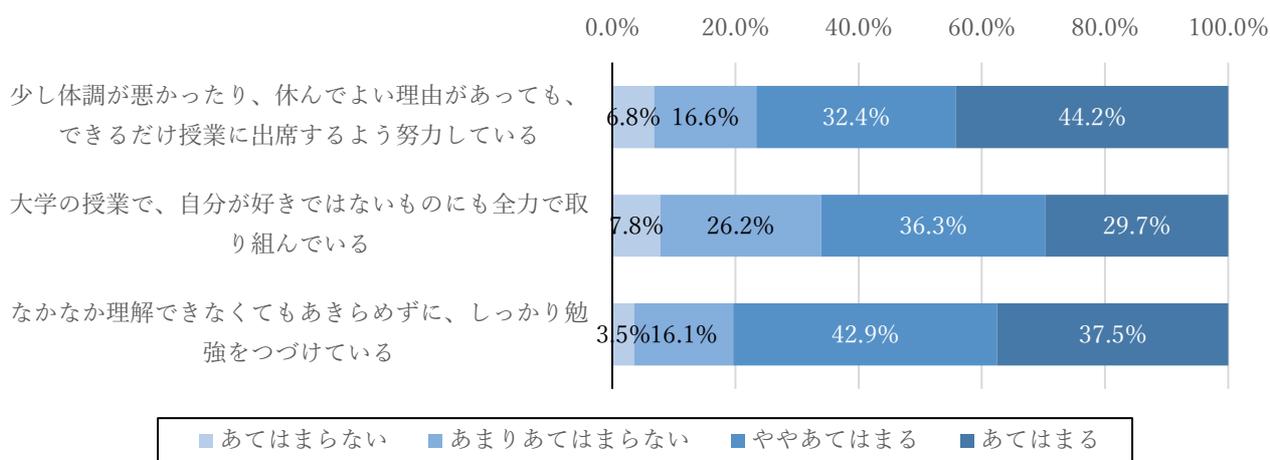


■ 身に付いていなかった ■ あまり身に付いていなかった ■ まあまあ身に付いていた ■ 身に付いていた

	身に付いて なかった	あまり身に付いて いなかった	まあまあ身に付 いていた	身に付いて いた
新しいことに挑戦できる	447	2,721	5,168	3,578
既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる	734	4,090	4,510	2,580
物事を論理的に考えることができる	336	2,273	5,849	3,450

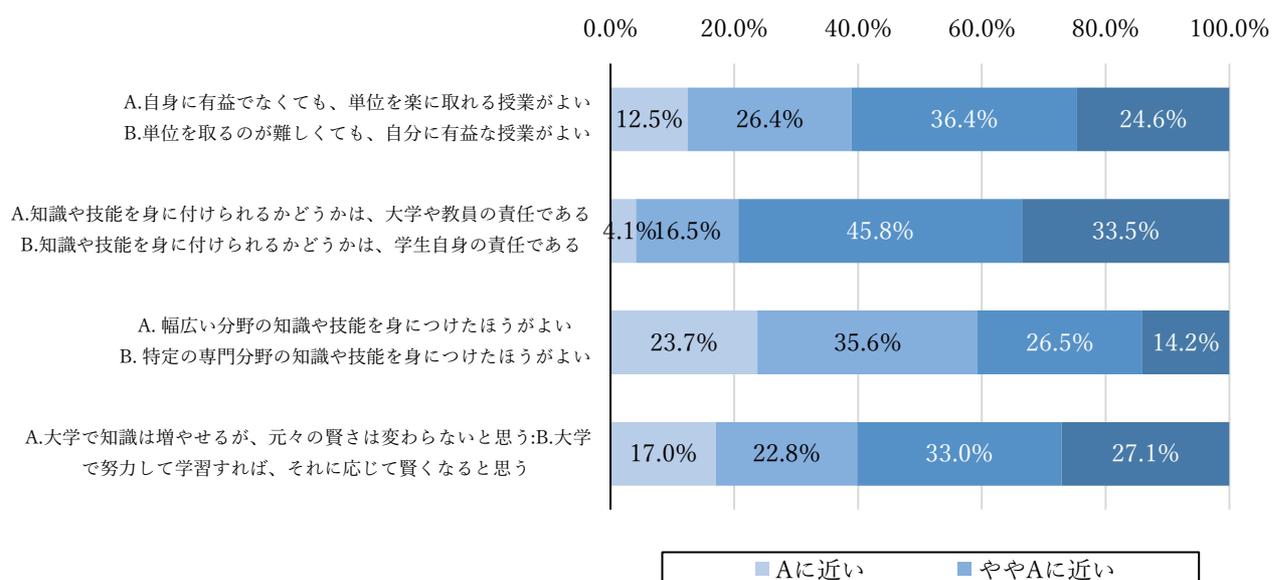
課題の解決方法を提案できる	371	2,562	5,972	2,991
自分の考えを分かりやすく表現できる	547	3,160	5,470	2,724
相手の状況や考え方を尊重できる	257	1,262	5,352	5,035
物事を多面的に考えることができる	313	2,526	5,521	3,548
健全に批判することができる	570	3,140	5,401	2,794
公正な視点で多様性を受け入れられる	297	1,675	5,753	4,181
異文化を理解できる	377	2,074	5,156	4,295
外国語を理解し、話せる	1,620	4,104	3,732	2,443
公正で責任ある学術・研究活動ができる	1,115	3,545	4,888	2,366
自身の専門に関する知識	2112	4186	3793	1815
理論と実践（現実）の間にある、矛盾や葛藤を理解することができる	46	194	227	82
自分の思考と行動を俯瞰して捉え、これらをより良い方向に修正できる	26	157	256	110
政治分析（または、政治・経済分析）にあたり、物事を多面的に考えることができる	5	8	37	12
政治分析（または、政治・経済分析）にあたり、物事を健全に批判することができる	5	13	31	13
経済分析（または、経済・政治分析）にあたり、物事を多面的に考えることができる	5	31	13	62
経済分析（または、経済・政治分析）にあたり、物事を健全に批判することができる	5	11	16	25
自らの学問的発見を積極的に発信できる	27	47	69	32
環境・エネルギー分野における基礎知識と応用力	3	6	10	5
学問領域統合型アプローチによる実践的・戦略的な活動ができる能力	1	9	12	2
環境・エネルギー分野に高い見識を持ち、市民感覚を理解し、国際的視点で対処できる能力	3	11	6	4
社会との協働や社会のための技術・手法の開発・提案・実践を推進できる能力	3	8	8	5
独創的な研究を行い、研究成果を論文として取りまとめる能力	0	1	2	1
自身の研究領域に関する深い専門知識	2	11	23	12
学際的なアプローチに必要な広範な知見	1	9	21	18
国際的な視座に根差した批判的思考能力	5	18	26	49
独自の考察を研究領域ごとの方法論に従い学術論文にまとめあげる能力	1	8	20	20
自身の研究領域に関する高度かつ今日的な専門知識	1	4	7	8
自身の考察に資する関連領域の専門知識	4	9	7	20
国際的かつ学際的な視座に根差した、独創性の高い学術論文をまとめあげる能力	1	4	8	7
研究者として自立し、国際的なフィールドで交流、発信していく能力	2	6	3	9

Q19. 次のことはあなたにどのくらいあてはまりますか。大学（大学院）入学以降の状況をお答えください。それぞれあてはまるものを選択してください。



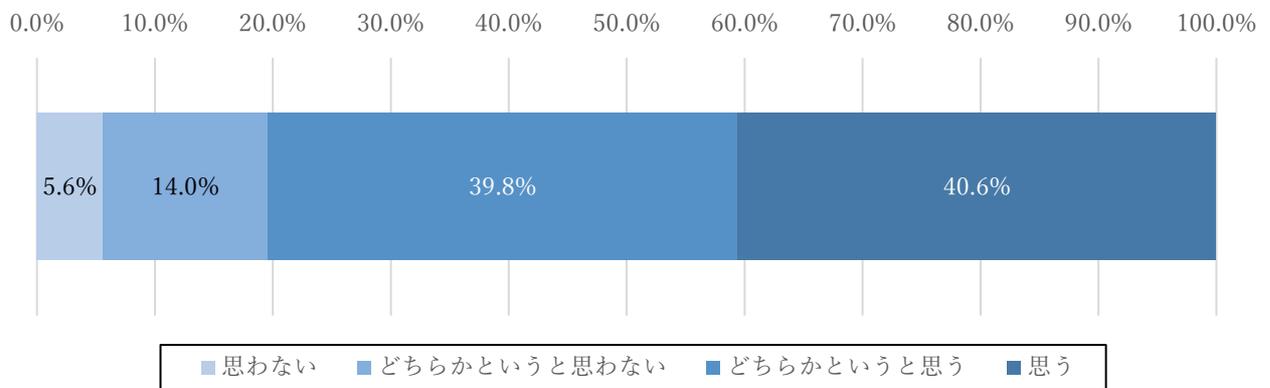
	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
少し体調が悪かったり、休んでよい理由があっても、できるだけ授業に出席するよう努力している	785	1924	3749	5124
大学の授業で、自分が好きではないものにも全力で取り組んでいる	899	3028	4208	3443
なかなか理解できなくてもあきらめずに、しっかり勉強をつづけている	410	1861	4962	4342

Q20. 大学教育について、「現在の」あなたの考え方で、A、Bにより近い方をそれぞれ一つ選択してください。



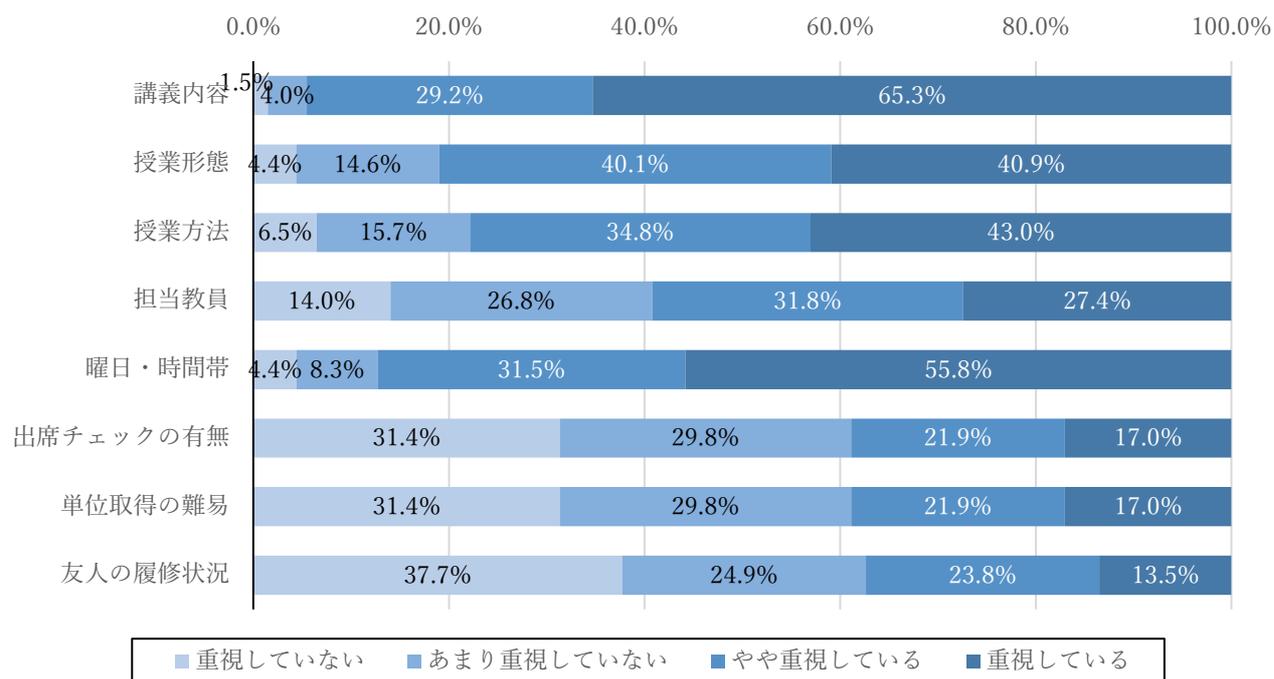
	Aに近い	ややAに近い	ややBに近い	Bに近い
A.自身に有益でなくても、単位を楽に取れる授業がよい B.単位を取るのが難しくても、自分に有益な授業がよい	1,450	3,061	4,219	2,851
A.知識や技能を身に付けられるかどうかは、大学や教員の責任である B.知識や技能を身に付けられるかどうかは、学生自身の責任である	478	1,915	5,303	3,883
A.幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい B.特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい	2,747	4,118	3,068	1,638
A.大学で知識は増やせるが、元々の賢さは変わらないと思う B.大学で努力して学習すれば、それに応じて賢くなると思う	1971	2640	3824	3140

Q21. あなたは大学（学部・大学院）での授業や研究・勉強が、あなたの今後の進路先で役に立つと思いますか。あてはまるもの一つを選択してください。



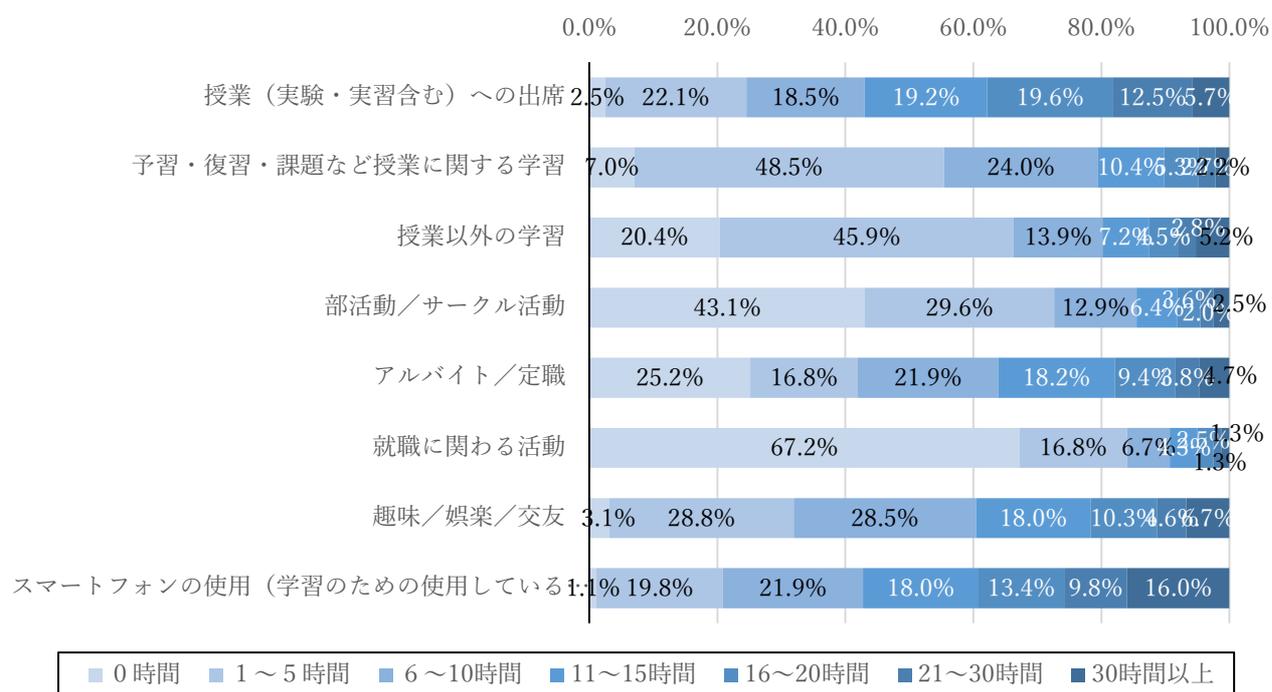
思わない	どちらかというと思わない	どちらかというと思う	思う
643	1624	4606	4703

Q22. あなたが授業を選ぶ際に重視することは何ですか。あてはまるものすべて選択してください。



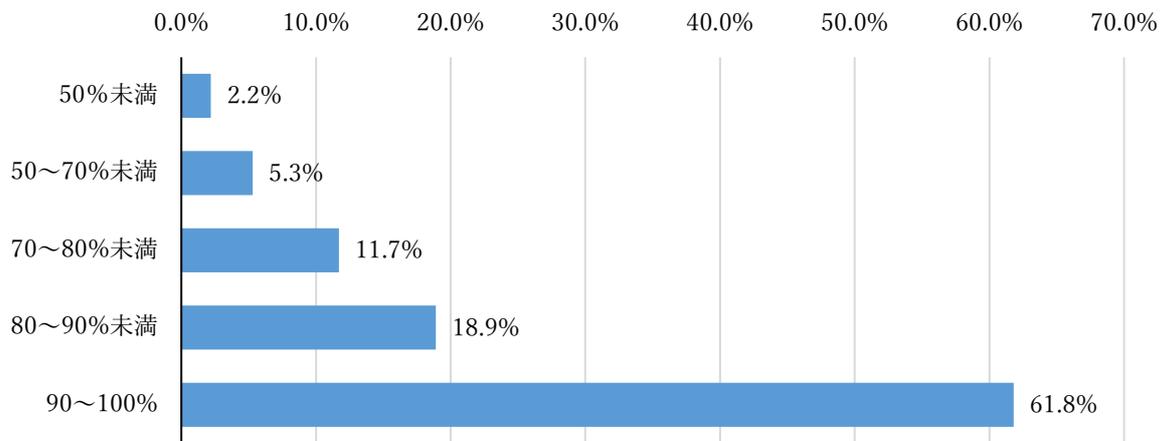
	重視していない	あまり重視していない	やや重視している	重視している
講義内容	170	461	3,360	7,516
授業形態	508	1691	4639	4738
授業方法	751	1812	4031	4979
担当教員	1620	3094	3673	3173
曜日・時間帯	512	957	3638	6452
出席チェックの有無	3626	3441	2527	1971
単位取得の難易	3626	3441	2527	1971
友人の履修状況	4364	2885	2758	1564

Q23. 現在の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間について、あてはまる時間数を選択してください。それぞれあてはまるものを選択してください。



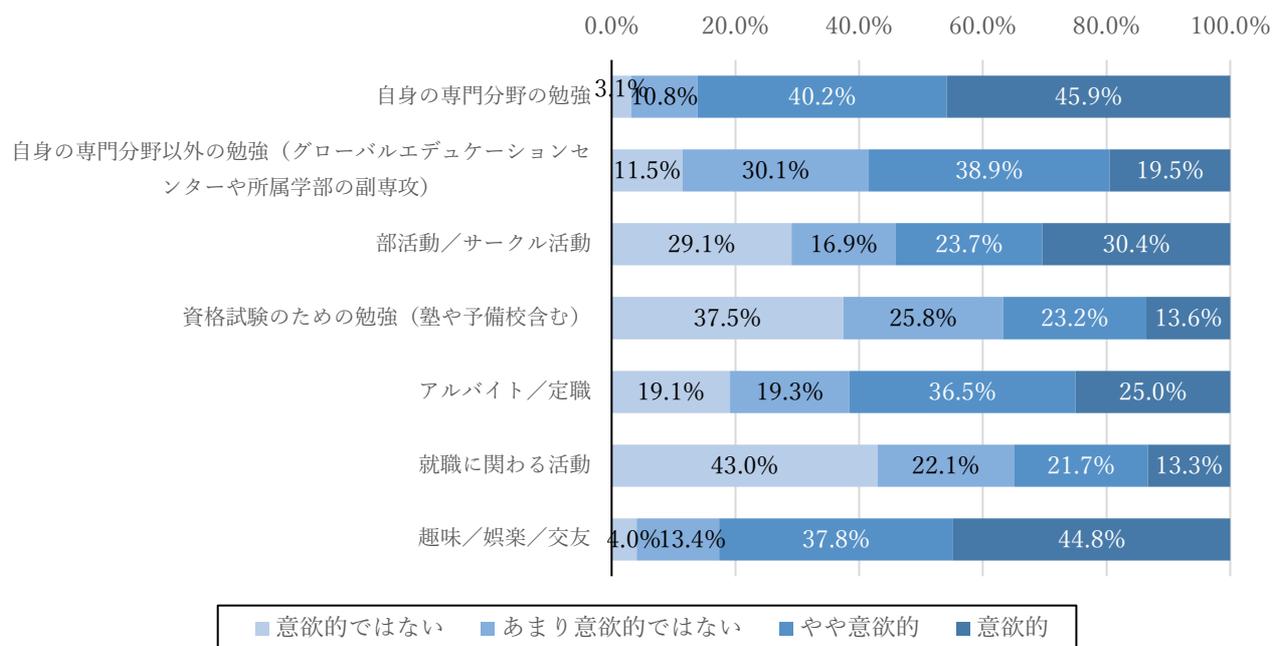
	0時間	1～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	21～30時間	30時間以上
授業（実験・実習含む）への出席	287	2552	2140	2216	2264	1447	665
予習・復習・課題など授業に関する学習	807	5600	2769	1204	613	314	250
授業以外の学習	2347	5288	1599	835	519	327	604
部活動／サークル活動	4965	3409	1486	734	412	234	290
アルバイト／定職	2907	1938	2534	2103	1087	437	547
就職に関わる活動	7746	1938	772	497	283	146	147
趣味／娯楽／交友	362	3325	3284	2073	1190	530	779
スマートフォンの使用（学習のための使用している時間は除く）	128	2284	2532	2086	1545	1133	1853

Q24. 大学（大学院）入学以降、あなたの授業平均出席率はどれくらいですか。もっともあてはまるものを一つ選択してください。



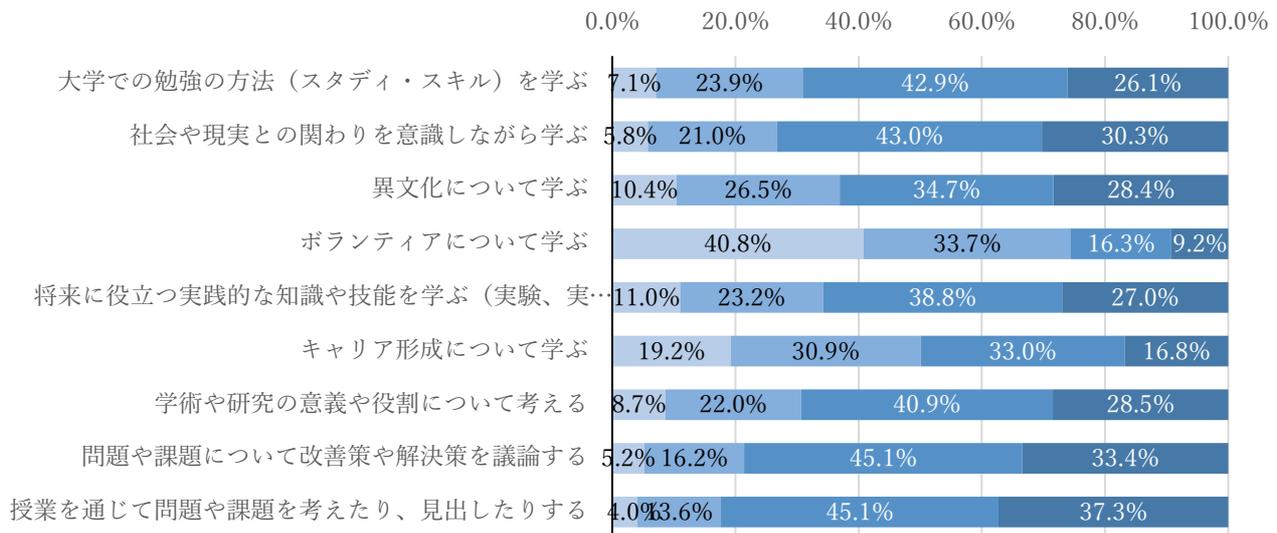
50%未満	260
50~70%未満	609
70~80%未満	1,359
80~90%未満	2,187
90~100%	7,157

Q25. あなたは大学（大学院）入学以降、次のことにどれほど意欲的に取り組んできましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。



	意欲的ではない	あまり意欲的ではない	やや意欲的	意欲的
自身の専門分野の勉強	363	1242	4644	5293
自身の専門分野以外の勉強（グローバルエデュケーションセンターや所属学部の副専攻）	1326	3472	4495	2254
部活動／サークル活動	3352	1944	2728	3502
資格試験のための勉強（塾や予備校含む）	4321	2972	2669	1567
アルバイト／定職	2207	2231	4215	2887
就職に関わる活動	4957	2543	2497	1534
趣味／娯楽／交友	465	1541	4365	5170

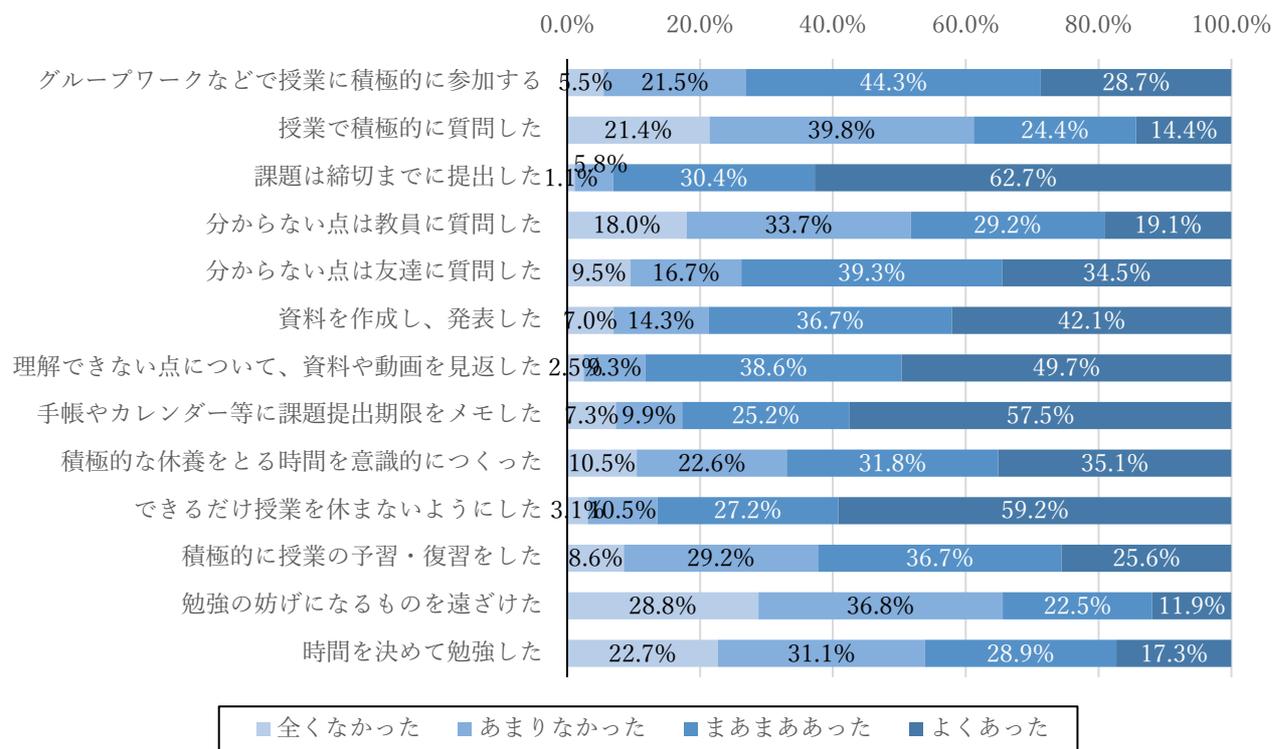
Q26. あなたは大学（大学院）入学以降、次のことをどれほど経験しましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。



■全くなかった ■あまりなかった ■まあまああった ■よくあった

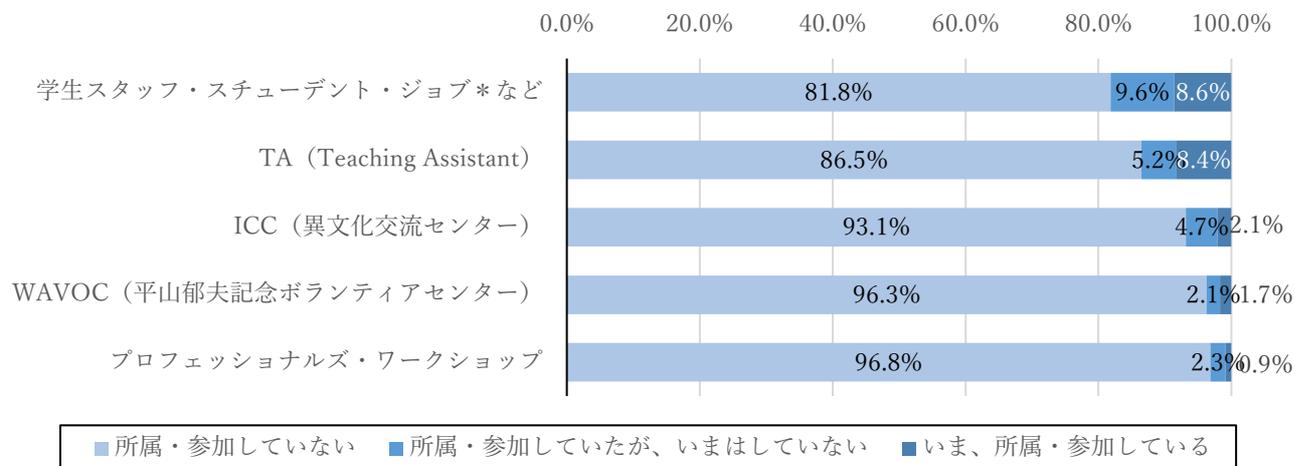
	全くなかった	あまりなかった	まあまああった	よくあった
大学での勉強の方法（スタディ・スキル）を学ぶ	818	2754	4955	3017
社会や現実との関わりを意識しながら学ぶ	668	2419	4960	3493
異文化について学ぶ	1204	3052	4002	3268
ボランティアについて学ぶ	4702	3879	1879	1064
将来に役立つ実践的な知識や技能を学ぶ（実験、実習、実技など）	1272	2674	4472	3110
キャリア形成について学ぶ	2215	3564	3810	1940
学術や研究の意義や役割について考える	998	2533	4712	3283
問題や課題について改善策や解決策を議論する	602	1869	5202	3856
授業を通じて問題や課題を考えたり、見出したりする	466	1567	5192	4299

Q27. 大学（大学院）入学以降のあなたについて、次のことはどれほどありましたか。それぞれあてはまるものを選択してください。



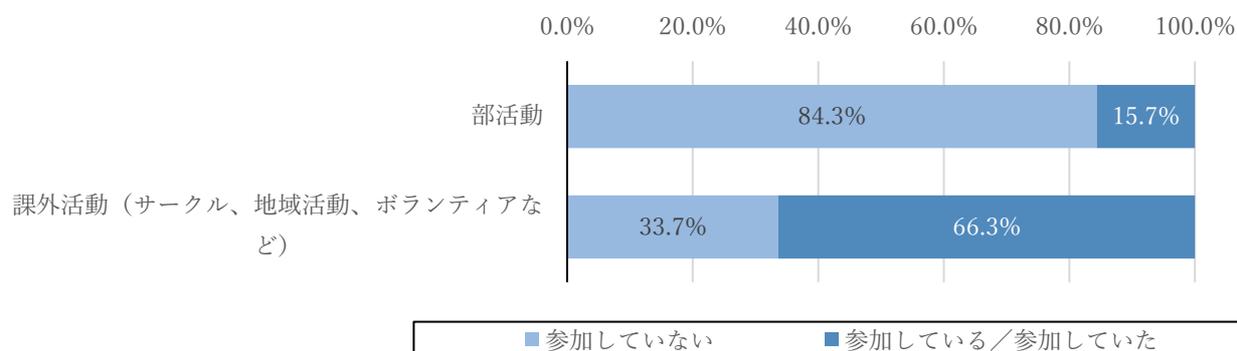
	全くなかった	あまりなかった	まあまああった	よくあった
グループワークなどで授業に積極的に参加する	633	2478	5116	3313
授業で積極的に質問した	2469	4590	2819	1656
課題は締切までに提出した	127	672	3501	7235
分からない点は教員に質問した	2076	3885	3368	2202
分からない点は友達に質問した	1100	1924	4535	3977
資料を作成し、発表した	803	1647	4225	4849
理解できない点について、資料や動画を見返した	287	1070	4449	5728
出来るだけ時間割通りに受講した	847	1147	2909	6632
手帳やカレンダー等に課題提出期限をメモした	1207	2610	3672	4050
授業の資料は印刷して利用した	356	1210	3139	6820
積極的な休養をとる時間を意識的につくった	986	3367	4231	2946
PC や通信機器に関する情報を調べた	3321	4244	2598	1376
理由なく授業を欠席した	2618	3588	3326	1996

Q28. 大学（大学院）入学以降、以下のような活動に所属、参加していますか。それぞれの内容についてあてはまるものを選択してください。



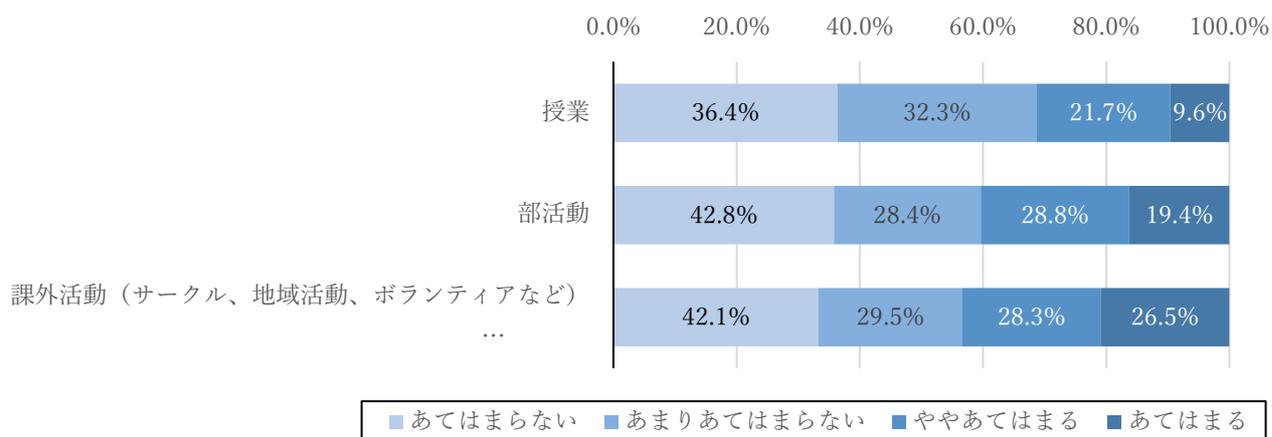
	所属・参加していない	所属・参加していたが、いまはしていない	いま、所属・参加している
学生スタッフ・スチューデント・ジョブ*など	9289	1088	978
TA (Teaching Assistant)	9690	580	938
ICC (異文化交流センター)	10385	529	235
WAVOC (平山郁夫記念ボランティアセンター)	10689	228	188
プロフェッショナルズ・ワークショップ	10620	251	97

Q29. 大学入学以降、以下のような活動において、参加していますか。



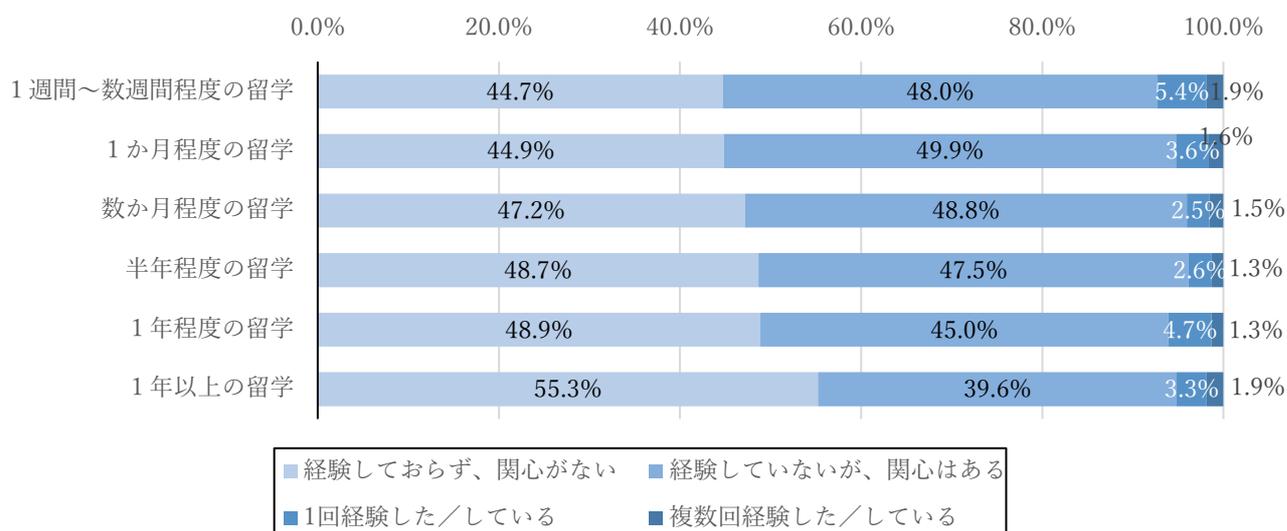
	参加していない	参加している/参加していた
部活動	9713	1804
課外活動 (サークル、地域活動、ボランティアなど)	3895	7676

Q30. 大学入学以降、以下のような活動において、リーダー的な役割を担いましたか。



	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
授業	4137	3677	2469	1090
部活動	637	423	429	289
課外活動 (サークル、地域活動、ボランティアなど)	2533	1775	1702	1592

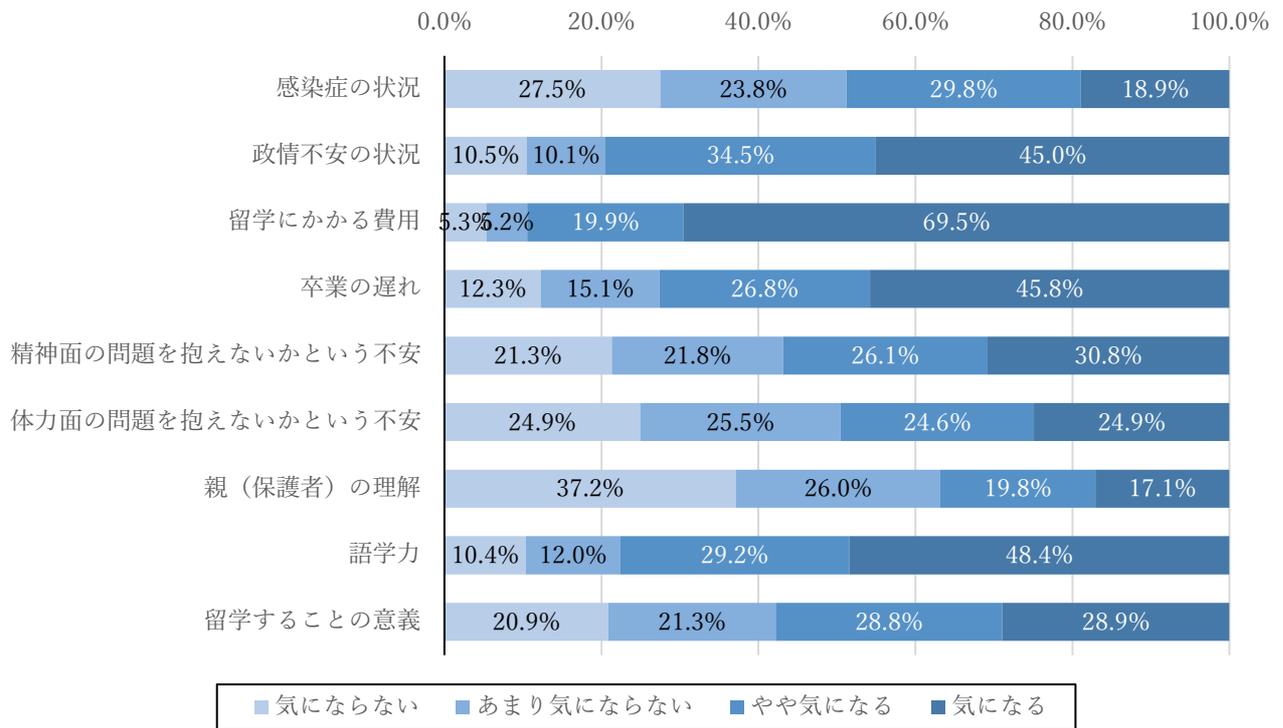
Q31. 大学 (大学院) 入学以降の【留学経験】について、あなたの状況をお答えください。それぞれあてはまるものを選択してください。



	経験しておらず、関心がない	経験していないが、関心はある	1回経験した/している	複数回経験した/している
1週間～数週間程度の留学	5068	5445	608	216

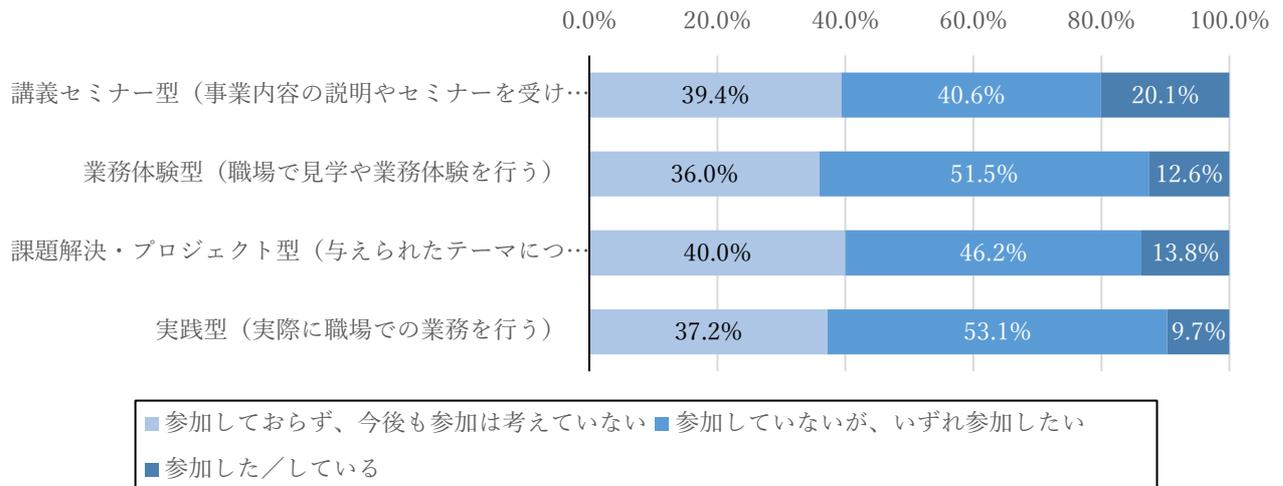
1か月程度の留学	5058	5625	410	181
数か月程度の留学	5300	5481	281	173
半年程度の留学	5471	5339	288	146
1年程度の留学	5511	5078	535	151
1年以上の留学	6234	4466	370	212

Q32. 留学を考えるにあたって、以下のことはどれほど気になりますか。それぞれあてはまるものを選択してください。



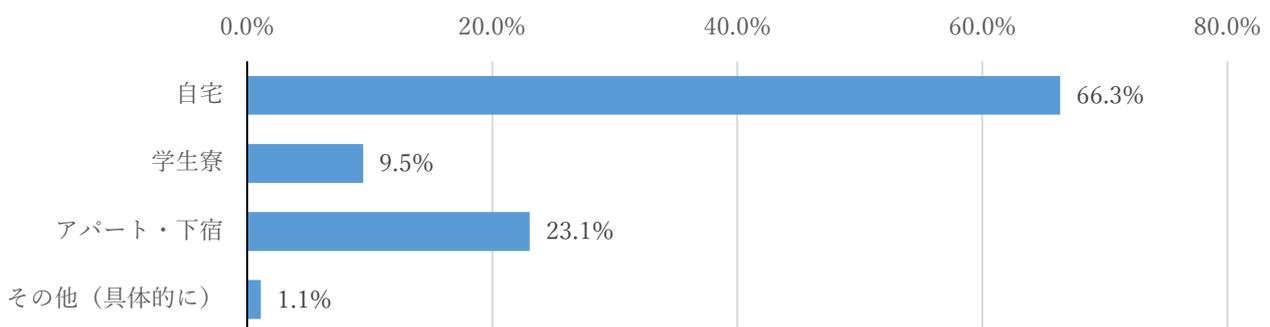
	気にならない	あまり気にならない	やや気になる	気になる
感染症の状況	3148	2724	3421	2168
政情不安の状況	1197	1151	3944	5155
留学にかかる費用	612	597	2287	7968
卒業の遅れ	1405	1733	3070	5240
精神面の問題を抱えないかという不安	2442	2500	2985	3531
体力面の問題を抱えないかという不安	2856	2925	2822	2852
親（保護者）の理解	4256	2978	2263	1957
語学力	1191	1371	3344	5544
留学することの意義	2393	2442	3303	3313

Q33. 大学（大学院）入学以降の【インターンシップ経験】について、あなたの状況をお答えください。それぞれあてはまるものを選択してください。



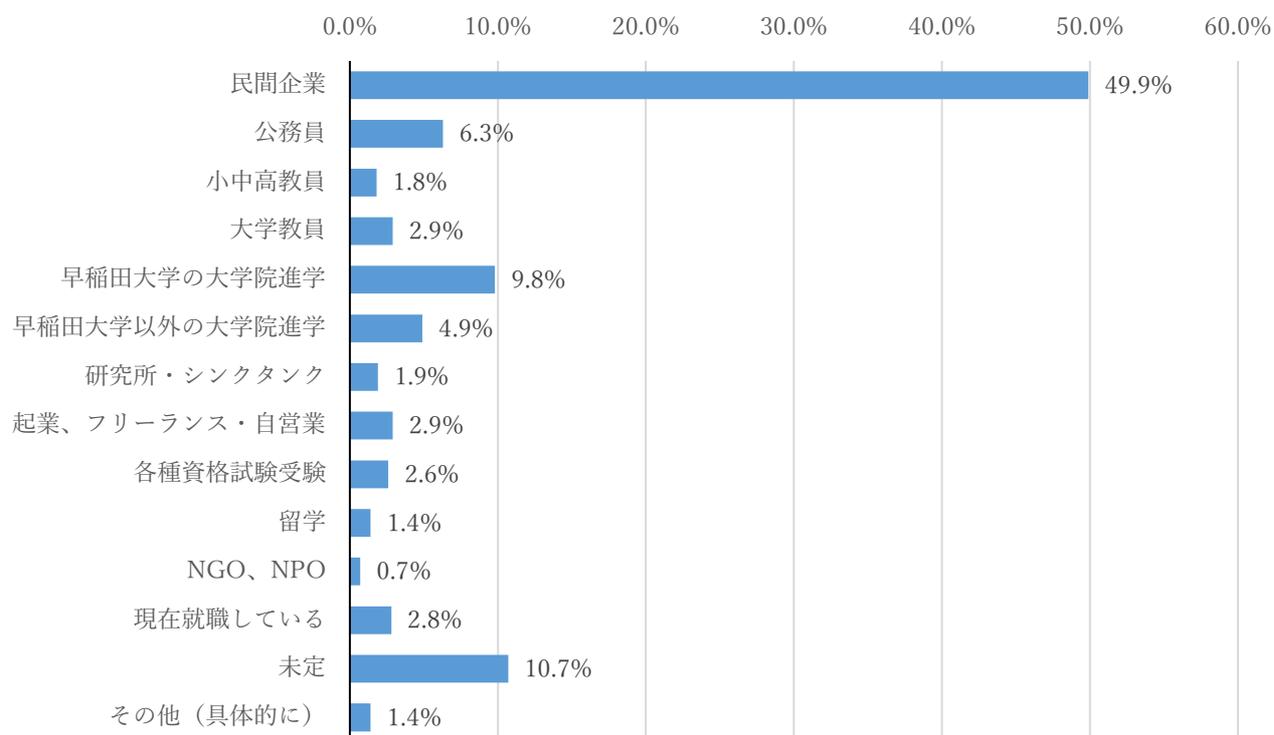
	参加しておらず、今後も参加は考えていない	参加していないが、いずれ参加したい	参加した/している
講義セミナー型（事業内容の説明やセミナーを受ける）	4509	4643	2297
業務体験型（職場で見学や業務体験を行う）	4493	6429	1573
課題解決・プロジェクト型（与えられたテーマについて解決策を考える）	4557	5268	1567
実践型（実際に職場での業務を行う）	4229	6029	1102

Q34. いま現在の居住形態をお答えください。あてはまるものを選択・記入してください。



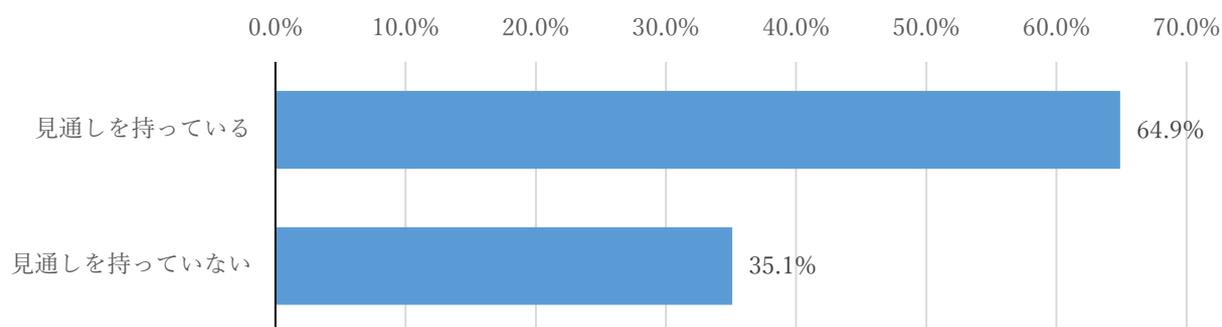
	自宅	学生寮	アパート・下宿	その他（具体的に）
現在の居住形態	7641	1090	2656	130

Q35. 現在、あなたは学部・大学院卒業後、どのような進路を考えていますか。最もあてはまるものを選択してください。内定している場合には、内定先を選択してください。



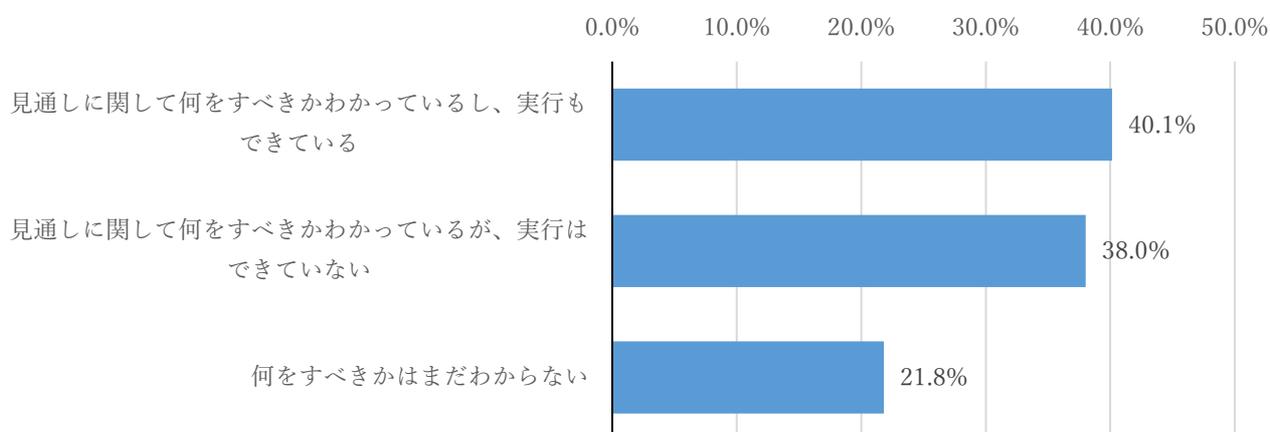
民間企業	5741
公務員	720
小中高教員	208
大学教員	332
早稲田大学の大学院進学	1132
早稲田大学以外の大学院進学	560
研究所・シンクタンク	222
起業、フリーランス・自営業	334
各種資格試験受験	298
留学	158
NGO、NPO	86
現在就職している	327
未定	1228
その他（具体的に）	166

Q36. あなたは、自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたいという考え）を持っていますか。また、持っている場合は、その見通しに関するいまの状況についてもお答えください。最もあてはまるものを選択してください。-見通し



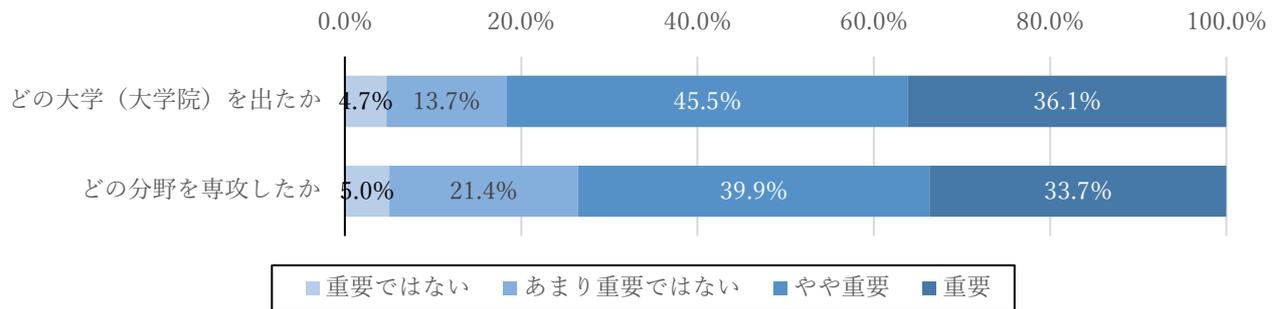
見通しを持っている	7425
見通しを持っていない	4014

Q37. あなたは、自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたいという考え）を持っていますか。また、持っている場合は、その見通しに関するいまの状況についてもお答えください。最もあてはまるものを選択してください。-見通しの状況



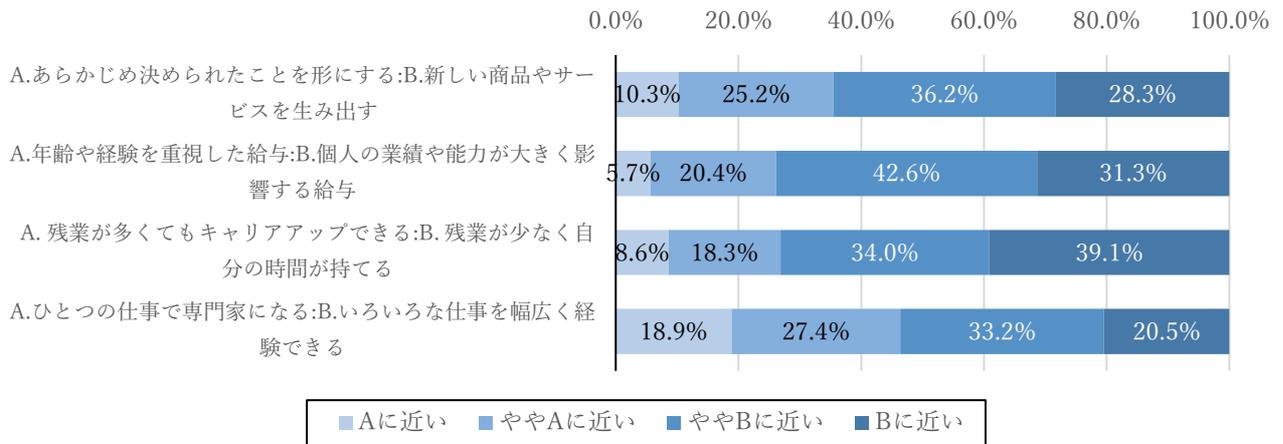
見通しに関して何をすべきかわかっているし、実行もできている	2962
見通しに関して何をすべきかわかっているが、実行はできていない	2806
何をすべきかはまだわからない	1610

Q38. あなたは、就職するうえで、次の点はどの程度重要だと思いますか。それぞれあてはまるものを選択してください。



	重要ではない	あまり重要ではない	やや重要	重要
どの大学（大学院）を出たか	540	1569	5226	4149
どの分野を専攻したか	577	2458	4577	3863

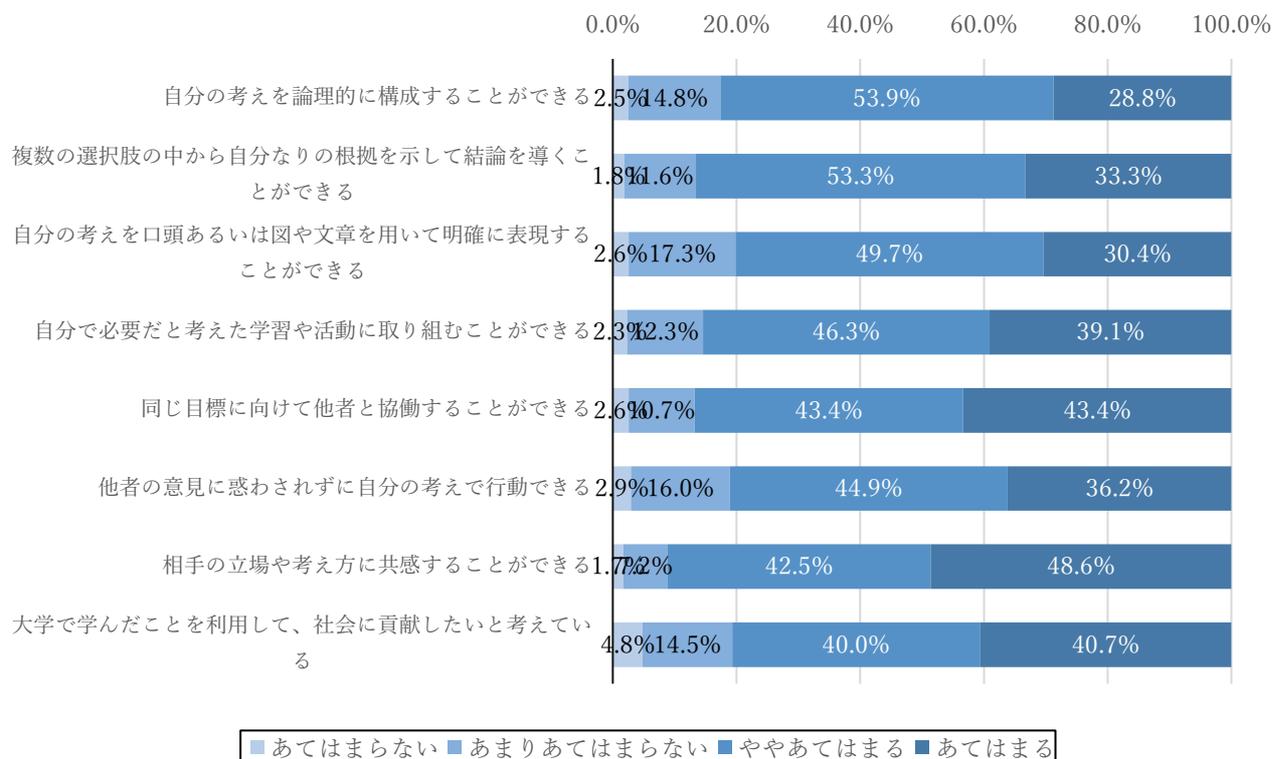
Q39. あなたは、仕事や就職先にどのようなことを望みますか、A、B でより近い方をそれぞれ一つ選択してください。



	Aに近い	ややAに近い	ややBに近い	Bに近い
A.あらかじめ決められたことを形にする:B.新しい商品やサービスを生み出す	1180	2893	4160	3248
A.年齢や経験を重視した給与:B.個人の業績や能力が大きく影響する給与	653	2344	4885	3598
A. 残業が多くてもキャリアアップできる:B. 残業が少なく自分の時間が持てる	986	2095	3903	4493
A.ひとつの仕事で専門家になる:B.いろいろな仕事を幅広く経験できる	2168	3149	3806	2349

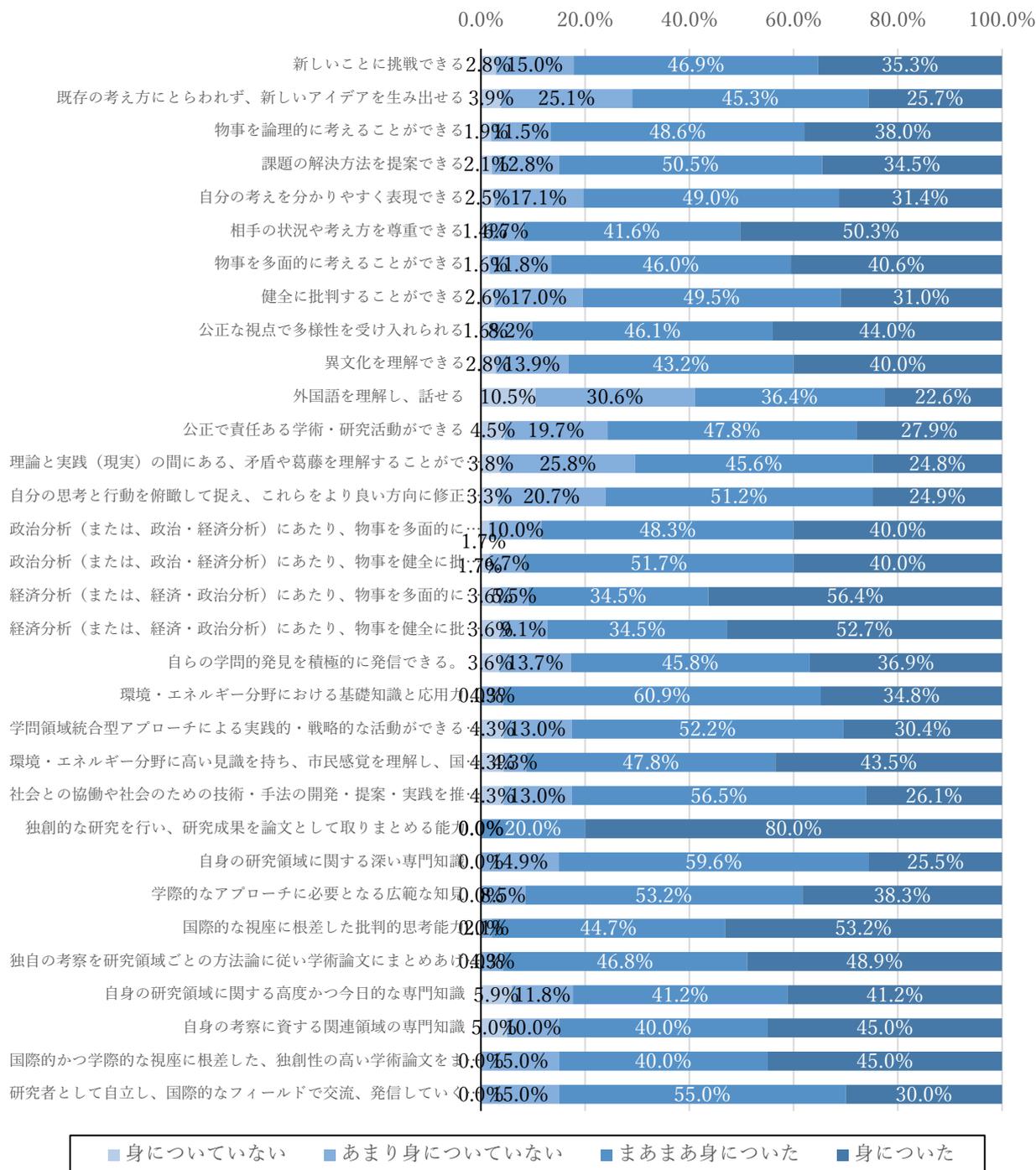
3. 学修成果・満足度等

Q40. 【いま現在】、次のことはどの程度あてはまりますか。それぞれあてはまるものを選択してください。



	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
自分の考えを論理的に構成することができる	291	1704	6180	3301
複数の選択肢の中から自分なりの根拠を示して結論を導くことができる	211	1329	6117	3817
自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができる	295	1984	5708	3487
自分で必要だと考えた学習や活動に取り組むことができる	267	1407	5315	4484
同じ目標に向けて他者と協働することができる	295	1223	4976	4975
他者の意見に惑わされずに自分の考えで行動できる	335	1837	5150	4151
相手の立場や考え方に共感することができる	191	827	4874	5575
大学で学んだことを利用して、社会に貢献したいと考えている	549	1664	4592	4662

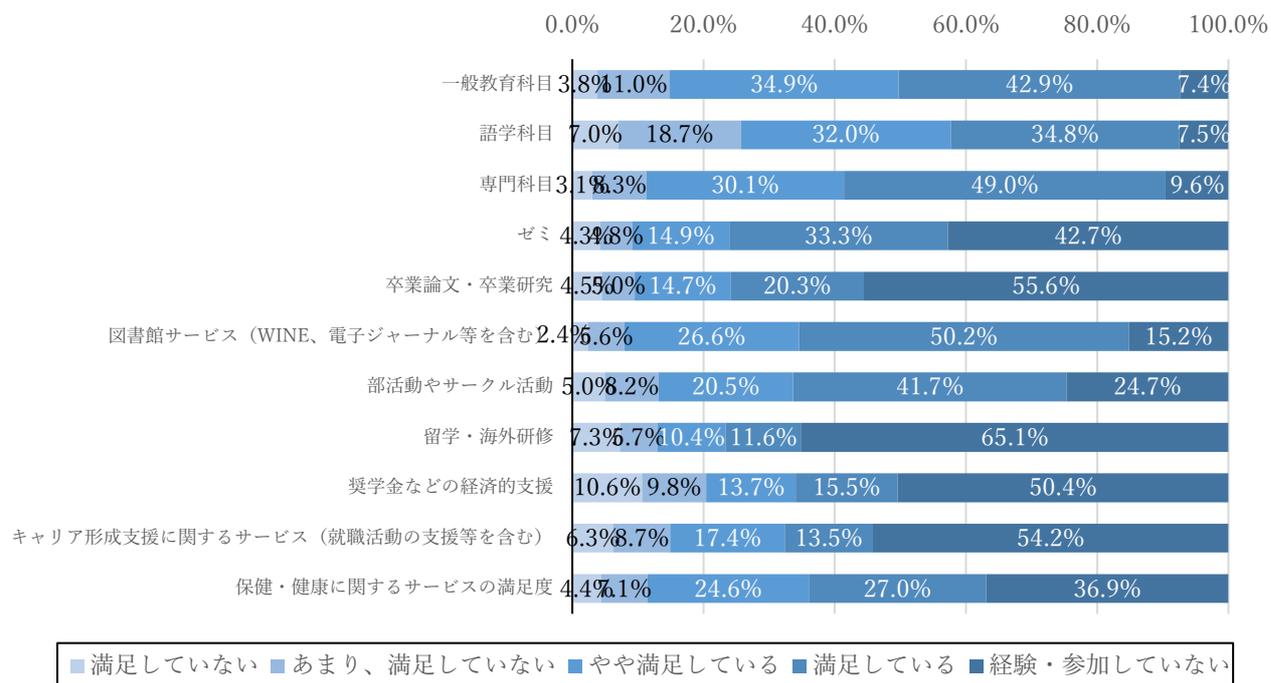
Q41. 【現在】あなたは、次のそれぞれについて、どれくらい身に付いたと思いますか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



	身に付いていなか った	あまり身に付いて いなかった	まあまあ身につ いていた	身についていた
新しいことに挑戦できる	324	1720	5375	4044
既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる	446	2880	5190	2940
物事を論理的に考えることができる	222	1313	5573	4349

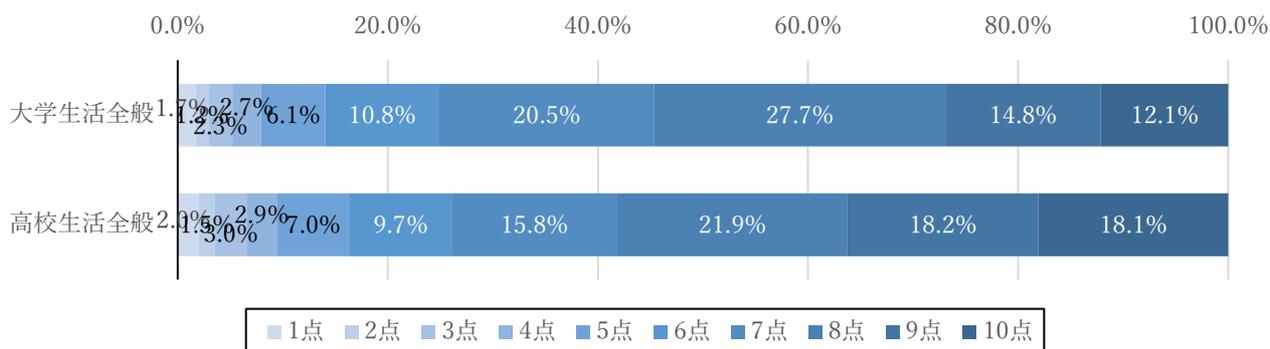
課題の解決方法を提案できる	243	1469	5784	3951
自分の考えを分かりやすく表現できる	291	1954	5614	3593
相手の状況や考え方を尊重できる	164	769	4757	5756
物事を多面的に考えることができる	187	1354	5262	4647
健全に批判することができる	293	1945	5669	3551
公正な視点で多様性を受け入れられる	189	940	5287	5041
異文化を理解できる	325	1595	4948	4580
外国語を理解し、話せる	1197	3498	4166	2588
公正で責任ある学術・研究活動ができる	519	2262	5478	3198
理論と実践（現実）の間にある、矛盾や葛藤を理解することができる	20	135	239	130
自分の思考と行動を俯瞰して捉え、これらをより良い方向に修正できる	17	108	268	130
政治分析（または、政治・経済分析）にあたり、物事を多面的に考えることができる	1	6	29	24
政治分析（または、政治・経済分析）にあたり、物事を健全に批判することができる	1	4	31	24
経済分析（または、経済・政治分析）にあたり、物事を多面的に考えることができる	2	3	19	31
経済分析（または、経済・政治分析）にあたり、物事を健全に批判することができる	2	5	19	29
自らの学問的発見を積極的に発信できる	6	23	77	62
環境・エネルギー分野における基礎知識と応用力	0	1	14	8
学問領域統合型アプローチによる実践的・戦略的な活動ができる能力	1	3	12	7
環境・エネルギー分野に高い見識を持ち、市民感覚を理解し、国際的視点で対処できる能力	1	1	11	10
社会との協働や社会のための技術・手法の開発・提案・実践を推進できる能力	1	3	13	6
独創的な研究を行い、研究成果を論文として取りまとめる能力	0	0	1	4
自身の研究領域に関する深い専門知識	0	7	28	12
学際的なアプローチに必要となる広範な知見	0	4	25	18
国際的な視座に根差した批判的思考能力	0	1	21	25
独自の考察を研究領域ごとの方法論に従い学術論文にまとめあげる能力	0	2	22	23
自身の研究領域に関する高度かつ今日的な専門知識	1	2	7	7
自身の考察に資する関連領域の専門知識	1	2	8	9
国際的かつ学際的な視座に根差した、独創性の高い学術論文をまとめあげる能力	0	3	8	9
研究者として自立し、国際的なフィールドで交流、発信していく能力	0	3	11	6

Q42. これまでの大学（大学院）生活を振り返り、授業や学生生活等の満足度についてどのように評価しますか。それぞれあてはまるものを選択してください。



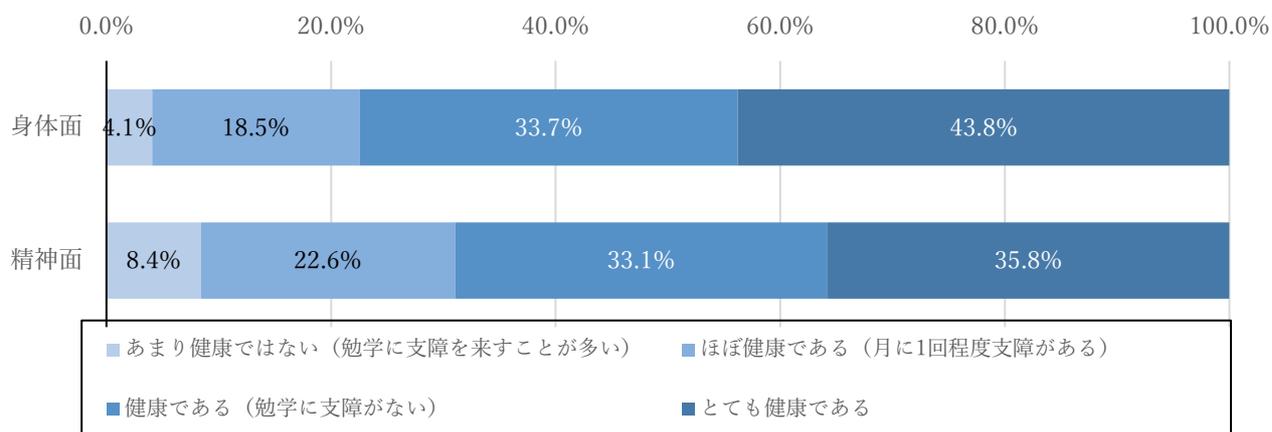
	満足していない	あまり、満足していない	やや満足している	満足している	経験・参加していない
一般教育科目	437	1259	3988	4898	841
語学科目	798	2137	3655	3971	859
専門科目	347	943	3418	5573	1088
ゼミ	483	546	1681	3768	4837
卒業論文・卒業研究	511	564	1659	2291	6288
図書館サービス（WINE、電子ジャーナル等を含む）	269	636	3034	5726	1732
部活動やサークル活動	565	931	2340	4751	2810
留学・海外研修	823	642	1177	1311	7368
奨学金などの経済的支援	1204	1109	1549	1760	5716
キャリア形成支援に関するサービス（就職活動の支援等を含む）	709	984	1977	1528	6144
保健・健康に関するサービスの満足度	495	810	2790	3068	4194

Q43. 大学（大学院）生活全般について、10点満点で満足度得点をつけるとすれば、何点になりますか。また、高校生活全般についても同様に得点をつけるとすれば、何点になりますか。



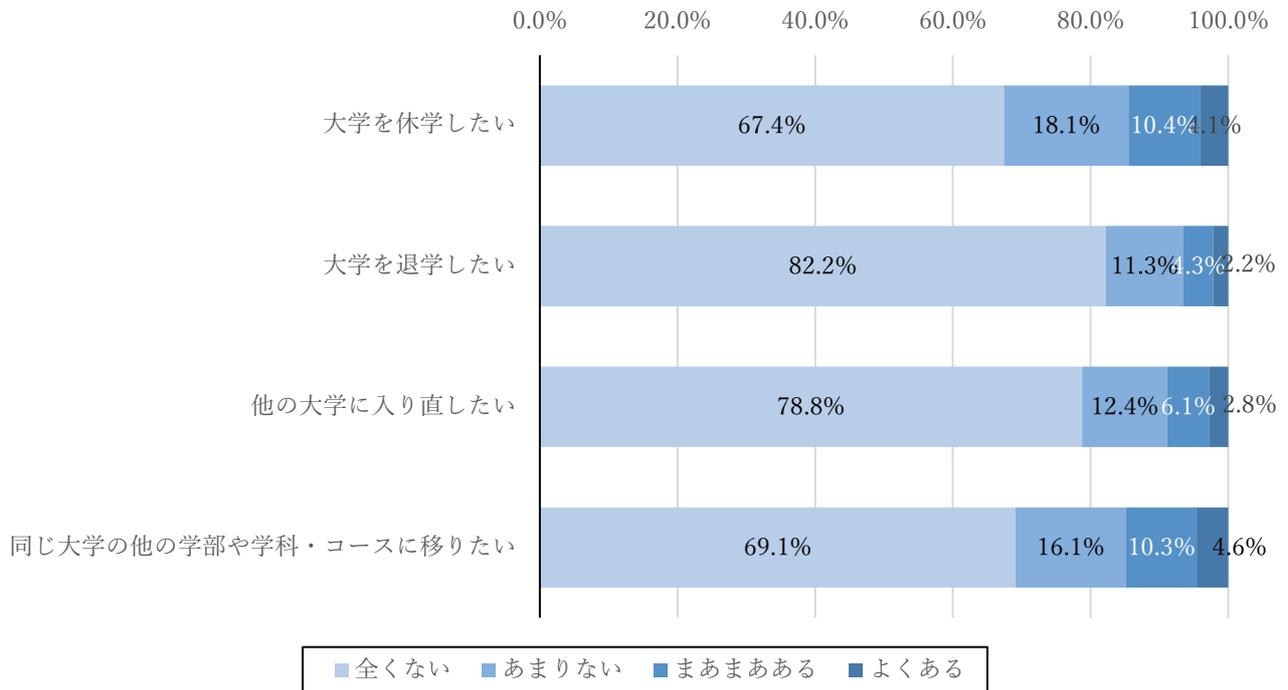
	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点
大学生生活全般	196	139	260	315	701	1243	2347	3172	1698	1389
高校生活全般	226	176	341	328	791	1098	1796	2488	2065	2053

Q44. あなたは現在、身体面・精神面で健康ですか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。この質問項目に回答したくない場合には、未回答のままで結構です。



	あまり健康ではない (勉学に支障を来すことが多い)	ほぼ健康である (月に1回程度支障がある)	健康である (勉学に支障がない)	とても健康である
身体面	456	2074	3781	4916
精神面	938	2530	3702	4003

Q45. 現在、次のような不安や悩みがありますか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。この質問項目に回答したくない場合には、未回答のままで結構です。



	全くない	あまりない	まあまあある	よくある
大学を休学したい	7465	2005	1152	454
大学を退学したい	9097	1252	475	242
他の大学に入り直したい	8706	1369	669	310
同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい	7639	1777	1135	506

2023年度 早稲田大学 学生生活・学修行動調査報告書

2024年3月

早稲田大学 大学総合研究センター

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 (7号館4F)